

2016年度春季（2017年2月～3月） 海外短期研修報告書

Report on Short Study Abroad Programs
February - March, 2017



お茶の水女子大学 国際教育センター
Ochanomizu University
Center for International Education

2016 年度春季短期研修報告書の発刊にあたって

国際教育センター長

森山 新

本報告書は、お茶の水女子大学の 2016 年度春季短期研修派遣プログラムにより、ハル大学（英国）、オタゴ大学（ニュージーランド）、モナシュ大学（オーストラリア）、ニューサウスウェルズ大学（オーストラリア）、カリフォルニア大学リバーサイド校（米国）、マギル大学（カナダ）、トムスク国立教育大学（ロシア）の 7 大学で研修を受けた計 53 名の学生の帰国報告をまとめたものです。派遣先は異なりますが、それぞれに慣れない生活様式や気候、異文化体験を新鮮に受けとめ、熱心に勉強し、現地の人たちと交流し、また、おいしい現地の食べ物を堪能して、どの学生もたいへん充実した、そしてかけがえのない体験をし、大きく成長して帰国したことが、生き生きと手にとるように伝わってきます。

本学では、2004 年より海外短期研修を開始しました。当初は英語語学研修プログラムのみでしたが、現在は、英語以外の言語の語学研修や、語学研修にインターンシップを加えたプログラム、派遣大学が開設する正規の専門科目の聴講等、さまざまな選択肢を備えた魅力的なプログラムを提供しています。また、本学が協定をもつ、英語圏の協定大学付属機関で英語の語学研修を受けたり、協定大学の正規授業を聴講したりすることで、本学の単位（コア科目英語）が 4 単位まで認定されることも、本学主催の短期研修の魅力です。さらに、2010 年度春季プログラムから、「インターンシップ科目」1 単位も認定されています。

本学主催の短期研修のもうひとつの魅力は、国際教育センターが研修の質を保証できるプログラムを提供していることです。研修の内容を精査した上で協定が結ばれた大学にのみ学生を派遣するという方針、渡航前オリエンテーションおよび「異文化適応」や「危機管理」に関する事前研修の提供、説明会に加え、前年度研修参加者との短期留学相談会を開催するなど、短期研修の効果を最大限に高める機会を提供しています。研修は比較的短期間ですが、事前準備から帰国後の振り返りまで、きめ細かく一貫したサポートをすることで、よりいっそう充実した研修を提供しています。

報告書を読むと、海外で実際に生活することで、さまざまな価値観に触れ、自身の視点の再考を求められることを実感し、確実にグローバルな視点や共生の姿勢を獲得して帰国した学生の姿が浮かびます。大学生活に留学を組み込むことを考えている学生のみなさんにもぜひ参考にさせていただきたいと思います。

本プログラムの企画・運営にたずさわる国際教育センターとしても、参加者に充実した体験を提供できたことを実感し、たいへんうれしく思います。この研修が学生一人一人の飛躍の機会として今後さらに充実、発展したものとなりますことを祈っております。

最後になりましたが、短期研修プログラム推進主担当として説明会や事前研修、個人相談等企画から運営まで尽力されたアソシエイトフェローの松田デレク先生をはじめ、協定担当の渡辺紀子先生、派遣を担当する長塚尚子さん、お茶の水女子大学国際課職員のみなさんなど関係者の皆様に、この場を借りて心から感謝いたします。

2017 年 9 月 吉日

目次

ハル大学（イギリス）	1
研修参加者からのアドバイス	32
モナシュ大学（オーストラリア）	41
研修参加者からのアドバイス	56
ニューサウスウェルズ大学（オーストラリア）	60
研修参加者からのアドバイス	69
オタゴ大学（ニュージーランド）	72
研修参加者からのアドバイス	79
カリフォルニア大学リバーサイド校（アメリカ合衆国）	82
研修参加者からのアドバイス	127
マギル大学（カナダ）	137
研修参加者からのアドバイス	160
トムスク国立教育大学（ロシア）	163
研修参加者からのアドバイス	170




UNIVERSITY OF Hull

期間：2月12日～3月26日

滞在：学生寮

参加費：約530,000円（授業料＋旅行代金＋宿泊代など）

奨学金16万円支給

研修内容

- ①週20時間の英語コース ②イギリス文化研究コース ③HULL 大学正規学部科目の聴講
④HULL 大学日本語クラス参加 ⑤現地小学校の訪問
コア英語4単位認定

春季ハル大学研修

文教育学部 人文科学科

1 学年 大國七歩



授業内容

私のいた英語のクラスは、お茶大生 9 人のほかに中国人、サウジアラビア人、クウェート人、ハンガリー人が在籍している、総勢 16 人のクラスでした。

英語の授業は 1 コマ 2 時間、週 10 コマありました。ライティング、リーディングと、ディスカッションとリスニングを含むコミュニケーションの授業に分かれていましたが、教師の質問に答える、ペアやグループで意見交換をするなど、どの授業でも発言を求められることが多くありました。私にとって最も勉強になったのは、エッセイの書き方です。英語圏では当然必要とされるスキルですが、通常の日本の教育では扱わないため有意義

だったと思います。

1 コマ分は英語教師を目指す学生たちによる教育実習を兼ねて行われていて、教職課程をとっている私にとっては見ていてとても面白く勉強になる授業でした。

私はこれらに加え、Aspects of British Society and Culture という授業を聴講しました。イギリスの食べ物、パブの今昔やそこでの振る舞い方について、イギリスの統一の歴史とスコットランドについて、苦情や皮肉の言い方などを題材に、イギリス人、主にイングランド人の精神性について考えました。全く知らなかったことが多かった上、意識して見ていると実際にイギリス人が授業で聞いた通りの行動をとることが観察できてとても面白かったです。こうした内容は現地学生との話の種にもなりました。また、留学生向けの授業だったので学生たちそれぞれの出身国の話を聞くことができ、異文化理解という意味で非常に意義深い経験ができました。

課外活動

日本語の学習の手伝いをする代わりに私たちが英語を教えてもらうという、Language exchange 制度がありました。私には 4 人のエクステンジパートナーが割り当てられましたが、中には正規の学生でなく週に一回大学に来て個人レッスンを受けている社会人、大学と関係なく個人で日本語を勉強している社会人もいました。私は家が遠い 1 人を除いた 3 人にはほぼ毎週会い、お互いの日本語、英語の宿題に取り組んだり雑談をしたりしました。その過程で、日本人の子供が日本語を学ぶ時と大人が外国語として日本語を学ぶ時では色々と違いがあるということが分かり面白いと感じました。

Japanese Society というサークルのメンバーが最初から最後まで様々な面でサポートをしてくださり、多くの時間を共に過ごしました。

キングストン・アポン・ハルでの生活

大学から私たちが住んだ寮までは歩くと一時間程度かかります。寮はシティセンターの近くだったので、15分歩いて駅まで行き、そこから20分ほどバスに乗って大学へ通っていました。ハル全域乗り降り自由の weekly ticket が便利です。電車を使うのは遠出をする時のみでした。



私のハウスには5人が住んでいて、シャワー、トイレ付きの1人部屋で、キッチンのみが共用でした。新しく設備が良いハウスだったので、他の研修生よりもかなり快適に過ごさせていただいたと思います。また5人中3人がお茶大生であったこともあり、住民間のトラブルは一切ありませんでした。とはいえ、3日に渡りシャワーからお湯が出なくなったりトイレの水が流れなくなったり、夜中に大音量で火災報知器が鳴ったりなどと問題は起きました。また、2時間おきにヒーターが切れるように設定されていて、初めの頃には寒さで夜中に目覚めるようなこともよくありました。

イギリスのEU離脱関連の問題のため英ポンドが安くなっていたこともあり、ハルの物価は基本的に安いと感じました。特にパンなどの最低限の食品や衣料品は店を選べばかなり安く買うことができます。また、イギリスは食べ物がまずいとよく言われますが、私はそのようには感じませんでした。

研修を終えて

ハル大学は留学生が多く国際色豊かな学校なので、様々なバックグラウンドを持つ人々と出会うことができます。私にとって何よりも充実した楽しい時間は、彼らとの授業内のやりとりやパブでの雑談でした。イギリスや他の国々の文化や社会について知り、人間というものについて考えることはとても面白く意義深いものでした。これは、一ヶ月半という期間、学生として大学に在籍することにより可能になった貴重な経験であると思います。また会話を通して、通じる英語、使える英語を学ぶことができました。

とても楽しく有意義な時間を過ごすことができ、幸せな6週間でした。出会った全ての方々に感謝しています。

春季ハル大学語学研修

理学部 生物学科

1年 大土井実都



大学のメインエントランス付近の様子

2017年2月10日から3月25日まで約6週間イギリスのヨークシャー地方の南に位置するハル大学にて参加した研修について振り返りたいと思います。

授業内容

ハル大学では主に2種類の授業を、それぞれ2人ずつの先生方についてもらい毎回約2時間、週あたり約10回受けました。これらは一貫したテーマを持つ1つのコースに含まれた授業で、次年度からイギリスの大学で勉強することを

目指している留学生向けの1年間で完結するコースに6週間だけ参加させていただく形になっていました。そのため授業内で扱うのはアカデミックイングリッシュで、エッセイ、ディスカッション、プレゼンテーションなど実践的なことを交えつつ必要な表現や語彙を学びました。特にアカデミックエッセイは扱う機会が多く、提出が多かったためとても大変でした。ですが、かなり丁寧にそれぞれ担当の先生が添削をしてくださったのでありがたかったです。先生方は全員とても気さくな方々で話しやすく、多少私の話している英語の文法が間違っていたり表現が奇異であったりしても熱心に、理解してくれようと真摯に私の意見に耳を傾けてくださいました。同じクラスにもともといたメンバー(1年完結のコースを取っているメンバー)も皆親切で日本人のグループもすんなり受け入れてくれていたように感じました。私の参加したグループのメンバーはクエート、サウジアラビア、中国、ハンガリーからの出身でした。クラスはお茶大からのメンバーともともといるこのメンバーとがだいたい半々か、お茶大からのメンバーの方がわずかに多いくらいで構成され、この構成のグループが2つありました。授業はややゆったり進行され、プリントなどを扱い特定の表現やボキャブラリーをきちんと理解しながら学び進めることができ、エッセイの提出や、ディスカッション、プレゼンテーションで実際に使ってみることができました。このため新しいことを身につけていくことの実感がわき自信に繋がりました。扱っていたテーマは環境についてだったので、ボキャブラリーはほとんど環境についてで、特に滞在中はリサイクルと公害・環境汚染・環境問題についてでした。私は生物学科所属なので日本で学んでいる領域と扱うボキャブラリーがかぶるところもあって非常に今後の助けになったと思います。

課外活動

ハル大学のシステムでタンデムパートナーという、お互いに語学学習を助け合うパート

ナーを持つことができ、またドロップインという交流会の延長のようなこれもお互いに言語について質問し合うものに参加しました。タンデムパートナーは私には5人いて、一番よく会っていた人には週に1回1時間から1時間半程度話しました。私はハル大学で受けている授業で扱ったアカデミックライティングやメールでの表現がフォーマルかファーマルでないかについてに関わる質問を主にして、パートナーの子は日本語の授業でやった内容を話してくれたりそれについて質問をしてくれたり、宿題について私に聞いてくれたりしました。ドロップインについては、私の参加した回はほとんど交流会のような雰囲気、何か特別なことといえばたまたま話した子が日本語のスピーキングのテストを間近に控えていたのでその発音チェックをしたくらいでした。

もう一つ、ティーチングイングリッシュを学んでいる人と一緒に私はボランティアとしてプラナクションセッションを行いました。私のペアは週に1回、3週間に分けてセッションを行い私の発音のくせや私が苦手意識を持っている発音の側面に沿ってネイティブスピーカーとの発音の違いについて探りました。ただ私がすることはパートナーの方が用意してくれたスクリプトを読んだりインタビューに答えたりといったことだけだったので結果として相手の方がどのように報告書をまとめたのかはわかりませんが後で聞いてみたいと考えています。



ハルの夕方風景

少し歩いた所からハルの駅までたくさんお店があり、また3つの大きなショッピングセンターもあるので必要なものはなんでも揃えることができとても充実していました。また、街並みがとても美しく、美味しいケーキ屋さんやカフェ、レストランも多く研修が始まる前に考えていたよりはるかに多く外出しました。またミュージアム・ギャラリーの入場料が無料だったため休日にそこに行ったり、ヨークに観光に行ったりして楽しい時間を過ごすことができました。

現地での生活

滞在していた場所は大学の寮のパシフィックコートというハル川沿いのところでした。パシフィックコートには棟がいくつかあり、その棟やさらにその中の階によってもかなり設備にばらつきがあり初めはなれませんでした。フロアメイトの子達がとても親切だったのでむしろ困ったことが会ったおかげで話す機会が増やせてよかったと思います。寮からすぐ近くには有名なパブがあり、

ハル大学研修を終えて

文教育学部 人間社会科学科
2年 古幡裕美

長期の留学に行く勇気と明確な目的がなかった私は、春休み期間のお手軽な留学なら行ってみたい！と思い、このハル大学短期研修に申し込みました。他にも様々な留学プログラムがあったわけですが、昔からヨーロッパへの強い憧れを持っていたこと、かつイギリスの生活を味わえるということで、ハル大学を選ぶのに迷いはありませんでした。さて、これから14人の仲間たちと歴史情緒あふれるハルの街で過ごした6週間の日々を紹介していこうと思います。

【授業内容】

ハル大学の英語の授業は週20時間あり、2つのグループに分かれてそれぞれ違う時間割で行われます。クラスには、英語を外国語として学ぶ中国やサウジアラビア、南スーダン出身の学生がいて、年齢も国籍もバラバラな環境のなかで一緒に勉強します。日本では大教室で先生一人が喋っているのを生徒が聞くだけというスタイルが主流ですが、この研修では、小さな教室で行い、一人一人の発言が求められるような授業になっています。「環境問題」という一貫したテーマのもと、エッセイの書き方やリスニングなど様々な内容の授業が行われました。毎回の授業後に出される尋常じゃない量の課題に加え、最終週に提出する1000~1500字のエッセイや、グループディスカッション・プレゼンなどのかなり大変なタスクもあったため、休む時間などほとんどありませんでした。



そして、時間割の空いているところで、自分の興味のある分野についての聴講の授業も受けることができました。私は、イギリス文化についての授業と、宮入先生のアニメを通して日本文化について考える授業を受けました。イギリス文化の授業は、食文化から国の成り立ちまでの様々なトピックについて扱っていましたが、なかなかついていくのが大変でした。一方で、宮入先生の授業は身近なテーマでありつつ、改めて日本人として向き合わなければならない問題がたくさんあるなど再認識するような興味深い授業でした。

【現地の学生との交流】

この研修で一番お世話になったと言っても過言ではない存在が、Japanese Societyのメンバーです。彼らは、私たちがハルに到着した時の荷物運び(なんと深夜

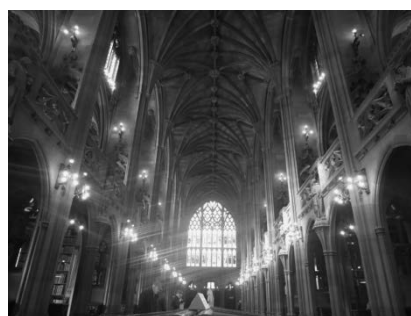


12時近く)から始まり、生活の全てをサポートしてくれました。ハル大学では、毎週水曜日の午後はサークル活動の時間に充てられているため授業がなかったので、ボーリングや Bigfun というアスレチック、シューティングゲーム、映画などに連れて行ってくれたり、毎週ごはんを食べに行ったりしました。そして、こちらが日本食を作り、Society のメンバーが自国の料理を作ってくれるパーティーも数回行いました。イギリスの学生が楽しんでいることを実際に私たちも楽しむことができ、とても貴重な経験となり、また、親交を深める良い機会となりました。

そして、ハル大学研修の一番の特徴だと思うのが、Language Exchange Partner (Tandem Partner) との交流です。日本人 1 人に対して、日本語を学習する現地の学生(と言っても年齢はとても幅広いです)4,5 人が割り振られ、こちらの英語の課題を見てもらい、相手には日本語を教えるといったことをします。彼らとは、メールや Facebook など連絡を取り、ご飯に行ったり、家に招待してもらったりしたこともあります。なかなか全員と平等に連絡を取り続けるのは難しいと思うので、気の合う人を見つけて仲良くするのも一手かなと思います。

【休日の過ごし方】

平日は、時間割にもよりますが、毎日大学に行き授業を受けていましたが、休日のほとんどはイギリスの色々な街を巡っていました。私が訪れたのは、Beverley, York×2, London, Manchester の 4 つです。それぞれの街にはそれぞれの魅力があり甲乙つけがたいのですが、やはり London は別格でした。土日を使ってプチ旅行をしましたが、2 日間ではとても回りきれないほどたくさんの観光スポットがありました。また、個人的にオススメなのが Manchester です。近代的な建物と歴史的な雰囲気が入り混じりあったとても魅力的な街でした。是非お出かけしてみてください！ちなみに、イギリスではアフタヌーンティーを合計 4 回いただきました(笑)



【総括】

留学に行けば勝手に英語力が身につくというわけではなく、いかに自分から積極的に英語を使うかが大事ということを感じた研修となりました。この研修をきっかけとして、長期の留学も視野に入れていこうと思うようになりました。そして、現地で出会った友人たちとの縁を大切に、この経験を様々な場で有効活用していこうと思います。

Hull での研修を終えて

生活科学部 人間生活学科

1年 柴田明日香

授業・プログラム内容

この研修では、2 時間の授業が週に 10 コマありました。Environment をテーマに、Listening、Reading、Speaking、Writing すべての分野を広く学びました。1 クラスの人数は 15 人程度で、お茶大生の他に、中国・サウジアラビア・クウェート・ハンガリー出身の人がいて、年齢も様々でした。授業中はクラスメイトと話し合いをする機会が沢山ありましたが、お互いそれほど英語を上手く使いこなせない上に、それぞれ母語の影響を強く受けた発音の仕方でするので、理解するのが困難なこともしばしばありました。しかし、こうした意見交換を通じて、多様な価値観が学べました。

聴講では、Aspects of British Society and Culture という授業を取りました。イギリスの食文化やアイデンティティについて、他の国との比較も交えながらの講義でした。この授業では、動画や画像が多用され、比較的理解しやすいものでした。内容も興味深く、イギリスで生活していく上でも役に立つ部分があったのではないかと思います。

また、プログラムの一環として、現地の小学校へ訪問しました。小学校では子どもたちが日本文化について学んでいて、その一部に参加しました。浴衣を着て教室に入ると、沢山の子どもたちが寄ってきて、話しかけてくれました。休み時間には子どもたちの遊びにも混ぜてもらい、子どもたちと楽しく交流することが出来ました。しかし、子どもたちの話す英語はとても早く聞き取るのはとても大変なこともありました。また、授業では、日本食の Test Tasting を行っていて、日本人の私からすると、とても興味深いものでした。Japanese Vegetable として紹介されていた、もやし・にんじん・キャベツの炒め物や、緑色をしていない Green Tea、そしてそれらを試食した子どもたちの反応は、日本食が海外の人からどのように考えられているのかを知貴重な経験となりました。

留学中の生活

普段実家暮らしの私にとって、寮での生活はとても良い経験となりました。トラブルもいくつかありましたが、管理人と連絡を取ったり、フラットメイトに助けてもらったりして、大きな問題なく過ごすことが出来ました。

また、食事に関して、私はイギリスで沢山の美味しい食べ物と出会いました。イギリスの料理は美味しくないと思っている人は少なくないと思います。しかし、Hull には美味しくて素敵なレストランやカフェ、パブが沢山ありました。どのお店も雰囲気の良いところばかりで、いろいろなお店に食べに行くのが楽しみの一つでした。

休日にはいろいろな場所へ遠出しました。Hull からバスで 40 分ほどの Beverley、電車で 1 時間ほどの York と Leeds、そして一泊二日で London に行きました。どこもそれぞれ違

った魅力があり、とても良い体験が出来ました。

課外活動

この6週間がこれほど充実し、素晴らしいものとなったのは、Japanese Society の存在が非常に大きいと思います。Hull に到着したその日から、夜12時前という時間にもかかわらず、寮での荷物運びを手伝ってくれ、その翌日には一日かけて周辺を案内し、買い物につきあってくれました。この Society のメンバーのおかげで不安なく現地での生活をスタートさせることが出来ました。その後も、週に2回ほどイベントを企画してくれ、ボーリングやレーザーガンを使ったゲーム、映画、パブでの集まりなど、とても楽しくみんなと交流しました。私たちのために沢山のことをしてくれた Society のみんなに、心から感謝しています。

また、Tandem Partner という日本語を学ぶ学生との交流では、5人の学生と交流する機会が与えられました。雑談をしたり、日本語の課題を手伝ったりする中で、お互いの国や文化・言語の違いを学びました。日本語を教えるのはとても難しく、良い経験となりました。

Society のメンバーの1人と、Tandem partner のうち2人とは、個人的に何度も遊ぶほど仲良くしてもらいました。ある女の子は本当に日本が大好きで、日本食にもとても興味を持っていました。彼女は私を家に招いてくれ、オムライスや親子丼など日本料理の作り方を教えました。Tandem Partner 2人とは、食事や買い物に出かけたり、スケートに連れて行ってもらったりしました。この3人とはとても気が合い、本当に楽しく、素敵な思い出を作ることが出来ました。

Society のメンバー
との思い出



この6週間の研修を経て、英語が上手に話せるようになったかということ、正直そうは思いません。しかし、確実に Listening の向上と沢山の学びを得ました。そしてなにより沢山の新しい出会いは、私にとって大きいものとなりました。この研修に携わった方々に感謝し、今後も英語の学習に励みたいと思っています。

世界が広がった 45 日間

文教育学部 人間社会科学科

1年 新保祐奈

私は大学で1年間学生生活を送って、「自分は一体何がしたいのか、どんな人になりたいのか」を深く考えるようになりました。好奇心が強く、様々なことに取り組む意欲がある点は自分の長所だと感じていますが、1年間多くのことに手を出した挙句、自分は何を芯として生きていきたいのかを少し見失ってしまいました。この短期研修の知らせを聞いたとき、外国人との新しい出会いを通して自分を見つめ直せるのではないかと感じ、応募を決めました。また、2年生からグローバル文化学環に進み海外の文化により深く目を向けることになるため、その学びのヒントをハルに貰いにいったとも言えます。

日本の喧騒から離れ、英語を通してたくさんの人と関わることができたこの45日間は、私にとってかけがえのない財産となりました。以下、私に特に影響を与えてくれた2つのことについて報告します。



[←University of hull の図書館]

○授業内容

週に1コマ90分から120分程度の授業が10コマ入っていました。3人の先生が主に3つずつ授業を担当してくださり、水曜日の1コマ分だけは別の先生がいらっしゃいました。授業は、お茶の水女子大生15人と、大阪の大学からの留学生3人が9人ずつのグループに分かれ、中国系やアラブ系、アフリカ系の学生がいるクラスにそれぞれ混ぜてもらい、ともに学ぶ形でした。お茶大で取れるコミュニケーション英語の講義に形態が近い授業だと私は感じました。研修最終週に環境問題に関する1000～1500wordのエッセイを提出することが義務付けられていたので、それに合わせて環境問題に関するトピック(air pollutionなど)を扱いながら全ての授業が進んでいきました。Vocabularyを増やすこと、原稿を見ずに自分の主張を英語で述べることを何度も先生から求められたことが印象に残っています。

私は授業を通して、間違いを恐れず積極的に英語を話そうとする姿勢を身につけられました。はじめは、上手に英語を話そうとする意識が伝えようとする意識よりも自分の中で強く、何か言葉を発する前に頭の中で文を組み立てながら準備をしてしまう傾向がありました。でもそれではディスカッションの流れには置いていかれてしまうし、間をもたせすぎること聞き手を飽きさせてしまうこともあります。先生の「多少の文法の間違ひは気にしないでいいから滑らかに話すことを意識しなさい」という言葉を念頭に置き、ディス

カッションやプレゼン、授業時の発言などたくさん場数を踏んだことで、積極的かつ楽に、英語で発言できるようになりました。自分の殻を破り、時にはボディランゲージも効果的に使いながら話すことの大切さを学びました。



[↑研修先で誕生日を迎えたため、サプライズで祝ってもらいました。]

○ハルでの友人

Japanese Society という大学のサークルが、週3回の頻度でイベントを用意して一緒に過ごしてくれました。いつも私たちが気にかけてくれる、日本が大好きな優しい学生さんの集まりでした。また、Language exchange partner という語学交流のパートナー(1人につき4~5人つきました)にもお世話になりました。彼らの優しさにたっぷり甘えさせてもらった45日間だったことはもちろん、帰国した後も連絡を取り続けるほど仲の良い友達になってくれたことも含め、彼らには感謝しかありません。大好きなディズニーの話が英語でできたことはとても楽しかったし、彼らのジョークに必死でついていこうと頑張ったことも、今では良い思い出です。空き時間に図書館で話したり、大学の近所の Newland Avenue というおしゃれなカフェが沢山ある通りに連れて行ってもらったりして交流しました。週末には、York や Manchester, Beverly などイギリスの主要な観光都市へも案内してもらいました。観光先の建物を「あれは何？」と聞くだけでも会話の種になりました。彼らとの交流を通して、自分から会話の輪に飛び込んでいき、積極的に英語を話そうとする姿勢の重要性を毎日痛感していた気がします。次、彼らが日本に来てくれた時は、さらに英語を上達させ、私ができる精一杯のおもてなしをしようと決めています。

ハルで過ごした45日間は、私の世界を広げてくれました。この経験を糧に、今後も積極的に学ぶ姿勢を大切に、自分の芯を見つけていきたいです。

ハル大学短期研修を終えて

理学部 情報科学科

1年 田中波輝



参加動機

私は、海外旅行に毎年1回は行くため海外に慣れてはいましたが、英語を話すことが苦手で強制的に英語を話さなければいけない環境で少し長い間生活してみたいと思い参加しました。また、一度も親元を離れたことがなく、一人暮らしをしてみたいとも思っていました。

授業内容

授業は、Environment and Energy というテーマをもとに、listening, academic writing, reading, speaking を勉強しました。一週間に一回程度 300 字以上のエッセイの課題が出て、研修の最後の方ではディスカッションやプレゼンテーション、そして 1000 字から 1500 字のエッセイの課題が出ました。研修の最初は宿題の内容が聞き取れず大変でしたが、先生方はとてもゆっくり話してくださるので、慣れてくると大体は聞き取れるようになりました。また、質問すれば丁寧に一から教えてくださるので、たびたびメールや直接先生の部屋に訪ねました。クラスには、中国人やサウジアラビアの人がいて、お互いの文化の違いなども授業の話し合いで分かるのでとても興味深かったです。また国ごとに英語になまりが加わっていて、聞き取りづらいこともありましたが、互いにコミュニケーションが取れた時はとても嬉しかったです。



小学校訪問

イギリスに着いてから4日後に2日間の現地の小学校訪問がありました。1日目は小学生の名前をカタカナで書いたり日本の文化を教えたり、2日目は小学校の周りを浴衣を着ながらパレードしました。小学生の英語はとても早く、コミュニケーションをとるのが大変でしたが、日本について多くの質問をしてくれたので、皆と打ち解けることができ、とても楽しかったです。

寮生活

寮の環境は決して良いとは言えないものでした。キッチンでは毎晩遅くまで party が行わ



れていてとても騒がしく、毎朝たばこの吸殻やお酒が散らばっていました。暖房は毎週のように壊れるので管理人さんに問題を伝えるのも1つの勉強だと思い、壊れるたびに直してもらいました。Floor mate はとても優しくいつも声をかけてくれて、お互いの勉強していることや、出身地の話で盛り上がりました。

Japanese Society との交流

Japanese Society の方々には多くのことをしていただきました。毎週水曜日は Big Fun やボーリングに連れていってもらい、授業終わりはおしゃれなカフェに一緒に行きました。土日は遠出して、ヨークやビバリーに行き、色々なところに案内してもらいました。Tandem partner という日本語を勉強している人達が日本人学生1人につき4~5人割り振られるという制度もあり、面白かったです。Tandem partner とは週に1回程度、大学の図書館等で会い、英語のエッセイを見てもらったり、逆に日本語の課題を教えたりしました。

最後に

このハルでの45日間の生活は私にとってかけがえのないものとなりました。研修を通して、もっと勉強しなければいけないとも、もっと勉強したいとも思えるようになりました。大学の授業の聴講により海外留学というものを甘く見ていた自分に気づき、将来の夢に関してさらに深く考えることができたのではないかと思います。英語でコミュニケーションを取れなかった時はとても悔しかったので、それをばねにまたどこかに留学するときまでに勉強しようと思います。

イギリス・ハルでの六週間

文教育学部 言語文化学科

1年 町田純花

授業内容



授業では「環境問題」という大きなテーマをもとに、ライティング・スピーキング・リスニングなどの様々な活動を行いました。クラスは十数名の少人数で、中国・サウジアラビアなど様々な国籍の人と一緒に授業を受けました。自分と母語が異なる人と一緒に英語を勉強するという事は日本ではなかなかできない体験であるため、非常に新鮮でした。授業を担当して下さった

3人の先生はとてもフレンドリーでユーモアに溢れる方たちでした。留学中の主な課題は300～350語のエッセイが2つと1,000～1,500語のファイナルエッセイです。エッセイを書く過程では文献の引用方法などについて先生方が細かく指導して下さり、また提出後も細かく添削をしていただいたため、英語で学術的な文章を書くための知識と力を大いに養うことができました。その他には自国の環境汚染についてのグループプレゼンテーションや、環境問題についてのグループディスカッションなどの活動も行いました。これらの活動では「自然に英語を話すこと」「英語を使って他のメンバーと積極的に交流すること」の二点が重要視されました。これらの活動を通しては、英語力だけでなく国際的なコミュニケーション能力を養うことができました。

課外活動

最初の週には、地元の小学校で浴衣を着て文化交流活動を2日間行いました。

1日目は子どもたちがはっぴに日本語で自分の名前を書く活動を行っており、私たちはそれを手伝いました。私たちが当たり前に使っているひらがなやカタカナは子どもたちにとってはとても新鮮であったようで、文字の書き方には個性が出ていて面白かったです。お昼休みには給食をいただき、授業の合間には子どもたちとおしゃべりをしたり鬼ごっこやかくれんぼをして遊んだりしました。2日目は小学校でJapan Paradeが行われていました。子どもたちが前日に作ったはっぴを着てパレードをした後、彼らと一緒に習字や折り紙をしました。また、夕食には特製のお寿司が振舞われ、子どもたちに箸の使い方を教えながら食事をしました。子どもたちに日本の文化について伝えるという活動は、同時に自分の持つ文化的な背景や日本の良いところを見つめ直すきっかけとなりました。

イギリス・ハルでの生活



イギリスに到着したばかりの頃はトラブルの連続でした。(笑) シャワーのお湯が出なかったり、部屋の暖房がつかなかったり、バスルームに閉じ込められたり…何不自由ない生活、という訳ではありませんでしたが、寮の管理人さんに電話やメールをするなどして、自分の英語で助けを求める能力を培う良い機会であったと思います。管理人さんやフロアメ

イトはとても優しく、私が困ったときにはいつも親切にしてくださいました。寮のインターネット環境については有線と Wi-Fi がありましたが、私の部屋は最後まで Wi-Fi が使えなかったため、日本から持参した LAN ケーブルとアダプターで Mac を有線ネットワークに接続し、Mac 経由で Wi-Fi を飛ばして使っていました。

ハルでの滞在中にいちばんお世話になったのが Japanese Society というグループのみなさんです。イギリスに到着した直後は、寮に到着したのが現地時間午前 0 時前であったにも関わらず部屋まで荷物を運んでもらったことから始まり、ハルの街中の案内や買い物の手伝いをしてもらうなどのサポートをしていただきました。彼らのおかげで初めての外国での生活にもすぐに馴染むことができました。また、放課後にはカラオケや食事会などを企画してもらい、交流を深めました。週末に電車で 1 時間ほどかけて York までみんなで遊びに行ったのも良い思い出です。

Language Exchange という企画では大切な友達ができました。この企画では日本語を勉強している現地学生とパートナーを組んで、メールでやりとりをした後に実際に会うという企画です。私には 5 人のパートナーが配分され、それぞれと一緒にランチをしたりカフェに行ったり、またお互いの宿題についてアドバイスをし合ったりしました。その中で特に思い出深いのは、マレーシア出身の女の子と一緒に日本料理を作ったことです。イギリスに来てしばらくすると和食が恋しくなっていたのですが、久しぶりに日本米や味噌汁を食べることができて本当に嬉しかったです。また、英語で会話をしながら協力して料理を作るという体験はとても貴重なものでした。

言語の通じる住み慣れた日本を離れて外国で暮らすということは決して簡単ではありませんでしたが、そうした環境であったからこそ人の優しさや温かさに気付くことができ、非常に有意義な六週間を過ごすことができました。いつかまた機会があればイギリスを訪れたいと強く思っています。

春季ハル大学短期研修

生活科学部 人間生活学科

1年 藻谷美月



授業内容

授業は週 10 コマ、一コマ 2 時間 (実質 1 時間 40 分) です。Academic Listening and Speaking, Academic Reading and Writing, Extended Reading, Writing and Study Skills, Language and Topic Support Classes の 4 つの授業があり、学術的な英語のスキルを満遍なく学ぶことができます。今回の研修期間はテーマが environmental problems で、主に pollution, recycling, alternative energyなどを題材に授業を受けました。Listening and Writing の授業は週 3 コマあり、discussion や listening から自然な英語を話す力や積極的に話す力を身につけられます。期間中に group discussion が 2 回、presentation が 1 回、listening が数回あり、discussion や presentation は先生やクラスメイト良かった点、直すべき点をコメントしてくださりととてもためになりました。Reading and Writing の授業は週 3 コマあり、主に文章の要点を読み取り要約する力を身につけられます。ほぼ毎週 300words 程度の課題が出て大変でしたが、先生が表現や単語に関するコメントをくださるので、学術的な文章の書き方を学ぶことができ、最終課題である essay にも役立てることができます。Extended reading のクラスは週 2 コマあり、final essay に直接かかわってくる授業です。私たちは最終的に 1000~1500words の essay を提出することになっていました。この授業では essay のタイトル、構成、内容などの進捗状況を先生に見てもらいました。また、普段の授業では文章を読んで問いに答えたり、vocabulary quiz をしたりなどしました。Language and Topic Support のクラスは週 1 コマあり、ここでも essay の確認をさせていただきます。その他にも essay に使えるような表現などを教えてくださいました。この他に、週に 1 コマ Teaching Practice の授業があります。これは英語教師を目指す現地学生が行う授業で、1 人 1 時間ずつ、一回の授業で 2 人の先生から授業を受けます。テーマ (今回は environment) に関する授業で、授業に慣れていないためか喋るスピードが速いなど大変でしたが、わからないところは質問するとお互い勉強になり良いと思いました。

現地学生との交流

留学期間中は主にハル大学の Japanese Society のメンバーが様々な面でサポートしてくれます。Japanese Society はハル大学で日本語を学んでいる学生、日本に興味のある学生の集まる団体です。到着翌日の土曜日にはハルの街を案内してくれ、スーパーでの買い出しにもつきあってくれました。また、毎週水曜日にはイベントを企画し、夜に希望者で遊び

に行きます。土日はYork への日帰り旅行や美術館巡りを企画してくれたり、個人的に声をかけてごはんや遊びに行ったりすることもできます。私たちは寮に彼らを招待して日本食をふるまったり、お返しに彼らの手料理をごちそうしてもらったり、寮でゲームを持ってきてもらって遊んだりしました。また、私たちには一人4,5人のLanguage exchange partnerがつきます。彼らはハル大学で日本語を学ぶ学生で、Japanese Society のメンバーも含まれているし、社会人の方もいます。パートナーとはお互いに宿題のチェックをしあったり、おいしいカフェやレストランを紹介してもらったり、自分で予定を決められます。日本語を教えるのは考えもしなかった質問が飛んできたり、英語で何というのかわからなかったり難しかったですが、とても面白かったです。毎週水曜日には Drop-in session があり、自分のパートナー以外の学生とも交流ができます。Drop-in session は私たちが待っているとところに学生が自由に訪れ、勉強に関する質問をしたり、おしゃべりをしたりする場です。

課外活動

現地小学校の訪問はとても楽しかったです。私は7,8歳のクラスに行きましたが、みんな熱心に勉強しており、日本についてたくさん質問してくれました。Japanese Parade 当日には名前を日本語で書くブースにいました。保護者の方々も興味を持ってくださり、皆さんに楽しんでもらえてうれしかったです。また週末は、Beverly, York, London などを訪れました。伝統ある Minstar や古い町並み、お買い物やアフターヌーンティーなどを満喫できました。



イギリス・ハルでの生活

私たちが滞在した Pacific Court は大学へのバスが出る Hull Interchange (ハル駅)から徒歩約15分、大学までは徒歩とバス合わせて35分ほどのところにありました。4つある建物のうち、私はBlock4 という一番新しく、シャワー・トイレが部屋についているところでした

が、滞在1週間目に温水が故障しトイレも流れなくなるなどのトラブルがありました。数日で修理は終わりましたが、そのチェックのために外出中に勝手に部屋に入られました。キッチン共同で、ルームメイトの厚意でアルミホイルや鍋などを貸してもらえました。食材が勝手に使われるといったこともなかったです。ハルは貧困が問題になっており、そのため物価は安いですがホームレスの方などもよく見かけました。また、金曜や土曜の夜はお酒を飲んでいる人で特に騒がしく、喧嘩なども見かけたのであまり一人で歩かないほうが良いと思いました。

ハル大学研修を終えて

文教育学部 言語文化学科
1年 横山智美



授業について

お茶大生は二つのグループに分かれて、英語を学んでいる学生のクラスに入って週 20 時間、reading や writing、speaking & listening の授業を受けた。すべての授業で共通テーマとして environmental problems が設定され、環境問題に関連した energy や pollution について扱った。各授業では頻繁に課題が出された。大きな課題として、1000～1500words の essay を提出した。

クラスには中国人やサウジアラビア人、南スーダン人が学んでいた。彼らの speaking の力や、それに対する姿勢に驚いた。授業では先生が全体に向かって質問を投げかけたり、隣の人に自分の考えを述べたりなど、発言を求められる機会が多かったのだが、彼らは自分の答えられることはどんどん発言していた。先生が設定した discussion のテーマについてその場で自分の意見を素早くまとめていた。私は、はじめは彼らの発言スピードについていけなくて聞き取れず、また自分の意見をうまく言葉にできずに苦労した。

また、ハル大学の正規授業の聴講をすることができた。私はイギリス文化についてのレクチャーと、日本社会についてのレクチャーを聴講した。特に日本社会についてのレクチャーでは、日本人ではない学生たちが日本の抱えている問題について真剣に考えて意見を述べている姿を見ることができ、刺激を受けた。

課外活動

最初の週の平日には現地の小学校を訪問した。子どもたちの名前を日本語で彼らの法被に一緒に書いてあげた。日本について授業中に取り上げ、地理を学んだりポケモンについても扱ったりしていて、このように子どもたちが日本について学んでくれていると思うと嬉しかった。小学校の Japan parade にも参加した。そこでは子どもたちだけではなく保護者の方や地域の方ともお話しすることができた。

Language exchange という、お茶大生一人につき日本語学習者 5 人がパートナーになるという制度があった。パートナーとは個別に連絡を取り合ってそれぞれ数回会ってご飯を食べたり、英語で話をしたり、私のエッセイの添削をしてもらったりした。また私がパートナーの日本語の宿題を見てあげることもあった。この制度のおかげで友達を増やすことができた。また日本語学習者に日本語を教える難しさも実感した。

また、ハル大学の Japanese society というグループのメンバーには、イギリス到着直後からとてもお世話になった。私たちは飛行機の遅延もあってハル到着が夜遅くなってしま

ったのだが、それでも寮で待っていてくれて荷物運びなどを手伝ってくれた。週末にはハル市内の博物館やヨークへ連れて行ってくれたり、他にもボウリングやみんなで遊ぶ企画をたくさん考えてくれたりした。メンバーは皆優しく、相談もしやすかった。ハル滞在中に楽しく過ごすことができたのは、確実にこのグループのメンバーのおかげだと思っている。

イギリス・ハルでの生活

ハルでの生活は、実家暮らしをしている私にとっては新鮮なものだった。寮の部屋の設備が整っておらず、何度も管理人に連絡をして働きかけて、環境を改善していただいた。こちらの友達に相談して助けてもらうこともあった。寮のフラットメイトはパーティーが好きでキッチンの片付けをあまりしないなど、最初は戸惑ったが、皆優しくしてくれた。



写真：ハル市内のミュージアム

ハル市内にはショッピングモールがいくつかあり、その他にもたくさんお店があった。週末にはたくさんの方がいた。2017年がハル市にとって city of culture の年ということでミュージアムも無料で入場することができた。

ハル市には古くからの建造物が今も多く残っていて、利用されていた。寮の建物自体も古いものだった。これはハルだけではなく、イギリスの他の都市でもそうだった。町をただ散歩するだけでも、ビルがたくさんある東京とは違う街並みで楽しむことができた。

週末には観光にも出かけた。Beverly、York、そしてLondonに行った。どこに行ってもとても楽しむことができた。特にYorkには二度も行くことができた。

全体を振り返って

今回の短期研修には少しの興味から応募し、参加することになった。出発直前は楽しみな気持ちよりも不安が大きく、正直行きたくないとまで思ってしまうこともあった。しかし帰ってきた今は心から楽しかった、参加してよかったとすることができるように思う。未知の土地で、日本語が通じない生活。最初の頃は英語を話すことに緊張してしまって一層話せなくなり、現地の人に「あなたの英語がわからない」と言われて落ち込むこともあった。しかし現地での生活に慣れていくにつれ自分の言いたいことを落ち着いて相手に伝えるよう心がけることができるようになった。友達も本当にたくさんできた。イギリスの人はあたたかい人ばかりだった。

この研修で鍛えられた語学力を伸ばせるかどうかは、今後の自分次第だと思っている。英語の力をこれからも磨いていき、イギリスで出会った友達にもう一度会える日を楽しみにしながら頑張りたい。

ハル大学研修を終えて

文教育学部 言語文化学科
2年 神田晴香

授業内容



Listening and speaking, reading, writing の3分野を週3回、計9コマをそれぞれハル大学の教授が担当してくださり、秋学期から引き続いて履修している留学生と私たちの半数ずつで1クラスが作られた。意外に感じたのは、元からいる留学生よりも私たちの人数が多かったことだ。時には日本人だけのグループで話す場面もあったので、根気強く英語で話し理解を図る努力も求められた。しかしながら、他の留学生ともお互いに

母国語ではない言語で意見を交換し合い、ともに考えるという経験は、発音や語彙の違いや難しさを感じながらもとてもいい経験になった。また、この6週間では Environment and human beings がすべての授業を通底する大きなテーマであり、その集大成として最終週に1000~1500 words のエッセイの提出を求められた。そのため、各授業を通して一つの topic に特化でき、個別ではなく体系的に学習を進められ、一分野での幅広い知識を取り入れることができた。分野別の授業内容も振り返ると、Listening and speaking のクラスでは、初回からペアワークが多く取り入れられ、中盤にディスカッション、終盤にはグループプレゼンテーションが主な評定基準として課された。私自身は、自分の中にある考えを伝達するまでの時間を短くすること、流れを止めずに話すことが課題であり、話す際には相手への伝わり方を最優先に考えていた。Reading の授業ではアカデミックな文章の読み方を学ぶだけでなく言語学習の観点で英語と向き合うこともできた。英語という言語の特性に触れながら進める学習は非常に楽しく、あらゆる英語の文章の読解の助けになることと思う。Writing の授業でも、作文の基本に留まらず、どのように自分の意見を伝えるか、口語から文語への移行など様々な観点があり、総合的な学習を達成することができた。

課外活動・イギリスでの生活

現地では、同じクラスの留学生をはじめ多くの学生が私たちと交流し、手を差し伸べてくれた。日本文化に興味のある学生からなる Japanese society のメンバーが週に2度は企画をしてくれ、食事に行ったり観光に出向いたり会話の質が上がるとともに、現地の学生の生活に触れることもできた。また、日本語のクラスを履修している人とパートナーを組んで英語と日本語を教えあう Language exchange partner が日本人学生一人につき4、5人割り当てられ、課題を見てもらい、英語で話をする中で自身の課題を集中的に克服できるとともに、日本語や日本文化について再考、再認識する良いきっかけにもなった。今年

以降4年間の文化都市に選ばれた都市ハルでの6週間を経て、英語や英国文化を学び興味を広げ、日本語・日本文化を客観する非常に良い経験となった。



ハル大学短期研修を終えて

理学部 情報科学科

2年 阪中裕子



はじめに

私は、将来自分の希望する進路に進むうえで、英語が必要なスキルであるが為にこの研修に参加しました。しかし、振り返ってみれば英語に関するスキル以上に多くのものを得られた研修であったと思います。

授業内容

ハル大学では週に 20 時間ほど英語の授業を受けました。英語が母国語でない留学生向けの授業でイギリス以外の国から来ている学生と一緒に勉強しました。授業はそれほど難しいものではなかったとは思いますが、課される課題や、先生との会話のなかで自分の英語にまだまだ足りないものが沢山あることを確認できました。私は Speaking に限らず Writing でも致命的な間違いをよくしていたのですが、先生方が日本人は文法が正確だけど会話の瞬発力に欠けると仰っていて、これは、日本での日頃の英語学習の方法を見直す良いきっかけになったと思います。Writing については研修中長めの essay を書く課題があり、私は英語で長い essay を書いたことが無かったのでとても良い勉強になりました。また、情報系の授業を 1 つだけ聴講することが出来たのですが、お茶大ではやったことの無かった種類のものであったのと、自分の分野についても語彙を増やす必要があると思えたので良い経験になったと思います。どの授業の先生方もとても親切でフレンドリーで、私は良く授業後に聞き取れなかったことを確認しに行っていたのですがいつも丁寧に教えて下さいました。

授業外での英語

授業の他では Language Exchange のパートナーと教育実習生にも英語を教えてもらいました。彼らの中にはもちろんイギリスで生まれ育った人もいますが、途中からイギリスに来て英語を身につけ、母国語でないのに英語が完璧に話せる人が多かったです。ハル大学にはイギリスで生まれ育った人以上に他の国から来ている人が多く、彼らと英語を介してコミュニケーションが取れるのが楽しかったです。他の大学にも言えることなのでしょうが、ハル大学はグローバルでとても良い環境だと思いました。もちろん日常生活のなかでも英語を使いました。通じるけど聞き取れなかったり、聞き取れるけど通じなかったり、あるいはその両方であったり。失敗も多いですがそれ以上に得たものが多かったです。試行錯誤しながら自分の英語を改善して行って少しでも通じるようになるのは嬉しいです。特に L と R の発音をとことん教えてもらえたのが良かったです。

Hull での生活

実はこの短期留学に行く前、友人や家族にイギリスの食べ物は日本人の口に合わないと言われ口を揃えて言われていたのですが、全くそんなことはなく美味しいものが沢山ありました。元々私はパンや乳製品が大好きで、そこまでお米が無くても生きていける日本人なので正直イギリスの生活は性に合っていると思います。私と同じような性格でこれからイギリスに長期滞在するという人はそこまで身構えなくても良いかと思います。現に、私は持って行った日本食を大幅に余らせました。滞在した寮は一人部屋に二人押し込まれたり、水が出なくなったり、インターネット回線が断絶したりと結構トラブルも発生しましたがその辺りを除けば楽しい寮生活だったと思います。私は忙しくて彼らと交流する時間が十分に取れなかったのですが、フロアメイトもとても親切でした。週末は Hull 以外にも London や York など色々な観光地を訪ねることが出来ました。一ヶ月半の滞在というのはかなり色々な場所に遠出することができるのでちょうど良いかと思います。個人的に紅茶が好きなのでイギリスの紅茶文化を体験できたのがとても楽しかったです。イギリスでの生活はやはり日本とは違うところが多々ありましたが、カルチャーショックというよりは寧ろ自分には日本の生活より合っているように思えました。London ではなく Hull だから言えることなのかもしれませんが伸び伸びとしていて自由な雰囲気イギリスの文化はとても良いと思います。

さいごに

この短期留学は英語の勉強をするということ以上に異文化の中で生活し視野を広げ将来の展望を描く上で非常に貴重な経験になりました。もちろん英語についてもまだまだ十分ではありませんが沢山勉強することが出来ました。日本では中々難しいですが、特に Speaking のスキルを、課題を発掘するという点も含めて改善することが出来たので今後さらに向上させていきたいと思っています。また、最初から最後までハル大学の Japanese Society には本当にお世話になりました。彼らがいたからこそその楽しい留学であったと思います。いつか、自分の専攻分野について英語で語れるぐらい、これから一層、英語も専攻も研鑽を積み再びイギリスを訪問したいと思います。



ハル大学短期研修を振り返って

文教育学部 言語文化学科
2年 竹内慈

授業内容

今回の研修では、主に Speaking と Listening を扱う授業、Reading と Writing を扱う授業、Studying skill の向上を狙いとした授業に加え、自分の学問分野などに合わせ気になった授業の聴講によって時間割が構成されていました。同じクラスのメンバーの中には、中国、サウジアラビア、ハンガリーなどの国からの留学生もおり、ただ単に英語を学ぶだけではなく、文化の違いを学ぶことができたという意味でも非常に貴重な体験をすることができました。Speaking・Listening の授業では、先生が授業中に常に質問を投げかけてくるので積極的な発言が求められました。質問自体は決して難しいものではなく、たいていは授業を聞いていれば答えられるようなシンプルなものなので、はじめは少しためらいがありましたが、一週間後には、自分の考えを声に出して積極的に授業に参加できるようになりました。また 2 度にわたるディスカッションでは、文法などにとらわれず、いかに自分の意見を自然に相手に伝えられるかが重視されており、2 回目には自分の成長を実感することができました。また、グループプレゼンテーションも、メンバーで協力して、それまでの授業で学んだことを生かしたプレゼンをすることができました。Reading・Writing の授業では、環境問題に関するパラグラフをたくさん読んで練習問題を解くのに加え、エッセイを書く上でどのように自分の意見を展開していくのかや、それをサポートする example・evidence をどのように用いるかなどを重点的に、実際に何度か短いエッセイを書きながら、教わりました。どのような資料・参考文献をどのように見つけるのかについては Studying skill の授業で詳しく学ぶので安心して取り組むことができました。



課外活動

Japanese Society のメンバーが、バレンタインデーのチョコづくりや、York 旅行、ご飯会、など毎週様々なイベントを企画してくれて、どれも最高の思い出になりました。同年代の学生たちとの交流はとても楽しくて、英語での会話の勉強にもなりました。また、わたしたち一人一人に 4~5 人の日本語を学習している学生が tandem partner として配置され、Language exchange ができるというのがとてもありがたかったです。お互いの言語を教えあうだけでなく、図書館の使い方をはじめ、大学のことで分からないことがあったら気軽に聞けたり、毎週大学や寮の近くのいろいろなカフェに連れて行ってもらったりと、とてもいい経験になりました。わたしは特に発音を重点的にみてもらいましたが、ほかにもイディオムや日常でよく使われる便利なフレーズなどを教えてもらい、授業外でも楽しみながら学習することができました。さらに、1000~1500word のエッセイが最終課題として出されましたが、最後の proofreading をしてもらうなど様々な場面で助けていただきました。

また、週末の時間を使って York, Beverley, London などへ遊びに行くこともできました。勉強も大事ですが、せっかくイギリスに来たなら観光もめいっぱい楽しみたいと思っていたので、それができてよかったです。とても充実した 1 か月半を過ごすことができたと思います。



ハル大学の研修を終えて

理学部 情報科学科
2年 種村真由子

授業内容

英語の必修の授業が週 10 コマあり、オプションで自分の興味のある授業（コマ数は無制限）を聴講することができました。英語の授業は、もともとある留学生向けクラスに混ぜてもらうような形で、同じクラスには中国、ハンガリー、サウジアラビアなど様々な国からの人がいました。授業では生徒同士の話し合いやグループワークが頻繁にあり、他の学生と英語で意思疎通する必要があります。先生の発音するイギリス英語だけでなく、他の言語を母語とする人の英語を聞くことは、とても良い勉強になりました。英語の授業は環境問題を中心に扱い、そのテーマを通して作文やディスカッション、プレゼンテーションなども行いました。課題は、作文の課題や問題演習、プレゼンやディスカッションの準備など頻繁に出されました。普段からそこまで英作文をしてこなかったのが、慣れておらず初めは苦戦していましたが、終盤ではかなりスピードに乗って書けるようになったので、効果はあったと思います。これらの英語の授業を通して、語彙力や英語で思ったことを表現する力が以前より高くなったと感じています。



他には、私は 3D モデリングの授業とユーザーのことを考えたデザインの授業を合わせて週 3 コマ聴講していました。これらの授業は現地の学生向けに開かれているので、教授の英語を聞き取るのは大変でしたが、よく気遣ってくれる教授だったので理解することができました。日本の授業では触らないソフトについて勉強でき、ためになりました。短期の滞在なので一般の学生向けの課題はやらず、授業を聞くのみでした。

生活全般

日本と一番大きく違うと感じた点は、店が閉まるのが非常に早い点です。17～18 時にはほとんどの店が閉まってしまいます。私は平日のほとんどの授業が 16 時までには終わっていたので、学校から帰る時によく買い物をしていました。店の数自体は、寮から駅までの間にたくさんあり、駅の隣に大きなスーパーもあるので、買い物の場所にはそこまで困りませんでした。

大学での昼ごはんは、サンドイッチなどを作って持ってきている人もいましたが、ピザやサンドイッチは買えます。日替わりのご飯が食べられる小さい学食のようなものもありま

すし、カフェもいくつかあるのでご飯はなんとかなります。

寮の部屋は、私は一緒に来たお茶大生と二人部屋でした。ベッドが2つあるため部屋が狭かったり、机が1つしかなかったため2つ目を頼んで入れてもらったりなど、序盤いくつか問題はありましたが、最終的に思ったよりうまく生活できたと思います。



課外活動

初めの週で現地の小学校訪問がありました。小学生の手作りの法被にカタカナで名前を書いてあげたり、小学生と触れ合ったりもしました。

大学では、Language Exchange Partner という、日本語を勉強している人とのペアワークがあります。私たち1人当たり向こうの学生は4-5人います。いつやるかは個人同士でやりとりするので人によって回数は違います。私はあまり多くはやらなかったのですが、意気投合し仲良くなった人と一緒に家で料理を作ったりしました。

留学中は、Japanese Society という日本に興味がある人たちのサークルがいろいろと助けてくれます。一緒に出

かける計画を立ててくれたり、ご飯会、料理を作る会も開催したりしてくれました。現地の学生と交流する機会は多くあるので、コミュニケーションや会話の練習になりますし、他の文化についても学ぶことができ、ためになりました。

見所、観光など

ハルの街には美術館や博物館が多くあります。閉まるのは早いですが寮から徒歩10分以内で、全て入場無料です。見ごたえもあります。

土日はヨーク、ベバリー、ロンドンなどの観光にも行きました。観光名所が多くあり、アフタヌーンティーを楽しむこともできます。ヨークのBetty'sのアフタヌーンティーがオススメです。ヨークとベバリーは比較的近いので日帰りで行けますが、ロンドンは電車で3時間かかり、1日では見終わらないので1泊しました。

最後に

今まで修学旅行ぐらいでしか海外に行ったことがなく、1ヶ月半の滞在は不安もありましたが、毎日充実していてあっという間に過ぎ去ってしまいました。自分の成長を感じることもでき、同時にもっと勉強しようという気持ちも生まれ、よい経験ができたと感じています。

ハル大学での研修を振り返って

文教育学部 言語文化学科

2年 渡邊桃杏

授業内容



授業は一コマ二時間で私の場合、週に11コマありました。大学の正規の授業を一コマ聴講し、残りはアラブ系、中国、ハンガリーなど多様な国籍の人と一緒に英語を学びました。英語の授業はライティング、リスニング、スピーキングに分かれており扱うトピックはどの授業も環境問題についてでした。ライティングの授業では度々エッセーを提出しなければならず、しかも結構な量なので大変

でしたが添削をして返却してくれる上に、わからなかった文法などを丁寧に教えてもらったのでとてもありがたかったです。スピーキングの授業では環境問題についてディスカッションをしたり、グループプレゼンテーションをしたりしました。日本人に比べて他国出身の学生は積極的に発言して自分の意見を主張するので、その人たちに負けずに自己主張していくのは精神的にとっても疲れしました。英語の話し方や自己主張の仕方などで文化の違いを感じられたのでスピーキングの授業は毎回とても刺激的でした。正直、お茶大で過ごしたどの学期よりも勉強しましたし充実した6週間だったなと思います。

課外活動

日本語を学んでいるハル大学の学生がタンデムパートナーとして割り当てられるので、放課後はその人たちと話したり、学校の近くのカフェに連れて行ってもらったりしました。相手の日本語の宿題を手伝ったり自分のエッセーの文法間違いを見てもらったりとお互いに助け合って勉強できたのでとても充実した時間でした。イギリスと日本の文化の違いや社会問題など難しい話から趣味や日常のことまで、様々な話ができとても楽しかったです。なによりも海外に友達ができるのが嬉しいです。イギリスに行ったら会える友達がいるというのはとても素敵なことだなと思います。



ハルでの生活

ハルでの生活で一番辛かったのは、寮の環境の悪さです。管理人に言ってなんとか解決しなければならぬのですが管理人が不在なことが多いので、解決にはとても時間がかかりました。でもみなさん悪い人ではないので責める気にもなれず、外国だから仕方ないかと様々なことを我慢したり諦めたりする忍耐強さが身についたかなと思います。困ったことがあったときは寮のフラットメイトに聞いてみたり、スーパーの人に愚痴を言ってみたりしました。みなさん本当に親切で親身になって解決策を考えてくれました。また週末は様々な場所へ遊びに出かけました。Japanese society という団体が私たち留学生の面倒を見てくれるのでとても充実した週末を過ごせました。Beverley, York, Londonなどに観光に行きましたがどこも本当に素敵で最高の思い出になりました。他にもバレンタインのときには society の人たちとみんなでチョコを作ったりカラオケ大会をしたりと、とても大学生らしいこともできました。

6週間、楽しいことや大変なことで毎日盛りだくさんだったので本当にあっという間でした。今までの2年間の大学生活の中で一番充実した時間であったなと思います。一緒に研修に参加したお茶大のメンバー、Japanese society の方々やタンデムパートナーたちなどこの留学で出会えた友達を大切に、これからの英語学習もこの経験を糧にさらに頑張っていきたいと思います。

ハル大学研修

人間文化創成科学研究科 ジェンダー社会科学専攻
博士前期課程1年 星野咲希



授業内容

大学の英語を学習しているコースに参加して、環境問題について勉強しました。授業はアカデミックライティングの授業とスピーキングの授業があり、エッセイを書いたり、ディスカッションをしたりしました。同じ内容を書いたり話したりする場合でも、アカデミックライティングやディスカッションに適した言葉の選び方、言い回しを学ぶことが出来ました。

クラスメイトたちは、中国やサウジアラビア、南スーダンと様々な国々の出身で国際色豊かでした。

火曜日は正規のコースの授業がなかったので、聴講でジェンダーの授業を2つ受けていました。一つは大学院

生向けのコースでしたが、英語のコースの先生が仲介してくださって出席することができました。聴講の授業では、プレゼンテーションやレジュメがある場合は授業になんとかついていくことができましたが、発表者や先生、生徒が議論するパートになると、ついていくことができず、ハンドアウトなしで講義や議論を理解できるようになることが今後の目標となりました。

課外活動

ハル大学の Japanese society (日本に興味のある学生たちのサークル) のメンバーが、ハル到着時のお迎えから、最終日のハンバーサイド空港での見送りまで、本当に色々なことをお世話してくれました。ボーリングやシューティングゲーム、ヨークへの日帰り旅行など、たくさんのイベントを開催してくれました。みなさん親切で、友達がたくさんできました。タイ料理が好きな友達とは、一緒にタイ料理レストランに行ったり、また別の友達とは、お家におじゃまして肉じゃがや茶そばを作ったり、英語を教えてもらったりしました。たくさんの素敵な思い出を作ることができ、メンバーのみなさんには感謝しています。

また、ハル大学で日本語を学んでいる学生さんとお互いに英語・日本語を教え合う「タンデムパートナー」という制度がありました。私のタンデムパートナーは5人いましたが、その中に、退職されたばかりのご年配の女性がいらっしゃいました。イギリスの教会や結婚、イースターなどの文化や、社会問題、仕事の話などたくさんのお話を、また教えていただき、とても楽しかったです。

図書館

私は大学院生のほか、図書館司書としての仕事もあるので、ハル大学の図書館 (Brynmor Jones Library) と、ハルの中央図書館 (The Central Library) を見学しました。英語の先生に図書館について知りたいことを伝えたところ、大学図書館の司書に紹介していただき、個別に司書に大学図書館を案内していただくことができました。ハル大学の図書館は 8 階建てで、さまざまなサービスがあり、大変興味深かったです。

大学図書館見学で、図書館について教えていただいたり、質問したりすることに少し慣れたので、ハルの中央図書館にも出かけました。中央図書館には日本のような図書室のほかに、楽譜や CD、ピアノなどがある音楽図書館や、小さい子ども向けコーナーとヤングアダルト向けコーナーから成るこども図書館が併設されていました。こちらでも司書と話すなかで、新しく子どもが生まれた市民の方が図書館でもらえる、赤ちゃん向けの読書スタートキットを見せていただいたり、子育てをする両親の手助けとなる本や、英語とその他の言語が併記された外国から来た親子向けの絵本など、様々な工夫やサービスを教えていただきました。



また、友達にマンチェスターへ連れて行ってもらい、ジョン・ライランズ図書館 (The John Rylands University Library) の歴史的な読書室などの建物を見ることができたのも良い思い出です。

その他生活、観光など

寮生活では、最初にベッド以外に机などの家具が一人分しかない部屋に、二人で入ってしまいましたが、先生方にご助言いただき、管理人と交渉して部屋を変えてもらうことができました。棟によってはバス・トイレが共用だったり、Wi-Fi が安定しなかったり、あまり良い環境とは言えませんでした。しかし、大学内はもちろん、市内でもバスやカフェなどでは Wi-Fi が使えました。海外スマホはレンタルしましたが、動作が悪く、あくまで最後のお守りであり、あまり使いませんでした。食生活は、食器は持参や現地購入したものの、通学路に大きなスーパーがあり、また共用のキッチンもあったので、あまり困りませんでした。スーパーの食事も、バーや学校のカフェの食事もとても美味しかったです。

週末は授業が無いので、Beverly、York、London、Manchester など様々なところに観光に行きました。それぞれに魅力があり、充実した週末を過ごすことができました。ロンドンには一度は一人で日帰り、もう一度は友達と泊まりで訪れました。夏目漱石で憧れていたビックベンやロンドン塔に行くことができ嬉しかったです。また、本場のミュージカルを二作品鑑賞することができました。大変素晴らしく、ぜひまた訪れたいと思いました。

研修参加者からのアドバイス

1. 出発前に気を付けたほうが良いこと

- 海外スマホは無理に借りなくてもいいかもしれません。使いにくくてほとんど使いませんでした。お守り程度です。学校や寮では Wi-Fi で自分のスマホを使っていました。
- 荷物の規定を確認すること。体調を整えること。ドライヤーの電圧を確認すること。
- 体調を崩さないようにすること。飛行機の搭乗手続きで時間を取らないよう、液体物の持ち込みや預入できる荷物の数、重さなどを念入りに確認したほうがよい。
- 出発前の準備や VISA に関する事など、全て余裕をもって終わらせていた方がよいと思います。荷物など、忘れ物があっても基本的に現地で調達できるので、帰りのお土産のことも考えて、キャリーバッグはできるだけ軽くしていくほうがよいと思いました。
- 課題を終わらせておく。
ダウンコートだけだと、帰る頃にちょっと暑いくらいなので、ウールコートもあるといいかもです。
最終日のお別れパーティーでみんなおしゃれをしていたので、綺麗な服を 1 着持って行くと使えます。
きちんと海外で使えるドライヤーか確認するべき！私は 1 個壊しました！笑
バスタオルとか何もないので持って行くか現地でも安いのは買えます。
- 荷物の準備は 1 週間前からすること(前日にやった私は深夜 2 時ごろまでかかりました…)
飛行機の遅延情報をちゃんとチェックすること。
当日は時間に余裕を持って電車に乗ること。
有線の Wi-Fi ケーブルを買っておくことをおすすめします。
フェイスブックに登録しておくこと(留学先の人とのやりとりはほとんどフェイスブックのメッセージでした)
日本のシャンプーやリンスを持って行くこと(日本のものの方がやはり質が良いと思います)
- 先輩に話を聞いておくこと。日本のお菓子、折り紙を持って行くと便利。
- 荷物の個数について。今回実は 2 個預け入れることができたということが向こうにいつから判明したので、行く前にチケット控えなどで確認した方がよいかもしれません。
荷物の中身について。私は変圧器と普通のドライヤーを持って行ったのですが、変圧器が合っていなかったのか、風の出方が明らかにおかしく結局一度も使わず

に持って帰って来ることになってしまいました。

持って行くなれば元々変圧に対応しているドライヤーがいいと思います。

また、エコバックもあるなら持っていた方がいいです。向こうでは申し出ないと袋がもらえず、有料のところも多いのであると便利だと思います。

- 箸、味噌汁、鍋を持って行くと便利。(向こうのキッチンに調理器具はいっぱいありますが全て使えないくらいに汚いので何もないと思った方がいいです)洗濯ネットもあると便利。

2. 研修先の授業

- 積極的に参加したほうが楽しいです。
- 周囲とのディスカッションなど、発言を求められることが多くありました。せっかくなので積極的に参加すると楽しいと思います。
- 間違いをおそれず、少しでも積極的に発言すると良いと思う。英語を話す訓練の機会がどんどん失われてしまう。
課題が頻繁に出されたり、プレゼンテーションやディスカッションも行う(準備期間が短いこともある。)
- 全ての授業をとおして、積極的な発言や自分の意見を求められることが多かったです。また、ちがう国から来ている学生と同じ授業をとっていたため、日本の文化、生活や制度などについて聞かれることが多かったです。
- 配布資料が山のようにあるので、ファイルはたくさんあった方がいいかもしれません。先生はとても優しく、ゆっくりと何回も話してくれるのでそこまで構えることなく授業に臨んでください。何を言ってもだいたい大げさに褒めてくれるので、積極的に発言すると思います。
- 積極的に発言すること。
遅刻はしないようにすること(バスは20分おきに出ます。9時からの授業のときは8時20分のバスに乗ることをおすすめします。8時40分のバスはギリギリです…)課題の提出日を守ること。
- とても難しいことではあるが、クラスメイトと積極的に交流出来ると良いと思う。
- 普段の講義は、お茶大の少人数の英語の授業ぐらいの人数でした。発言もよく求められます。
また、ディスカッション、プレゼンテーションなどが授業内で行われます。(ディスカッションはビデオにも撮られます)慣れていないとついつい尻込みしそうになりますが、きちんと準備をしていけば心配はないと思います。周りの留学生や、一緒に行くお茶大の学生の人たちもみんな積極的なので、恥を捨ててどんどん発言した方が、意見がもらえたりフィードバックがきたりして勉強になります。
- どんなに分からなくても諦めなければ最後の方には理解できるようになります!

クラスメイトとも友達になれるので積極的に声をかけましょう。色々な国の人がいて面白いですよ。

3. ホームステイ

- 当初、シングル部屋に 2 人で入れられてとても辛かったです。事前にどんな部屋なのか確認できなかったのがなんとも言えませんが、できるだけ事前に確認できるように問い合わせてみましょう。お手洗いやシャワーが共用だと、トイレトペーパーを初日に持って行ったほうが良いです。

- 寮では、シャワーからお湯が出ない、トイレの水が流れないなど、様々なトラブルがありました。

協力し合うこと、問題があれば出来るだけ早く管理人にはっきり伝えて対応してもらうことが必要だと思います。Wi-Fi がありました。

- 寮はおそらく日本より環境が悪い。住人たちはパーティーをたくさんしていたり、キッチンをきれいに使わなかったりする人が多いかもしれないが、いい人たちだった。

家具が足りないなど生活において不具合があったときは、管理人と連絡をとるとよい。返信が来ないことがあっても、粘り強く交渉すると良い。(相手は忘れていただけだったりするので)

隣人が常に大きな音で音楽を流していることもある。部屋の壁が薄いこともあり、うるさいと感じるかもしれない。

困ったことがあれば現地の友達に相談すると力を貸してくれることもある。

- 部屋自体は比較的綺麗で満足でした。しかし、ネットが繋がりにくい日もあったので、有線を持っていくと安心かなと思いました。

- 寮にトイレトペーパーがないので、最初に 1 つ持って行くと便利です。箱ティッシュも持って行くといいです。

Wi-Fi は通っていましたが、フラットメイトにパスワードを聞いて、何個かつなげるようにするといいと思います。ただ、たまに繋がらなくなるので、有線 LAN は持って行くべきです。

私は、洗濯物を全て乾燥機にかけていたので、ハンガーはコートをかけるぐらいしか使いませんでした。洗濯ネットは必須です！

フラットメイトは毎晩パーティーをし、大音量で音楽をかけているので、耐えましょう。

シャンプー・コンディショナーは日本の硬水でも使えます。

私のフラットではシャワーが 4 個中 1 つしかまともに使えませんでした。

火災報知器が 3、4 回はなりましたが、火事は 0 回でした。おそらくタバコのせいです。

- 例年と変わらなければ、学生寮に住むことになります。
Wi-Fi が無線ではない棟があります。有線ケーブルを持って行くことをおすすめします。学生寮の中ではHouse4が1番新しく、ここはWi-Fiが無線でした。
ご飯は各自で用意することになります。自炊用のお鍋などはハルのTESCOという大型スーパーで買えます。キッチンには寮にあり、調理器具も使わせてもらえるのですが、他のフラットメイトと共同利用になるので汚れていたりします。
自分のぶんの食器は食べ終わったらすぐ洗うようにすると良いと思います。みんなのキッチンです！
メンテナンスのために勝手に部屋に入られることがあるのでパスポートなどの貴重品は毎日鍵付きのスーツケースに入れておくこと。
部屋の戸締りを忘れないこと
- フラットメイトにはかなりお世話になった。キッチンの使い方やトラブルが起きた時などはフラットメイトに助けてもらった。
- 私は寮生活で、2人部屋でした。
ちょうど寮が混んでいる時期だったのもありますが、必ずしも一人部屋とは限らないのかなと思います。(年によって違うと思うので確認したほうがいいのかもかもしれません)
部屋が小さめだったので多少の不便はありましたが、ルームメイトと仲良くやっていけたのもあり、私としては楽しく生活できたと思います。
寮自体がそこまで新しい建物ではなさそうなので、多少のトラブルはあると思います。
私たちの部屋はwifiが入らなかつたり、他の人は水がでなくなつたり、ヒーターがつかなくなつたり、設備上の不具合や家具の不足などもありました。
その都度管理人に連絡したり、お茶大生同士で連絡を取り合ってなんとかやりくりをしていました。
- 全く期待しない方がいいです！寮でしたが、フロアメイトに声をかけると仲良くなってWi-Fiを貸してくれることがあります。寮のWi-Fiが全く使えなかった(棟による)ので、本当に友達のWi-Fiが便利でした。

4. 食事について

- おいしかったです。
- 寮では食事が出ないので、自炊か外食になります。外食で、特別不味いと思ったことはありませんでした。
- 基本3食自分で用意する。私は朝食はパンやシリアル、昼食は大学の食堂、夕食もスーパーで購入したもので済ませていた。友達やラングエッジエクステンジのパートナーとご飯を食べに行くこともあった。日本のカレールーはスーパーで

売っていた。キッチンには冷蔵庫、電子レンジ、オーブン、ケトルがあったが、鍋やフライパンなど器具は自分たちで用意した。自分たちのものはしっかり管理しておかないと、いつのまにか使われてしまっていたりするので注意した方がよいかも。

- キッチンも共同でしたが、比較的ひろかったので、自炊するぶんには問題ありませんでした。ケトルは1つあるととても便利な上に、向こうでも安く手に入るので重宝しました。

- イギリスのご飯は美味しいです！！！！キッチンには、IH、オーブン、トースター、電子レンジ、冷蔵庫、電気ケトルなどが一通り揃っています。

味噌汁はみんな持って行くので、大抵余って最後配りきれずに持ち帰ることになると思います。菜箸、フライ返し、おたま、ピーラーは持って行くと便利です。意外と和食ロスにならなかったのも、そんなに大量に日本食を持って行く必要はないと思います。醤油、みりん、味噌はあったのですが、料理用酒、だしの素、鍋キューブとかは現地にないので持ってくと向こうで日本食が作りやすいです。アフタヌーンティーは日本ではなかなか高くてもできませんが、イギリスだと比較的安く美味しくいただけるので（さすが本場！）是非楽しんでください！

イギリスのマヨネーズは美味しくありません。キューピーは神です。

和風ドレッシングやごまドレッシングが恋しくなるので、持って行くべきでした。

- ハル大学の白いテントのご飯(学食)はとてもおいしいです！5ポンドなので少し高いですが私は払う価値があると思いました。

チリ系の食べ物はとても辛いです。

ニューランドアベニューという大学近くの通りのカフェでお昼を食べても楽しいと思います。

- 朝はシリアルやパンと、サラダや目玉焼きを作っていた。昼はサンドイッチやバナナを持って行くのが安く済む。学校の近くのNewland Avenueには安くて素敵なお店がたくさんあるので、そこに行くのも良いと思う。

- イギリスのご飯が美味しくないと言われることがありますが、個人的には、そこまでまずい料理には出会わず研修を終えることができました。寮ではご飯は全て自炊ですが、冷凍食品やインスタント食品もあり、近くにピザのお店もあつたりするので、料理が苦手でも生活していくことはできるのではないかと思います。

大学には、学食のような場所もあり、ピザやサンドイッチを買える場所もあります。カフェもいくつもあります。私は行く前食事のことをかなり気にしていたのですが、正直心配いらなかったなと思っています。ただ、日本食が恋しくはなったので、味噌汁などを持って行くのもいいと思います。ちなみに米やうどんは高いですが一応売っている店があります。インスタントラーメンも売っています。

- 夕飯はお店で食べると高いので、スーパーで買って食べていました。お昼は大学

のピザ屋で買っていました。

5. 現地学生・地域住民との交流

- 皆さんいい人でとても楽しかったです。現地出身の学生だけでなく、他の国から来ている留学生とも交流できて、いろいろな文化を知ることができました。
- ジャパニーズソサイエティというサークルの学生が、到着した時から様々な面でサポートしてくれました。

週末には少し遠出をしたり、互いの国の料理を作ったりなど仲良くなることが出来ました。人々について、都会ではないということもありフレンドリーで親切な方が多いと感じました。

ただし、日本よりもかなりプライバシー意識と人権意識が強いということは、会話をする上で頭においておくべきではないかと思います。

- ジャパニーズソサイエティのメンバーが頻りにイベントを企画してくれるので、積極的に参加すると友達がたくさんできるので良いと思う。(もちろん強制参加ではないので、体調が悪いなどという時は行かなくて大丈夫。)
- タンデムパートナーという人たちに毎週大学近くのいろいろなカフェなどに連れて行ってもらったりしました。また、学生たちがウェルカムパーティーや、隣町への観光などの企画をしてくれました。
- 日本のお土産(お菓子や折り紙)を10人分ぐらい持って行くと喜ばれます。Japanese Society という日本語サークルのメンバーが様々なところに連れて行ってくれます。全部出席する必要はありませんが、できるだけ参加すると仲良くなれるし、英語の勉強にもなります。

Tandem Partner が4~5人割り振られますが、中には学生だけでなく社会人の方もいらっしやいます。こちらからご飯やお茶のお誘いを積極的にしてみましょう！

- 現地の方は、SNSの返信が早い人が多いです。会話は楽しいけれど、自分からやり取りを切る勇気を持って、ずっとやり取りをしていたせいで寝不足、みたいなことがないようにするべきだと思います。沢山のひとと、個人的に会う約束をする機会に恵まれると思います。そのぶん予定の管理が大変なので、予定1つひとつをスケジュール帳へメモすることは必須だと思います。

分からないこと、聞き取れなかったことにはすぐ「どういう意味?」「もう一回言ってみてほしい」などと言って聞き返すべきだと思います。皆さん易しい単語に言い換えたりして、かみ砕いて教えてくれます。

- タンデムパートナーやjapanese societyの中で特に気が合う2人とは図書館で話す以外にも、一緒に出かけたり、お家に招いてもらったりした。
- ジャパニーズソサイエティという日本の文化に興味のある学生のサークルが、向こうでの質問に答えてくれたり、一緒にご飯に行ったりや遊びに行ったりしてく

れます。週1~3ぐらいでいろいろな場所に案内してもらったり、一緒に料理をする会などをしていました。

また、現地の日本語クラスを取っている人との1対1の交流もあります。(これについては個人のやりとりの度合いに依るので頻度は人によって違います) そのため、現地の人と関わる機会は多くあります。

- Japanese Society のメンバーが色々な所に連れて行ってってくれるので、必ず友達ができ本当に楽しかったです。

6. 経済面

- クレジットカードはICチップにして行きましょう。磁気テープのものだと、向こうでは珍しいらしく、うまく使えない時がありました。
- 東京と比べた場合、ハルの物価が高いとは感じませんでした。クレジットカード利用が一般的ですし便利です。
- 私の場合は、自炊をほとんどせずロンドンへ行くなどの旅行代金も含めて20万円程度使った。

街のいたるところにATMがあり、大学にもATMはあったので、どこでも現金をおろすことができる。私の場合は日本で3万円ほど両替して現金を持って行き、途中数回現金をおろした。

個人商店など小さなお店以外は基本どこでもクレジットカードやVISAカードが使えるので、個人の買い物はカードが早くて便利だと感じた。

ただみんなで割り勘をするときは小銭が必要になるので、常にある程度小銭を用意しておくとう便利。バスの週間チケットの購入は現金しか使えなかった。

パンやシリアルや牛乳など食材はサイズが大きいほど安いことが多いので、同じ階のメンバーなどで共同で買うとよい。その際、同じ階のメンバーで食材用財布をつくったり、順番に買う人を決めるなど、工夫すると良い。

- 基本的にクレジットカードの会計が中心でした。たくさん現金を持ち歩くよりも安全で楽だと思います。
- クレジットカードは必ず作っておくべきです。食事の割り勘などで、現金が必要な場面が多々あるのでなるべく多めに持って行くべきです。学校までバスに乗りますが、ウィークリーチケットが£10.5で現金のみの支払いです。いくら使ったかの家計簿をつけとくことをお勧めします。
- 日本円10万円をポンド札にして持って行きました。イギリスはカード払いができる場所が多いので、現金もこのくらいで足りました。クレジットカードは必須です！

VISAカードを作って持って行くことをおすすめします。私はVISAとアメックスカードを持って行ったのですが、VISAしか使えないところも多かったです(主に飲食

店。ハル大学はVISAしか使えない場所ばかりでした)。

お財布を2つ持つておくことをおすすめします。片方取られても一文無しにならないし、万が一のときの予備のお金があると安心感が違います！

- バス代や割り勘の際に使う為、現金はある程度必要。
- 私はマネーT グローバルという学校で配られた書類で申し込んだプリペイドカードと、普通のクレジットカードをほとんど使っていたので、現金はほとんど減りませんでした。

ほとんどの買い物でクレジットカードが使えましたが、バスの切符や割り勘など、現金が必要になる場面はあるので、ある程度の現金は持っていた方が、あるいは引き出せる状態にしておいた方がいいかもしれません。

また、お札についてですが、10ポンド札が一番よく使えると思います。あまり大きなお札は使えるシーンが限られてくるなと感じました。

- 土日に遊びに行くときにお金を使ってしまうので、日々の生活は割と質素に暮らしていました。

7. その他

- 授業が一緒の学生や寮で近くの部屋に住んでいる人たちなど、様々な出会いを大切に出来ただけ多くの人とたくさん関わりを持つことを私は心がけていました。会話の一つ一つが私にとってはとても楽しかったですし、観光旅行ではできないような非常に良い経験になったと思います。
- 現地のお店は18時には閉店してしまう。特に日曜日には、普段は24時間営業の店でも17時ごろに閉店してしまうので注意。
貴重品の管理など、あまりにも神経質になる必要はないかもしれないが、油断はしない方が良い。
- 寮は部屋の中でも土足だったので、スリッパがとても重宝しました。
- イギリスの上空にはオゾンホールがあって紫外線がとても強いので、気になる人は日焼け止めを持って行くと良いです。
チョコスプレッドを手荷物で持ち帰ろうとしたら、液体と判定されて容赦なく捨てられました(泣)手荷物で持ちかえる物には気をつけましょう！
日本製の食器用洗剤とスポンジは神です！是非持って行きましょう！
- お買い物用のエコバッグを2つ以上持つて行くことをおすすめします。レジ袋は有料です。困ったことがあったらすぐ他の人(一緒に行くお茶大生や、現地の友人)に相談すると良いと思います。良いアドバイスがもらえます。携帯は常に機内モードにしておくことをおすすめします。
- 週末や放課後の過ごし方など、自分次第で色々な体験をすることが出来ます。
- wifiのルーターは、あるなら持つていた方が良いと思います。フリーwifiが飛ん

でいる場所は多いですが、うまく入らないことも多くあります。私はレンタルでポケット wifi を持って行きました。私の携帯は SIM フリーに対応していなかったので wifi しか使えませんでした。他の人は現地で SIM カードを買っている人もいたので、その人はポケット wifi は必要ないかもしれません。部屋では有線の LAN ケーブルが使えるようになっています。やりようによってはパソコンからスマホ用に wifi のようなものを飛ばすことも可能なので、LAN ケーブルはあると便利かもしれません。(現地にも売ってはいると思いますが)

- 帰りの荷物検査で重量オーバーしてしまい、周りに迷惑をかけたので、できればスーツケースを量れるものを持って行くといいと思います。



MONASH College

期間：2月18日～3月24日

滞在：ホームステイ

参加費：約573,000円（授業料＋旅行代金＋ホームステイ代など）

奨学金14万円支給

- 研修内容
- ①日本の国立大学とのジョイント・英語研修
 - ②お茶の水女子大学学生向け、特別プログラム『ディベート・ディスカッション』
 - ③現地モナシュ大学日本語クラスへの参加
 - ④現地メルボルンの学校訪問
 - ⑤フィールドトリップ
 - ⑥ホームステイ（食事付き）

コア英語4単位認定

メルボルンでのたくさんの出会い

生活科学部 食物栄養学科

1年 岸本真凜

授業内容



授業は大阪大学、九州大学、名古屋大学など全国から集まった生徒たちと一緒に受けました。クラスはレベル別で振り分けられますが、どのクラスも大体同じカリキュラムで進んでいきます。毎週ひとつの大きな課題 (survey, debate, essay, presentation) が出され、それに向けた授業を受けました。私は人前で話すのが苦手なので少し難しく感じる時もありましたが、ディ

ベートやプレゼンテーションなどを通して英語で話すことに自信ができました。日本で受ける授業とは雰囲気が違うので自分にとって良い経験だったなと思います。授業ではオーストラリアの環境や歴史、人々の生活などを取り上げてくれるのでオーストラリアのことを良く知ることが出来ました。日本人だけのクラスだったのですが、グループ学習も多いのでみんな仲が良くて本当に楽しかったです。

また、クラス別の授業以外には、フィールドトリップといってドルフィンウォッチや動物園、汽車などから選んで訪れる日もありました。オーストラリアならではの自然を感じることができ、楽しかったです。その他にもモナシュ大学で日本語を勉強している子と会話をする時間もあり現地の友達を作ることが出来ました。全体を通して、特にリスニングやスピーキングの力がついたなと思います。

課外活動

午後に何かの授業やイベントがある日もありましたが午前で終わる日も多かったので、午後は友達とメルボルン市内やショッピングモールに行きました。メルボルン市内はおしゃれなお店もたくさんあるし博物館や美術館など観光スポットもたくさんあるので、何回行っても楽しかったです。また、近くのビーチにも何回か行きました。オーストラリアは暑かったので水着で泳げるし海も透き通っていて綺麗で感動しました。クラスの子と誘い合って遊びに行ったりご飯食べたりしてたくさんの友達ができて嬉しかったです。友達の幅が増えたのがモナシュ研修に参加して良かったなと思うことの大きなひとつです。

また、週末にはモナシュが紹介してくれたフェスティバルや日本語学校のボランティアに参加して、充実した時間を過ごせたと思います。

オーストラリア・メルボルンでの生活



オーストラリアは過ごしやすい国で何か困っていたらみんな快く助けてくれとても温かい気持ちになりました。日々の生活は挨拶や日常会話で溢れていて、日本との文化の違いを感じました。また、交通機関を利用するときは、最初は何もわからず大変でしたが、最後の方には一人でバスや電車を乗りこなせるようになりました。この5週間で生活力が向上したなと思います。

オーストラリアに行く前、私はホストファミリーと良い関係を築けるか緊張していましたがとても温かく迎えてくれて安心しました。一緒に遊んだり料理をしたりするうちにどんどん打ち解け、最後はお別れが本当に悲しかったです。この5週間でたくさんの人と出会い、たくさんの人に助けられ、自分の世界が大きく広がったなと思います。一つ一つが大切な思い出です。モナシュ研修に参加してよかったなと心から思います。英語がもっとうまくなるようにこれからも勉強し続けたいです。そしていつかメルボルンに戻ってきたいです。

モナシュ研修を終えて

文教育学部 言語文化学科

1年 五味真里奈

授業内容



最初の4週間は8大学（一橋、東工、大阪、九州、名古屋、学芸、埼玉、お茶の水）で行い、その後大阪大学ともう一週間残ってワークショップに参加するという計5週間のプログラムでした。

8大学で行う4週間は18人程のクラスに分かれて行いました。朝8時半から、間に10分の休憩を挟み、お昼の12時45分まで授業がありました。毎日早起きして午前勉強し、午

後は思いっきり楽しむという健康的で充実した日々を必然的に送れます。週ごとにテーマがあり、1週間かけてじっくり学びました。1週目はオーストラリアの生活について、2週目はオーストラリアの環境について、3週目は多文化主義について、4週目はグローバリズムについて学びました。そして、毎週金曜日に仕上げとしてTaskが出されます。具体的には1週目に聞き取り調査と簡単なプレゼン、2週目にディベート、3週目にエッセイ、4週目にプレゼンを行いました。特にプレゼンが大嫌いだった私にとっては大変だと思う時もありましたが、優しい先生や仲間たちと少しずつ練習していく形だったので、無理なく楽しくできました。そして何より大きく成長できたと思います。

課外活動

・フィールドトリップ

1日遠足に出かける日があり、私は5つのコースの中から Puffing Billy に行くコースを選びました。そこではオーストラリアの大自然を電車に乗って楽しめます。電車は普通に乗るのではなく、窓ぶちに腰掛け、足を外に出しながら乗りました。そのように乗れるのがこの電車の売りですが、電車自体は特に足を出すように作ってある感じではなかったので、オーストラリアの美しい自然と共に、スリルも味わえました。この体験はモナシュ留学の中で最も楽しかったことの一つです。



・小学校見学

クラスごとに現地の小学校を見学に行く日がありました。その小学校は第二外国語として日本語を採用しており、子供たちが日本語や日本文化に慣れ親しんでいたことにとっても驚きました。日本とは違うオーストラリアの教育制度や教育方針を実際に見て知るこ

とができたのはとてもよかったです。

- ・ポットラックパーティー

一緒にプログラムに参加している学生とそのホストファミリーが夜大学に集まり、ディナーを楽しむパーティーがありました。それぞれの家庭が食べ物を持参するので、それぞれの家庭料理を楽しむことができました。また、その場でマネキンチャレンジをしたり、楽器の演奏やアカペラがあったりとても楽しかったです。

- ・現地の授業見学

日本語や日本文化を学ぶモナシュ大学の正規の授業を見学することができました。学ぶという視点で日本語を見たり、日本文化を外から見たりでき、とても興味深かったです。また、日本と違った授業の雰囲気も肌で体感でき、とても貴重な体験となりました。

- ・ハーモニーデー

中国、ベトナム、シンガポール、マレーシア、ブルネイなどから来た学生たちがそれぞれの国のブースを作り、民族衣装や、食べ物などを紹介するイベントがありました。私は浴衣を着て参加し、浴衣の着付け体験を行いました。様々な国の学生と話すことができ、また各国の友達もたくさんでき、とても楽しいイベントでした。

ホームステイの生活

私のホストファミリーはマザー、ファザー、4歳と3歳の男の子というとても明るいご家庭でした。夜になるとおじいちゃんやおばあちゃんがやってきたり、お友達がやってきたり、また逆に私たちが彼らのお家にお邪魔したりと、賑やかなディナーになることが多かったです。留学前はホームステイが怖く、緊張していましたが、マザー、ファザーはもちろんすべての方がとてもフレンドリーで家族のように接してくださったので、すぐに打ち解けることができました。子供達もとても人懐っこく、毎日学校から帰ってくると、庭や子供達の部屋で一緒に遊んでいました。

5週間を一緒に過ごしたホストファミリーは私にとって本当に大切な存在です。ホストファミリーから最後にもらったメールに「オーストラリアの家族より」と書いてあったのを見た時は本当に嬉しく、感動しました。



最後に

私は留学すること最後まで悩み、決めた後に後悔したこともありました。ですが、終わった今留学して本当に良かったと心から思います。支えてくださった皆様ありがとうございました。今後はこのすばらしい経験を活かし、さらなる努力を続けていきたいです。

モナシュ大学春季短期研修

生活科学部 食物栄養学科

1年 戸村咲希子

授業内容

約5週間の、お茶大だけではなく九州大学や名古屋大学など他の大学の学生とともに研修を受けました。初めの4週間は、日本人約20人でクラスが構成され、そこに外人の先生が一人ずつつき、オーストラリアの生活や、マルチカルチャリズム、環境問題などを英語で学びました。月曜日から金曜日まで毎日授業があり、週末にエッセイや



プレゼンテーションなどの課題が一つ課されました。英語での正しいエッセイの書き方や、よりアカデミックなプレゼンのやり方を教わることができ、今後に生かせるとても濃い授業内容だったと思います。授業は朝の8:30から始まり12:45で終わることが多く、間に15分の休憩がありました。授業中は先生の話聞くだけでなく、ペアワークやグループワークが多くありました。先生が私たちに問いかけることが多くあるので積極性が求められる授業スタイルだったと思います。残りの1週間はお茶大と大阪大学の生徒だけのプログラムでした。このプログラムでは毎日2時間みんなで、body language や polite language について学びました。とてもアクティブな授業スタイルで楽しかったです。

課外活動



毎週、授業以外のプログラムが組み込まれていました。一週目は現地の小学校にいき、日本とオーストラリアの違いを感じることができました。二週目はフィールドトリップがあり、私は Puffing Billy という、汽車の窓に座って景色を楽しむツアーに参加しました。三週目はモナシュ大学で日本語を勉強している人と交流する機会がありました。ここで外国人の友達を作ることができました。他にも、social media challenge といって指定された場所やポーズでクラスメイトと写真を撮り、Instagram にのせてポイントを競い合うクラスごとの活動や、他のホストファミリーと交流できるパーティーなどがありました。このパーティーでは、習字やお茶など日本の文化を

紹介したり、様々なホストファミリーの手料理を食べたりして、とても有意義な時間を過ごすことができました。

メルボルンでの生活

私のホームステイ先は韓国人のお家でした。メルボルンは多文化国家なので、他にも中国人やスリランカ人などオーストラリアではない国の家にホームステイしていた友達がたくさんいて面白かったです。ホームステイ先はメルボルンの都会から離れたところで、日本の田舎のようなところでした。交通手段は主にバスでしたが、本数がとても少ない上に時間通りに来ないことが多々あり最初は戸惑いました。特に終バスは早く、夜はとても暗いため一人で出歩くのは控えるようにしました。お店も 17 時や 18 時で閉まる所が多く初めは驚きましたが、その分夜は

ホームステイ先でゆっくり生活することができました。ホストファミリーが作る夜ご飯は韓国料理が中心でとても美味しかったです。日本のお米もほぼ毎日食べることができました。子供が 3 人の 5 人家族でしたが、家族で話すときは韓国語だったため、話に参加することが難しい時がありました。また、休日などにホストファミリーとどこかへ行くことができなかったのも残念です。しかし、私を自由にしてくださり、とても温かいファミリーの元で生活できたのは本当に良かったです。17 歳の女の子は日本語も勉強していて、メルボルンと韓国と日本の文化を比較できたのはとても面白かったです。放課後は主に日本人の友達とメルボルンのシティに行って観光地を巡ったり、買い物したり、ビーチに行って遊んだりしました。休日はグレートオーシャンロードやフィリップ島などに行き、メルボルンの自然を体験しました。

この研修は日本人が多く、放課後や休日も日本人で行動してしまうため、英語を大きく上達させるのは少し難しいと感じました。それでもこの留学を通してリスニング力や、英語で会話する能力は高まったと思います。なにより英語で会話する楽しさ、外国人と交流して文化の違いを知る楽しさを強く感じました。それと同時に、英語でうまく伝えられないときのもどかしさも感じました。これからもたくさん英語に触れて、もっとスピーキング能力を高めたいです。この一か月メルボルンでとても濃い日々を過ごすことができ、留学して本当に良かったと思います。また機会があれば留学したいです。

モナシュ大学短期研修で得たもの

文教育学部 言語文化学科

1年 深田栞里

<授業内容>

今回のプログラムは日本人のみのクラスでの授業でした。しかし、担任の先生は全て英語で説明を行うし、クラスでも授業中は英語で話さなければいけなかったので、英語力が向上しないという心配はありませんでした。むしろ、日本人同士だからこそ、互いにわからないところを共有できてとても安心感があったし、クラスで英語が得意な人を見ると私もあれくらい話せるようになりたいと思いやる気が出ました。

授業ではディベートやプレゼンテーションなど、自分の意見を発表する場が多かったように感じました。また、グループ活動が多く、簡単なディスカッションや会話練習はほぼ毎日ありました。そこで、会話をよりナチュラルに進めるためのワードやフレーズを習得できたと思います。

私のクラスはみんな積極的に発言し授業に参加していたので、活発な授業が行われていました。担任の先生も優しくて面白くて、たった5週間でしたが、クラスがとても大好きになりました。



<課外活動>



放課後や休日は、友達とメルボルンの中心街に遊びに行きました。午前中で授業が終わることも多かったので、時間を有効活用して存分にメルボルンを観光することができました。同じ研修に参加した他大学の新しい友達もたくさんでき、毎日とても楽しかったです。三連休にはクラスメイトと一泊二日でグレートオーシャンロードツアーにも行きました。日本では味わうことのできない大自然を堪能し、美し

い景色にとっても感動しました。学校での勉強も大切ですが、そういった観光や旅行の中で、お店の人や同じツアー参加者と会話したりするのも、自分の英語力向上に役立っていたと思います。

また、大学で知り合った現地の学生や留学生とごはんを食べに行ったりすることもありま

した。日本に興味を持ってきている学生がとても多くて、日本について教えたり、逆に彼らの出身国の文化について新たに学んだり、貴重な会話の時間だったと思います。外国人の友達ができただけのもこの研修での大きな収穫だったと思います。

<生活全般>

私のホストマザーはとても健康志向な人だったので、よく一緒にウォーキングに行きました。週末には朝から海沿いを8km歩いたこともありました。大変だったけれど朝の海の景色はとてもきれいだったし、ウォーキングの間ホストマザーとたくさん会話ができるのでとても有意義な時間でした。

また、出発前、自分に合わなかったらどうしようと心配していた食事面も特に困ったことはありませんでした。ホストマザーは料理が得意だったので、いつもおいしいご飯を用意してくれていて、毎日夕食が楽しみでした。私の家の場合は、朝食と昼食は自分で用意する決まりだったので量が多くて食べきれないということはありませんでしたが、友達も量を減らしてもらっても多くて食べきれないと困っていました。ホームステイ先の家庭によってルールはけっこう違うので、自分が心地よく暮らせるように、自分でホストファミリーとコミュニケーションを取っていかないといけないと感じました。

ホストファミリーはとても親切だったので、家で困ることはありませんでしたが、バスの乗り換えが難しかったです。バス停名がなく、降りる人や乗る人がいないとバスが止まらないので、普段通学に使わないバスに乗るときは地図のアプリで現在地を確認しながら、自分が正しいバスに乗っているか調べていました。これも運転手さんに行き先を確認する際に自分から話しかけなければいけないので、積極的にコミュニケーションをとっていかないといけないなと思いました。

<まとめ>

この研修は私の人生でかけがえのない経験になったと思います。日本とオーストラリアでの文化の違い、雄大な自然とのふれあい、新しい友人との出会いなど新たに経験したことや得たものがとても多かったです。そして何より自分の英語力がまだまだ未熟だということに気づかされました。時制や文法があやふやだったり、単語がすぐに出てこなかったり、もっと英語力をつけてスムーズにコミュニケーションが取れるようになりたいなと思いました。私は二年生から英文コースに進むので、そこでちゃんと英語を学び、次に外国へ行くときはもっと自分が満足できるくらいに会話ができるようになりたいです。

春季モナシュ大学研修を終えて

文教育学部 言語文化学科

2年 荒尾真珠子



留学にあたって

英文学生のくせに今までに海外へ行ったことがなかったので単純に行ってみたかったことと、英語力を向上させたかったことなどが参加を決めた理由です。初海外が5週間のホームステイということで、行きの飛行機では人生で一番といっていいほど緊張していました。

授業内容

授業は月～金の8:30～12:45で、毎週末にその週の総まとめになるエッセイ、ディベート、プレゼンなどの課題が出される形式でした。クラスは日本各地からの学生20人弱で構成され、2人の担任の先生が交代で授業をしてくれました。授業内ではグループワークが重視され、英語を話す機会をとにかく多く与えられました。週ごとに学習するテーマが決まっており、環境問題や多文化社会、グローバル化など、オーストラリアならではの内容にたくさん取り組めたのではないかと思います。宿題は思ったよりも少なく、週末課題の準備に多少の苦勞をしたくらいでした。5週目はお茶大と大阪大の学生のみがオーストラリアに残り、多くのワークショップに参加しました。

課外活動

・field trip

オーストラリアの自然や文化に触れられる3つのスポットからひとつを選びそこを訪れ様々な体験をする企画です。私はイルカを見るため船に乗って真夏の海に繰り出しました(イルカは見れませんでした)。海洋生物の生態についても学べ、よい経験になりました。

・現地の日本語クラス訪問

現地の小学校を訪れ、日本語クラスの先生を手伝うかたちで子どもたちに簡単な日本語を教えました。日本の小学校との形態の違いを実感するとともに、第二言語を教えることの難しさを感じました。大学内では、モナシュ大学の日本語クラスの授業に呼ばれて、日本語で現地の学生と会話をしたりもしました。日本特有の受験の話をしたり、学生たちが日本語で行うプレゼンについてのアドバイスをしたりしました。

・Potluck dinner

研修中盤のころに、日本の学生とそのホストファミリーが参加するパーティがあり、日本人学生が日本文化を紹介する目的でさまざまな発表をしていました。私はそこで学生の

有志 3 人とプログラム担当者の方々とアカペラを披露しました。週 3 で練習がありましたが大変いい思い出になりました。



オーストラリア・メルボルンでの生活

・ホームステイ

私は高齢の夫婦のお宅にお世話になりました。夫婦二人はご飯のときや、私が大学から帰ったとき、寝る前の時間など、いつでもたくさん話しかけてくれました。この家には私のほかに、中国人留学生がもう二人いたほか、親族がたくさん家に来ることもあったので、家はいつもにぎやかでした。週末私がヒマそうにしているとホストマザーが車でいろいろな場所に連れて行ってくれました。夕食の時など会話についていけないこともありましたが、回数を重ねるにつれかなり理解できるようになっていきました。ステイ先に着くまではうまくやっていたのかどうか心配でたまりま

せんでしたが、すぐに全員と仲良くなることができました。私にとってこの短期研修で、英語に慣れるという意味も含め、一番良かった点は、このホームステイです。

・日常生活について

オーストラリアは夏の水不足で有名なので、シャワーの時間が制限される家もあるようです。また、身の回りのもの（シャンプー類、タオルなど）については念のため日本から持参しましたが、ステイ先に十分あったので持っていく必要はありませんでした（その家にもよると思います）。夕食は 18 時からでかなり早かったです。結果的に日本で培われた睡眠不足が解消されました。

・気候について

メルボルンの気候は大変変わりやすく、急なにわか雨がしょっちゅうありました。また夏でも朝はものすごく寒い日があったので、防寒対策も必要でした。昼は普通に気温が高く暑かったですが、日本の夏ほど湿気がないのでそれほどの不快感はありませんでした。最初の一週間は緊張と気候への不慣れとで体調不良が続いていました泣。

留学を終えて

5 週間の留学で英語の能力がものすごく上がったとは言えませんが、日本人のいないところで外国人と英語で話す機会を自分でも多く作るようにしていた結果、外国人と話すことに恐怖感や抵抗感を持たなくなりました。日本とは比べ物にならない多文化社会で生活できたことは今後の進路決定のうえでも大切な意味を持つものとなるのではないかと思います。

メルボルンでのよもやま話

文教育学部 言語文化学科

2年 菊地真由

授業内容

授業はまずクラスメート同士で簡単なスピーキング練習から入りました。そこから、調査の仕方・ディベート準備・英文エッセイの書き方・プレゼンの仕方を教えてもらいました。課題は毎週出されました。課題の中にはパワポで作らなければならないものもあり、少し時間をかけて準備する必要もあって大変なこともありました。しかし、英語で勉強する上で必要なことばかりで、これからお茶大英文コースで勉強するにあたって再確認ができてよかったなと思いました。ちなみにお茶大と阪大の学生だけが5週目まで残っていたのですが、その週はLeadership Lecture やBody Language Workshop などを受講しました。早口で聞き取りづらい時もありましたが、どうにかついて行けました。



(Class Bで撮影)

課外活動・ボランティア活動

2週目のフィールドトリップではドルフィンクルーズに行きましたが、イルカを見ることはできませんでした。そのかわり野生のアザラシやペンギンを見ることはできました。本来の目的からすると残念な結果になってしまったのですが、船に乗る前に Sorrento というイタリア風の保養地でウィンドウショッピングを楽しめました。

ボランティア活動では大学からほど近い日本語学校の先生方のお手伝いをしました。そこで関わったのは小学生と幼稚園児で、普段はオーストラリア流の教育を受けて英語で生活をしているのに、この学校では日本風の学校生活をしながら日本語で勉強している姿が印象的でした。

5週目の火曜日に Clayton Campus でハーモニーデー（オーストラリアの文化の多様性を讃える行事）で Potluck Party 同様法被を披露しました。その日の夜に Monash University City Campus に行って、あらかじめ準備しておいたパワポのスライドを使って「東京の観光名所とお茶大の特徴・学園祭」についてプレゼンを行いました。1人だけで発表することもある緊張して失敗も多かったのですが、いい経験だったと感じました。これで日本に帰った後のプレゼンは怖くないなと思いました。

オーストラリア・メルボルンでの生活

全体的に治安が良いこともあって、夜でも怖い思いをすることはほとんどありませんでした。ホストファミリーはインド系移民でベジタリアンだったため、家で肉や魚を食べることはできませんでしたが、その代わりに美味しいカレーやカレー風味にアレンジされたヌードルを食べることができました。こちらの英語の発音が悪く、なかなかファミリーに聞き取ってもらえない時もありましたが、そんな時でも部屋にはこもらずに一緒に食事をとる・家で DVD を見る・インドの伝統文化を教えてもらう、などのことをしているうちにこちらファミリーに馴染んでいくことができました。

公共交通機関には注意が必要かもしれません。バスはそこまで遅れずに来ますが、次のバス停の名前を電光掲示板などで教えてもらえず、初めはどこで降りれば良いのかわからずにととても戸惑いました。また、乗る時と降りる時に myki カードをタッチし忘れると最悪罰金もあり得るので注意しなければいけませんでした。

余暇の時間は大抵 Melbourne City に出て Flinders street 周辺でお土産を買ったり観光名所を巡ったりしました。3連休があったのですが、その最終日に Moomba Festival という毎年恒例のパレード付きのお祭りに行ってきました。またメルボルンにオーストラリア初の猫カフェがあることも知っていたので予約を取って行ってきました。St. Kilda beach と Brighton beach へ 2 回ずつ行って実際に泳ぐこともできました。



最後に

遊んでばかりにもなるかな、と思っていましたが、課題等が意外としっかりしていたし、自分の力で問題が発生した時に適切に対処する能力もついたと思います。何より 35 日間家でも日本語が使えない状況で暮らして英語力が上がったので、このプログラムに行けてよかったと思います。

(下 : Potluck Party にて浴衣・法被チームとホストファミリーとで撮影)



モナシュ大学での研修を通して

文教育学部 人文科学科
2年 多賀麻里子



このモナシュ大学への留学は、大山寮で留学生と英語で会話する際に、自分の言いたいことがすぐに言えずもどかしい思いを何度も経験し、もっと外国の方とスムーズに話して自分の視野を広げたいと思い、参加を決めました。5週間のあいだ英語漬けの環境に自分を置くことができるだけでなく、ホームステイ

を通してオーストラリアの生活を実際に体験できるという点も魅力のひとつでした。留学前は自分の英語力に自信がなく、行きたいという気持ちよりも怖さが優先してしまっていたのですが、今となってはこの研修に参加するという選択をして本当によかったと感じています。

授業内容

授業は、日本人20名ほどのクラスに分けられ行われました。トピックはオーストラリアの文化について学ぶものが中心で、オーストラリア独自の多文化主義やオーストラリアの暮らしについて、ディベートやプレゼンテーションを通して理解を深めることができました。毎週トピックや学習内容についてのまとまった課題が出され、それに向けて友達と意見交換をしたり資料を集めたりしました。最初はついていけるか不安でしたが、先生が形式を一からわかりやすく教えてくれるので、それに従って課題を終えることができました。

プログラム内には、現地の小学校を訪問したり、現地学生が日本語を学ぶ授業に参加できたりする機会があり、英語や日本語で現地の子どもや大学生と交流して実感を持ってオーストラリアの暮らしについて多方面から様々なことを吸収することができました。

観光

最初の一週間で感じたことは、自然や文化の多様性が幅広いオーストラリアには見るべきもの、行くべきところが本当にたくさんあるということです。実際にそれは事実で、この5週間で毎日出かけても回りきれないほどメルボルンは多くの魅力に溢れた街でした。週末はクラスメイトや現地の友達と1day ツアーに申し込んで世界遺産のグレートオーシャンロードやゴールドラッシュ時代の面影を残すバララット、壮大な自然が溢れるグランピアンズ国立公園に出かけました。平日は授業が午前中だけだったので午後にはシティに繰

り出し、美術館や博物館、ビーチや遊園地を回りました。ほとんどシティでは行き当たりばったりの街歩きが多かったのですが、少し街を歩くだけでも多様な民族料理店や様々な人種の人たちに出会い、多文化主義を感じるができます。また、日本人の友達だけでなく、現地の友達と出かけると、英語で会話することができるだけでなく、住む人だけが知っているガイドブックには載っていないおすすめの方法や食べ物を教えてくれるので、現地の友達やホストファミリーとお出掛けすることをおすすめします。

生活全般

ホームステイ先は中国系のご家庭で、両親と娘さん一人の三人家族でした。ホームステイは初めての経験だったのですが、ホストファミリーが家族の一員のようにあたたかく迎えてくれ、初日で緊張がほぐれました。ホストファミリーとゆっくり会話を楽しめる夕食の時間がもっとも楽しみな時間の一つでした。中国とオーストラリアの郷土料理が融合したまさにマルチカルチャリズムなごはんを楽しみながら、オーストラリアの文化や政治の問題、日本との環境への考え方の違いなどについて話し、英語以外のことも多く学びを得ることができる時間でした。

課外活動

授業以外にも、現地の学生と交流できる機会がいくつもありました。私は日本語クラブというモナシュ大学の公式サークルに所属し、そこで多くの現地の友達と交流することができました。そこで知り合った友達とシティにあるカラオケに行ったり、ホームパーティーに招待してもらったりと生の学生生活を体験でき、とても有意義な時間でした。その友達とは“ペンパル”として、これから日本とオーストラリアで手紙をやり取りする予定です。



感想

今回の留学では、英語を通して交流することの楽しさを知ることができ、自分のなかでの大きな自信となりました。また、日本の学生だけでなく、ホストファミリーなど多くの現地に住む人たちと意見交換し異文化に触れることで、当初の目標であった自分の視野を広げるという目標を達成することができました。5週間、自分の成長を支えてくださったたくさんのあたたかい人たちには感謝でいっぱいです。本当にありがとうございました。来年度以降このプログラムに参加したいと少しでも思っている方は、想像しているよりも何倍も良い経験ができる機会だと思うので、ぜひ参加してみてください！

研修参加者からのアドバイス

1. 出発前に気を付けたほうがいいこと

- 準備は早めにする。オーストラリアでは様々なものが買えるので、必要以上にものを持って行かない方がいいと思う。提出物などがたくさんあると思うので提出期限を必ず把握すること。
- 留学先が夏でも防寒対策は準備していくこと。
- 帰りおみやげなどで荷物が多くなってしまいうのでポストンバッグをスーツケースに入れていくといいです。意外とオーストラリアでいろいろ調達できるので迷ったものは持って行かなくてもいいと思います。私は折り紙を持って行ったらホームステイ先の子どもと一緒に遊べました。
- オーストラリアでは持ち込み禁止の食品もあるため気をつけておいた方が良いでしょう。出発前にホストファミリーに生活上の注意を聞いたが、ホストファミリーがベジタリアンであることを到着後に知り適切な準備ができなかったため、あらかじめそのようなことも聞いておいた方が良いでしょう。
- 荷物は軽くしていくことをオススメします。(帰国時に重量オーバーで皆苦しみました…)
パーカーを持って行くのを忘れないようにしましょう。びっくりするくらい寒い日が何日かありました。

2. 研修先の授業

- 日本人約 20 人からなるクラスで、英語で授業を受ける。毎週エッセイやプレゼンテーションなどの課題が 1 つ与えられ、金曜日に発表する。授業は午前中に終わることが多い。
- 生徒が日本人だけのクラスだと、日本にいても受けられるような授業になると思う。積極的になればなるほど学ぶことは多いと思う。
- ディベートやプレゼンテーションなど人前で話す機会が多かったです。恥ずかしがらずにどんどん発言したほうが楽しいし先生も優しく答えてくれるので積極的に参加したほうが良いと思います。グループワークも多いのでクラスメイトとの仲が深まります。
- 毎週宿題が出た。普段大学で真面目に英語の授業を受けていればそこまで面食らうこともないが、中にはディベートやプレゼンの準備が必要なものもあって少し大変だった。
- パソコン、USB は忘れないように！課題は計画的に！（でも、そんなに怖がらなくても大丈夫です。）任意で現地の授業を聴講できるのですが、1 つでもいいので行ってみることをオススメします。海外の授業を見学できてとても面白いです。

3. ホームステイ

- ホームステイ先は、様々だった。私は韓国人のファミリーだった。私のホストファミリーは家族同士で話すときは韓国語であったため、会話に参加できないことがあった。また、他の友達もホストファミリーがどこかへ連れてってくれることがあったようだが、私のところはそのようなことは無く、少し残念だった。英語を思ったより話す機会が無かった。
- 分からないことがあればすぐに聞くこと。嫌なことがあればはっきり嫌だと言うこと。
- 最初は緊張していましたが、自分の部屋があるので、想像していたより気を遣うことなく快適に過ごせました。ホストファミリーには自分からコミュニケーションを取らないと向こうも気を遣ってあまり話しかけてこなくなってしまうので、どんどん話しかけて良いと思います。私の家は朝食や昼食の用意や洗濯は自分でやる制度だったので、ある程度の家事は自分で出来るようにしておくべきかなと思います。
- ホームステイで、家は閑静な住宅街の中にあり落ち着いた環境だった。
- 行く前は本当に緊張すると思いますが、ホームステイはとても楽しく、貴重な経験です。ホームステイ先の方は皆明るくて、優しい方たちばかりなので安心してください。伝えようと思えば、聞いてくれますし、ちゃんと伝わります。たくさんおしゃべりしてください！

4. 食事について

- 朝は自分で準備し、昼はホストマザーがサンドイッチを、作ってくれた。夜ご飯は韓国料理でとても美味しかった。庭で焼肉をしたのはとてもいい思い出。
- 私の家では日本と変わらないご飯が出たが、ベジタリアンの家もあったし、食事の事情は家による。
- ただ日本人にとっておそらく野菜をとることはすごく大事。家の食事では出なかったら、頼むなり買ってくるなりした方がいい。
- 学校から遠く、朝家を出る時間にホストマザーが起きていなかったため、毎朝朝食と学校に持っていくランチを自分で作っていました。サンドイッチやフルーツなど簡単なものだったので、そこまで大変ではなかったです。夕飯はたまに外食もしましたが、基本はお家でマザーの料理を食べていました。中国系の方だったので中華料理が出てきました。美味しかったです。
- 家を出てくるのはベジタリアンミール（ミートフリーの食事）のみ。外食で肉類を食べていた。アメリカなどのように巨大なサイズのものが出てくる、ということは少なかった。

- 朝ごはんはセルフの家庭が多いです。初めに何を使っていいのか聞いておきましょう。外食はとにかく量が多いです。友達とシェアすることをオススメします。値段が高く感じますが、シェアできることを考えると意外と安かったりします。オーストラリアの食べ物はとても美味しいです。太ることが予想されます！オーストラリアの乳製品は特に美味しいです！ぜひ食べてみてください！

5. 現地学生・地域住民との交流

- 授業にプラスして、日本語を学んでいるモナシュ大学の学生と交流したり、体育館で一緒に遊んだりといった交流があった。そこで、仲良くなった友達とご飯を一緒に食べながら、英語で会話を楽しむことができてよかった。
- 現地の人々との交流の機会は正直あまり多く与えられなかった。自分から積極的にイベントやパーティーに顔を出すといいと思う。
- 学校のプログラムで現地の小学校を訪問したり、日本語を勉強しているモナシュ大学のクラスを訪ねたりしました。そこでお友達を作ることができ、嬉しかったです。
- 日本語学校に行く機会があり、お邪魔させていただいた。夏祭り企画の盆踊り大会で、様々な国籍の留学生とも関わることもできた。食堂で隣に座った中国人留学生と会話をした。
- 交流の機会をたくさん用意してくださっています。ぜひ積極的に参加してください。日本語クラブという現地のサークルに入ると、現地の学生とたくさん交流できます。

6. 経済面

- メルボルンは物価が高く、必要以上に外でご飯を食べないようにした。特に、夜は家の周りがとても暗くなるのでなるべく早く帰り、家で食べるようにした。私は 50000 円を換金して持って行き、あとはクレジットカードで済ませた。現地の方がレートが良いのであまり多く換金して行かない方が良いと思う。
- 私は日本で日本円をオーストラリアドルに換金していくことはしなかった。ほとんどのことがクレジットカードで済んだ(自動販売機も)。現金が必要になった時は新生銀行のキャッシュカードを使って ATM から引き出していた。
- クレジットカードで払えるところが多いので、現金は 5、6 万円でもいいかなと思います。日本円も少し持っていたほうがいいです。
- 物価が高いので外食するとすぐにお金がなくなってしまう。贅沢品や娯楽にかかる費用は特に高く、小麦粉・ベジマイトなどの必需品は安い印象。交通費は安いのであまり心配していなかった。
- 現地のレートの方が良いと言われていましたが、あまり変わりませんでした…。

クレジットカードは基本どこでも使えます。クレジットカードオンリーのお店もたまにありました。

7. その他

- メルボルンはバスやトラム、電車が発達していて、色々なところに簡単に行くことができた。最後の方になると1人でシティを歩き回ることができた。現地の人々はとても温かくいい人でとても過ごしやすかった。
- ホストファミリーへのお土産は何でも喜んでくれるので色々持っていってみるといいと思います。
- 大変なこともありましたが、充実した5週間でした。とても楽しかったです。
- 怖い思いをすることはなかったが、交通機関にはヒヤヒヤさせられた。一番ひどかったのは、6:30 にくるはずだった終バスがいつまでも来なかったこと。終バスがこのようにとぶと最悪家に帰れなくなる可能性もあるので注意。
- 日焼け止め、サングラスはお忘れなく！



UNSW
THE UNIVERSITY OF NEW SOUTH WALES

期間：2月4日～3月19日

滞在：ホームステイ

参加費：約 684,000 円（授業料＋インターンシップ代＋旅行代金＋ホームステイ代など）
奨学金 14 万円支給

研修内容：①4 週間の英語コース（アカデミック・イングリッシュ）

②2 週間のインターンシップ（サービス業）

③ホームステイ（食事付き）

コア英語 4 単位認定

p.61-62 は非公開です

UNSW での春季短期研修を終えて

文教育学部 言語文化学科

1年 藤春佳

この研修の内容は UNSW での 4 週間にわたる受講と、2 週間のインターンシップでした。英語圏の国で生活するのは初めての経験だったので、この研修で学んだことを述べたいと思います。

1) UNSW での受講

キャリアイングリッシュのクラスに所属しました。初めは上のレベルのクラスに入ることができたのですが、私には難しかったので、一つ下のクラスに変更してもらいました。

日本の授業と比べて驚いたことは、授業内でのペアワークやディスカッション、プレゼンが圧倒的に多いことです。先生の講義を聞いているだけではなく、友人と話し合ったり、時には先生に対しても意見を言ったりして、自由に発言できました。自分の意見をしっかり持って、きちんと主張することができるようになったと感じるので、これからもこの経験を生かして発言していきたいです。



↑最終日の授業の終わりに、
クラス全員で写真を撮りました。

2) 課外活動

受講以外の活動で特に思い出に残っているのは、高校時代の ALT の先生に会ったことです。日曜にサーキュラ・キーで待ち合わせてフェリーに乗り、マンリービーチに行きました。日本に住んでいた経験もあるので、日本とオーストラリアでの環境や生活の違いについて話すことができました。学校制度や交通機関についての違いを改めてお話しできて、異文化交流の楽しさを体感できました。また、先生はビーガンの方なのですが、お昼に入ったレストランにベジタリアンメニューしかなく、チーズを抜いてもらっているのを見ました。日本ではビーガンの人自体が多くないうえ、店員にメニューを変更して欲しいと頼むような人は少ないと思うので、そういった自己主張に対する態度も文化と関係しているのかなと思いました。

3) インターンシップ

JTB シドニー支店でのインターンをさせてもらいました。内容は主に資料の作成やまとめで、ほとんど1日中パソコンの前に座っていました。オフィスの中では英語と日本語が飛び交っていて、日系企業とはいえやはりここは英語圏だなと感じました。

学んだことは、言語の違いはあっても目的が同じであればコミュニケーションはとれるし、タスクはこなせると



↑初めてオフィスで
お仕事をしました。

ということです。私自身も現地の方にお仕事を教わることがあり、きちんと言葉を理解してタスクを進められるか不安だったのですが、最終的に何をやろうとしているか分かっているためすんなりと教わることができました。日常生活ではその人が何をしようとしているのか理解することは難しいけれど、オフィスの中ではみんな同じ目的に向かって働いているから、日常の中でよりもコミュニケーションが簡単になるのかなと思いました。また日常生活でも、特に言語が違う人と話すときには、相手が何を伝えたいのか予想することが大切だと気付きました。

4) 生活全般

オーストラリアでの生活は日本での生活とは違う所が多かったけれど、予想していたより同じ所も多く、慣れるまでに時間はかかりませんでした。多国籍国家と言われるだけに街を歩いていると様々な国の人とすれ違うし、友人のホームステイ先もいろいろな国の家族でした。私のファミリーも韓国の方で、人生で初めてのトッポギを作ってもらい、食べました。様々な国の人たちがともに生活しているからこそ、オーストラリアの人たちのおおらかさが生まれるのだろうと感じました。

移動手段はほとんどバスで、きちんと降りられるかどうかとても不安でした。地域によっては電車が通っていない(駅がない)ので、バスの路線がたくさんあり、本数もとても多いように感じました。また、思っていたよりも気温が低い日が多く、雨もたくさん降りました。イメージとしてはずっと暑くて晴れた日が続くと思っていたので、少し驚きました。

全体を通してみると、オーストラリアの生活は日本よりも個人差が大きくて一概に言えず、みんながそれぞれを受け入れているように感じました。グローバル化する社会の中で、このように多様性を素直に受け入れられることは素敵だと思います。日本にも外国籍の方が増えてきていると思うので、どんな人とも積極的に関わって、自分の世界を広げていきたいと考えられるようになりました。



↑ファミリーと、中国から留学に来ていた姉妹との写真。

オーストラリア UNSW 研修に参加して

理学部 生物学科

2年 岩掘怜



・英語実習

オーストラリアの UNSW で 43 日間過ごしました。異文化で生活することで新たな見地を広げたいという思いと上がり症だったので新しい環境でいろいろな人と積極的に関わりたい気持ちがありました。最初の 4 週間は UNSW の英語学校で過ご

しました。「Bridging the culture」というテーマで様々な文化圏の人にインタビューを行いました。

また、私はクラブアクティビティでバイオリンパートとしてアンサンブルに参加しました。真田丸のテーマ曲を知っている人がいて後日 Facebook で練習状況について伝え合いました。音楽を通して交流ができたと感じ、嬉しかったです。尚、UNSW の本学生用の授業にも参加しました。音楽、食物、メディアなど様々な分野について時間の許す限りでしてみました。パソコンでメモをとる習慣、積極的に発言する姿を目の当たりにして驚きました。文化の違いが当たり前の国なので違うということへのためらいがない人が多いように感じます。革新的な思想への実行力という面であせりを感じました。

博物館が非常にたくさんあってオーストラリアという国の歴史を深く理解できました。移民から始まった国だということが分かりました。1788 年のフィリップが率いる囚人によって開拓が行われ、ゴールドラッシュによる移民の増加とそれに伴う犯罪の増加という治安に関しての 2 つの側面をおもしろく感じました。そしてアボリジニの迫害という長く悲しい歴史もこの国は抱えています。公式謝罪が行われたのが 2008 年と新しく、生活保護を保証されているものの、失業率は俄然高くて未だにオーストラリアの社会にとけ込めていない事実を知りました。アボリジニが住んでいた場所を訪れ、今では観光地となっているその場所で彼らが上手く幸せに暮らしていたことを想像し、胸が痛みました。

・インターンシップ

私は DFS という免税店で 2 週間の研修を行いました。免税店なので普通の買い物とは異なり、様々なルールがあります。お客様にそれらについて説明しつつショッピングカードをつくるという仕事でした。相手に的確かつ手短かに伝えるようにこころがけました。また、中国人以外のお客様のご案内なども行いました。国によって聞き取りにくい英語で話される方もいるので 1 回で聞き取る訓練になったと思います。学校とは違って相手は私の英語力の向上を求めてくれる先生のような存在ではありません。的確な情報を求めています。

そのような責任を日々感じながら過ごしました。お客様のなかには1回で聞き取れないともういい、というように行ってしまう方もいます。英語で生活している人からみたら英語が通じないのは手間なのだという事実を痛感しました。リスニング力・案内の仕方について予習しながら臨みました。その一方で職場のスタッフの方と仲良くなって会話を楽しました。オーストラリアのおすすめの場所や趣味について教えていただきました。DFSには日本人のスタッフの方も多くいらっしゃり、その方達との交流はもちろん、挨拶すると話しかけてくださる方が多く、職場の空気が楽しかったです。

・ホームステイ

また、これらの期間中、ホームステイを行いました。始めのころはレストランやチケット売り場等簡単な会話でも相手が何を言っているのか聞き返してしまうことが多かったです。そういった日常英会話はだんだんできるようになりますが、ホストマザーとの会話は難しかったです。いろいろな日々の出来事を英語で描写し、かつそれについてなんとと思ったのか自分のことばで伝えることになるからです。マイナーな単語を覚えたり、言い回しをネットで調べたりしました。ただ、正直なところ満足に伝わらないことも多かったです。発音がこれほど重要になるのかと単語の問題では痛感することになりましたし、センテンスでは片言のように話してようやく通じることも多かったです。TOEIC中心の英語の勉強ではリーディング、リスニングを重要視していました。しかし、会話するとなるとこれほど言葉がでてこないものなのかと悔しかったです。

・まとめ

UNSW, DFSでのインターンシップを通して英語圏ならではの、多様な人種が集まるこの国ならではの経験ができたと感じています。始めは43日間過ごすというのは長いように思いましたが終わってみると本当にあっというまです。積極的な気持ちが強かったので充実できたな、満足しています。今回知ったオーストラリアの歴史・文化の知識、会話のなかで向上した語学力を日本での生活のなかでさらに発展させられるよう日々邁進します。



オーストラリアでの6週間

生活科学部 人間生活学科
3年 水谷萌

授業内容

実習最初の4週間は、ニューサウスウェールズ大学附属の語学学校（以下 UNSWIL）にて、

英語を学習した。まずプレースメントテストを受け、レベルごとに分けられたクラスで授業を受けた。今期は日本人が多いとのことであったが、幸運にもタイやコロンビアなど、様々な国からきた多様なバックグラウンドを持つ人々が同じクラスになり、ともに過ごすことができた。内容は、文法、ディスカッション、ライティングなど多岐にわたった。日本で学んだはずの文法も、ネイティブならではの解説をされると新しい発見があった。自分の意見をうまく



最終日にみんなで写真を撮った。楽しいクラスメイトで本当に良かった。

英語にするのは難しかったが、みなが互いの英語を理解しようという意識があり、日々切磋琢磨しながら学べたと思う。毎週復習のテストを受け、グループでのプレゼンを4回行うなど、短期間ながらも非常に濃い学習ができた。ディスカッションが多く、先生から質問されることも多かったので、日本に比べると、授業に積極的に参加しているという意識を強く持つことができる内容であった。本来 UNSWIL の1タームは5週間で、我々は1週短かったので、最終週に行われたクラス全員での遠足に参加できなかったのが残念であった。

課外活動

UNSWIL でできた他大学の友人と、世界遺産のブルーマウンテンや動物園を回るツアーに行った。青く霞む雄大な山々とダイナミックな渓谷は圧巻だった。世界で最も急なトロッコに乗ったり、軽いトレッキングをしたり、アクティビティも楽しんだ。普段暮らしている日本から遠く離れた土地で、友人ができたこと、ともに学びともに遊び、感動できたことはかけがえない経験になった。



インターンシップの内容

短期留学最後の二週間はJTBシドニー支店にてインターンシップを行った。企画書を作ったり、プレゼンを作ったり、調べものを頼まれたりした。日本語を使うことがほとんどであったが、ホテルの設備について確認するために、オーストラリアのホテルに電話をかけて問い合わせるなど、英語を使うこともあった。この電話で確認するというタスクは、非常にチャレンジであった。オフィスワークを経験したことがなかったため、いい経験になった。これから

就活が始まるので、参考にして将来を考えられることが私にとって非常に有益であると感じた。事業の説明の機会を設けてくださり、旅行業界研究にも役に立った。



作業中の写真。PCを1台与えられていた。

生活全般

ホームステイについて：家庭によってルールが異なり、私がお世話になった家庭は、シャワーの使用可能時間帯があり、食膳の片づけや掃除なども決まりがあつて、厳しい方であったようだ。22時以降電話禁止の規則は、日本との時差があるので不便であったが、おおむね快適な生活が送れた。ファミリーが外食の際、私だけ冷凍食品を出されたりすることがあったことだけは改善してほしかった。優しく、話も面白い家族だったので、この家でよかった。最後の夜は、ファミリーで外食を食べに行った。とてもいい思い出になった。

気候：オーストラリアの気候は、突然大雨が降りだすなど、一日の中で変化が大きいと感じた。猛暑日から突然20度前後の気温になることもあり、身体的に負担があった。屋外と屋内との気温差も激しく、なかなか慣れることができなかった。カラッとしていて、外を歩くのは日本の夏よりも快適であった。

文化：治安が良く、普通に過ごす分にはなにも問題なく過ごすことができた。始業終業時間が早いために、シドニーの人々は朝方の生活をしていることが分かった。インフラは日本のほうが整備されており、街の環境も清潔である、という点に興味があった。国柄なのかどうか、数年後また比較し、考えてみたいと思う。物価が高くて、金銭感覚がよくわからなくなった。

長いようであつという間だったこの6週間の中で、英語の学習だけではなく、異文化理解を深めたり、適応能力を向上させたりできたのではないかと思う。まだまだ英語を話せるとは言い難いので、また勉強して知識を蓄えたら、実際に使う機会を探して積極的に力を伸ばしていきたい。

研修参加者からのアドバイス

1. 出発前に気を付けたほうが良いこと

- 体調管理や、荷物の確認はもちろんです。不安になりやすいので、何度でもチェックした方がよいと思います。あとは、緊張しすぎないこと。
- 行く国について歴史や観光地などを把握する、語彙力をつける。
- SIMカードをレンタルする場合、本当にSIMロックが解除されているかを確認すること。出発前に、お茶大の後期の課題はすべて終わらせておいた方がよいです。終わっていないと語学の学習に集中できなくなるうえ、観光する時間も減ります。
- 出発前自分の端末について調べたら解除されていると出てきたので、SIMカードレンタルにしたが、結局使えないと判明したので新たにスマホをレンタル会社にも送ってもらった。送料負担になった。返却時にもトラブルがあり、送ったはずのカードが届いていないと言われ紛失料金を払う羽目になった。

2. 研修先の授業

- わたしが参加したプログラムでは日本人が多かったので、自分から英語を話すようにしないと、意味がないです。
- 英語プログラムなら特に困りません。
- 学生の発言・参加が前提で授業が作られているので発言したもの勝ち。間違いを言っても恥をかかない雰囲気になっている。わざわざ勉強しに来ているのだから、へたくソな英語は当たり前だ、と開き直って間違えまくる方が練習になる。
- スピーキングとリスニングがメインです。積極的に参加しないと身に付きません。わからない単語は、スマートフォンや電子辞書で調べていました。

3. ホームステイ

- ファミリーとたくさん話すようにした方がよいと思います。現地での生活のことをいろいろ教えてくれるし、観光についても役に立つ情報を提供してくれます。
- お手伝いはありませんか、などと言って一定時間リビングにいる時間をつくり、会話するとよいです。
- 生活する、ということはその国の日常にはいることであり、そこで英語が下手だと嫌な顔をされることもあります。ホストマザーは留学生を受け入れている点で英語の下手さに寛容な数少ない存在です。
- 私のホームステイ先は退職後の夫婦でとても優しく、学生は勉強が大事だから家事はあまり心配しなくていいと言われていましたが、ホームステイばかりは運なので友達によっては「家に蜘蛛やゴキブリが出て眠れない」「ホストファミリーと仲が良くない」という話を聞きました。

- ホームステイは、家庭によってルールが異なります。シャワーや洗濯に制限があることがほとんどなので、そのつもりで準備していったほうがいいです。

4. 食事について

- ハンバーガーやステーキが多く食べられます。ホームステイでの食事はファミリーによるので、多様です。わたしの場合は韓国の方だったので、日本食に近い料理も割と食べていました。
- オーストラリアの場合、本当に物価が高くて金銭感覚が狂いそうになったので予めそこらへんを認識しておくともいいかもしれません。好き嫌いの面の問題は、私の場合なかったです。
- 物価が高いので外食にするとかなりお金がかかります。お昼は家で用意したものを持っていけば節約できます。ホストマザーが料理の得意な人だったので食事についての悩みはありませんでした。オーストラリアはチーズがおいしいです。
- 平日は、朝：自分で作る、昼：外で買う、夜：ホームステイ先が提供してくれる、という形で、休日は朝昼晩おうちにいればすべて提供されます。物価が高いので、昼食代は一日 1000 ドル弱はかかると思っていた方がいいです。

5. 現地学生・地域住民との交流

- 自分から関わっていかなければ、なかなか交流はありません。留学生用の授業では現地の学生と会えないし、ファミリー以外の大人とはあまり話す機会はありませんでした。
- 課外活動や授業の参加はやり方から学生相談所へ行って英語で聞かなければなりませんでした。手続きが一筋縄ではいかないときもありました。しかしその国のその時間でしかできないことで観光より有意義な時間を過ごせる場合もあることを考えるとセットにやってみるとよいと思います。
- 本大学の休業期間で、授業時間では全く交流はありませんでした。三週目にクラブの一斉新歓イベントがあり、興味のあるクラブに自分で参加をしたり、友達に誘われて学外の英会話イベントに参加したりしました。何となく参加してみた講演会でも、思いがけない縁ができます。バスの中で知らない人に話しかけても親切に話し相手になってくれる人ばかりでした。オーストラリアではこちらが話しかけさえすれば、誰でもフレンドリーに対応してくれると思います。
- 多国籍なクラスであれば、異文化交流が十分できると思います。近所のコンビニやカフェの常連になれば、覚えてもらえて、交流できます。

6. 経済面

- シドニーは物価が高いです。思ったよりもたくさんお金を使ってしまったよ

うに思います。

- 前にも述べましたが、オーストラリアはとにかく物価が高いです。また、留学のプランには観光の代金が含まれていないことを認識していた方がよいです。
- 昼食をほとんど買って過ごしていたので、かなりかかりました。交通費、お土産代、行楽費全部合わせておおよそ 10 万円をバックとは別に使いました。外食を控えればもっと節約できます。
- 計 20 万円程度生活費・交通費で使いました。

7. その他

- バスでの移動が主になります。オパールカードという Suica のようなカードが無いと、公共交通機関を利用することができません。
- 楽器をやっていたら現地にもっていくとよいです。コミュニケーションの手段になります。私はバイオリンをもっていきました。家でも弾きましたし、アンサンブルもできました。

※ 予めホームステイ先にその旨を伝えておいた方がよいです。

- 治安は想像以上によく、怖い思いはしませんでした。
- オーストラリアでは日焼け止めとサングラスがないと外へ出られません。
- 日本の大学の事務とは違い、大学窓口に相談しに行くとすぐに対応してくれます。クラス替え希望の相談は早めに行かないと、定員がいっぱいになってできなくなってしまうので少しでも考えていたらすぐ相談しに行った方がいいです。どこに相談すればいいかわからないときも、聞けば仲介してくれます。
- 現地で通信できる携帯の契約をしておくことをお勧めします。なにがあってもグーグルマップがあれば家に帰れます。



期間：2月11日～3月25日

滞在：ホームステイ

参加費：約630,000円（授業料＋インターンシップ代＋旅行代金＋ホームステイ代など）
奨学金14万円支給

研修内容：①オタゴ大学附属語学センターでの英語研修

②オタゴ大学での正規授業聴講

③インターンシップ

④ホームステイ（食事付き）

コア英語4単位認定

英語研修 in Dunedin, New Zealand

文教育学部 言語文化学科

1年 笠井紫帆

この春休み、2/11～3/24まで、ニュージーランド南島のダニーデンという街へ行き、英語の研修に参加をしてきました。海外で1か月半もの間過ごしたのは初めての経験でしたが、ホームシックになることもなく、非常に充実した時間を過ごすことができました。今回の留学について簡単に紹介したいと思います。

授業内容



Language Centre の外観

University of Otago Language Centre (以下 UOLC) での授業は、10:00～13:00に行われる General English クラスと、14:00～15:00 / 16:00 の TOEIC / IELTS クラスに分かれていました。私は TOEFL クラスを選択しました。

午前は基本的な文法事項を学習したり、グループに分かれてディスカッションをしたり、PCを使って発音練習をしたりしていました。クラスの人数は最大19人で、日本人の他に中国人や韓国人、タイ人やロシア人など様々な国籍、年齢の学生がいました。定期的にテストがあり、その時々自分の英語能力を確認することができました。

午後は TOEFL の過去問を解いたり、テキストを進めたりしていました。クラスは最大16人で全員が日本人でした。テキストを進めているときはグループワークやペアワークで会話する機会が多く、活動的な授業でした。



Language Centre の教室

学外での活動

学校の授業以外の活動としては、授業が本格的に始まる前週の金曜日に、UOLC の学生でダニーデン市内のバスツアーへ出かけ、Signal Hill や、世界一急な坂としてギネスに登録されているボールドウィンストリート、St. Clare Beachなどを訪れました。3/4～5には希望者50人ほどでクイーンズタウン旅行をしました。また、UOLC のイベントとしては、放課後にミニバーベキューをしました。

他にも、私は参加しませんが1泊2日のミルフォードサウンドツアーがあったり、UOLC のすぐ裏手にあるスタジアムで行われるラグビーの試合のチケットを安く買うことができたり、フットサルの試合に参加できたりと、ほぼ毎週金曜日、もしくは毎週末イベントが行われていました。授業内でも、ダニーデンや大学内で行われるイベントに関する情報を紹介してくれていました。楽しいイベントが盛りだくさんで、勉強以外の面でも充実

した大学生生活を送ることができるだろうなと思いました。

インターンシップ



ダニーデン植物園 ローズガーデン

私は、毎週水曜日と木曜日の午前中に 8:00～12:00 まで 4 時間ずつ、UOLC から徒歩 20 分ほどのところにある Dunedin Botanic Garden でインターンをしていました。基本的な仕事場はローズガーデンで、枯れた花を取り除いたり、芝生をカットしたり、小路の掃除をしたりしていました。例外として、雨が降った翌日は地面が濡れているということで、職員用の図書館で資料の仕分け作業をしました。また、

最終週はいつも指導をしてくださっているローズガーデンの担当の方がいらっしゃらなかったため、ロックガーデンで古くなった草花を切り取る仕事をしました。そこまでたくさん会話をする仕事ではありませんでしたが、説明のときや休憩時間に話す際、ネイティブの方は話すのが速いため、リスニングのいい練習になったように思います。

ダニーデンでの生活

ダニーデン市街が UOLC から徒歩 15 分ほどのところにあつたため、留学の後半は放課後よく友人と遊びに出ていました。特に、オクタゴンと呼ばれる市の中心周辺にはお土産屋さんが多くあつたため、よく行っていました。週末はファミリーと観光へ出かけたり、ファミリーの友人たちを呼んでバーベキューパーティーをしたり、大学の友人たちと遊びに行ったりしていました。私のクラスは、担任の先生が「週末は勉強するのではなく遊んだりファミリーと過ごしたりする時間なので課題は出さない」というスタンスの人で、宿題を気にすることなくダニーデンの生活を満喫することができました。

ニュージーランドにいる間によく感じたのは、「空が青い」ことと「時間の流れがゆっくりである」ということです。日本よりもずっと空気が綺麗で、それが空の色に表れていました。また、月日が過ぎるのはあっという間でしたが、日本でいる時とは違って毎日のんびりと、ゆったりとした時間を過ごすことができていました。

最後に、ファミリーと先生方、友人たち、出会った全ての皆さんへ。ニュージーランドでの 1 か月半は、忘れられない大切な思い出になりました。ありがとうございました。

オタゴ大学短期語学研修を終えて

文教育学部 人間社会科学科
1年 佐橋ひなの

授業内容

Language Center では午前中に general English、午後は IELTS 対策のクラスがありました。General English のクラスでは writing や reading のスピードアップのための練習や、listening など、幅広く学びました。全体を通して、グループやペアで確認し合う時間が多く、先生も積極的に話すことを促していました。IELTS のクラスでは試験官の経験のある先生が解き方のポイントやコツを教えて下さり、実際のテストと同じ形式の問題を解きました。Writing の添削をして頂いたり、日本ではなかなかできない speaking の練習をクラスメートとしたりと良い経験になったと思います。どちらのクラスも日本人が半数ほどを占めていましたが、他にもブラジル、タイ、タヒチ、中国、韓国などからの学生がいて、英語を通じて文化交流をすることもできました。レベル別に分かれたクラスではあるものの、外国人に比べて多くの日本人が Speaking を苦手としていて、日本で英語を話す機会をもっと増やすべきだと実感しました。

課外活動

Language Center 主催の一泊二日の Queens Town へのツアーに参加しました。ゴンドラに乗って街を見下ろしたり、真っ青な湖の上をフェリーで走ったり、牧場で羊と戯れたり、私が想像していた、これぞニュージーランドという大自然に触れることができました。マオリの文化であるハカや歌は迫力満点で美しく、圧倒されました。ダニーデンとはまた違う魅力を知り、ニュージーランドの他の都市にも訪れて見たいと思うようになった旅行でした。

インターンシップ

私は週1回インターンシップとして St. Bernadette's School という小学校に通いました。カトリックの学校だったため、週に1度の集会では宗教に関する発表を担当の学年が行い、それに関わる歌を全員で歌っていました。授業は先生が講義形式で教えるというよりも、生徒達が自分でプリントを進めたり、発表をしたりすることが多かったです。また、この時間はこの科目と決まっているわけではなく、同じ時間の中で、国語や算数などを複合的に



学んでいるという印象でした。日本とは違う教育現場を訪れることは初めてだったのでとても興味深かったです。子供達とはおしゃべりをしたり、折り紙や鬼ごっこをして遊んだりして交流を深めました。日本に興味を持って話しかけてきてくれる子が多く嬉しかったです。

ホームステイでの生活

私のホストファミリーはマザー、ファーザー、12歳のシスター、8歳の男の子の4人家族でした。とても明るく、親切なファミリーで、週末にはダニーデンの観光地に連れて行ってくれたり、kiwiの方言やジョークを教えてくれたりと、素晴らしい時間を過ごすことができました。特に子供達とは一緒に歌ったり踊ったりと毎日のように一緒に遊んでとても楽しかったです。私の滞在中に3人の誕生日があり、カードやプレゼントをあげてお



祝いしました。シスターの誕生日にはマザーとファーザーからのプレゼントの多さに驚きました。おばあちゃんとおじいちゃんにも何度か会うことができ、優しい笑顔で迎え入れてくれました。ホームステイを通じて、家族と一緒に会話することで、授業だけでは学ぶことのできない日常会話を練習することができたと思います。思うように英語が話せず、もどかしく感じることもありましたが、ファミリーがサポートしてくれ、何とか自分の言いたいことを伝えることができました。家族の一人のように受け入れてくれたファミリーに感謝の気持ちでいっぱいです。

終わりに

私のこの留学の1番の目的は最も苦手とする speaking の力を伸ばすことでした。結果として1ヶ月半という短い期間では英語が正確に、すらすらと話せるようになったという実感はあまり感じられません。しかし、英語を話さざるを得ない状況に身を置くことで、ゆっくりでも多少間違えていても相手には伝わるということがわかり、英語を話すことのためにめらいを感じなくなりました。上達のためにはとにかく話すことに尽きるということを実感しました。また、学校で学んだ英語だけでなく、ネイティブの方が実際に使っている生きた英語を学ぶことができたのもこの留学の成果だと思います。そして何より英語学習へのモチベーションが大きく高まりました。ホームステイ先では言語の壁を感じることも多く、もっと自由に英語を話せるようになりたいと強く感じました。これからも英語を使う機会を自分から見つけ、この研修を無駄にしないよう英語力の向上に努めていきたいです。

ニュージーランドでの短期研修を終えて

生活科学部 食物栄養学科

1年 鈴木晶子

【授業内容】



午前の授業は General English という種の授業。週に2回、コンピューターなど自由に使える ILC という部屋で

Independence Study (つまり自習) をした。その他は教室で教科書を使って文法やボキャブラリーを学んだり、与えられたテーマについて話し合っ

て文章を書くことでスピーキングとライティングの英語を流暢なものにするというアクティビティをしたりした。また金曜日の午前の3限目は Outing の時間とされていて、本キャンパスの方へ出向いたりオタゴ博物館に行ったりした。2週間に1回ボキャブラリーと文法のミニテストが行われた。また、時々 FCE のリスニング練習とリーディング練習をした。研修期間の後半にはライティングとスピーキングのアセスメントがあった。私のクラスの担任の Kisten は明るくて非常にオープンで楽しい方だったので、授業中も和気藹々としていて発言、質問もしやすい雰囲気だった。午後は TOEIC 対策と日常英語を学ぶためのクラスと IELTS 対策のクラスとを選択することができた。私は前者を選択した。TOEIC 対策は問題集を使って練習問題に取り組んだり、ボキャブラリーを増やすためのアクティビティを行ったりした。日常英語の方は教科書を使ってリスニングをしたり、DVD を見たり、スピーキングアクティビティをしたりした。

【課外活動】

学期が始まるのは私たちがダニーデンについた次の週からだったので、それまでの1週間は特別に3人で授業のようなものを受けた。1日目にはクラス分けのためのテストを受け、それ以降は教室でライティングやリスニングの簡単な演習をした後オタゴ博物館やオタゴ入植者博物館などへ行った。また、オリエンテーションではキャンパスツアーを兼ねたグループ対抗のレースを行ったり、バスに乗ってダニーデンの街をめぐり、世界一急勾配な坂に登ったりした。3月4、5日にクイーンズタウンへのツアーがあった。7時に Language Centre をバスで 出発し、Arrowtown を経由してクイーンズタウンへ。スカイゴンドラ、Luge (ゴーカートのようなもの) に乗り、マオリによる Haka のショーを見た。2日目はクルーザーに乗ってクイーンズタウンから少し離れた島にある牧場へ行って羊の毛刈りショー、牧羊犬の羊追いを見た後牧場内ツアーに参加した。その後バスに乗って Language Centre へ戻った。また、Language Centre に併設されているスポーツセンターのようなところで放課後にバドミントンをしたり、ランニングマシンを使って運動をしたりすることができた。

【インターンシップの内容】

インターンシップは大学本キャンパスの近くにある「The Good Earth Cafe」というカフェと、ニュージーランドで最も歴史のある植物園「Dunedin Botanic Garden」で行った。カフェではサンドイッチやサラダなどの簡単な料理を作ったり、お肉の仕込みをしたり提

供前の仕上げ、お客様が帰った後のテーブルの片づけ、料理の提供など幅広い体験をすることができた。日本では見かけないような食材も多く、ニュージーランドではどのような食べ物が人気で、どのような食材がよく使われるのかなど少しではあるが知ることができ、食文化の勉強にもなった。使っている食材はすべてオーガニックであるらしく、マッシュルームの箱を開けたら親指ほどの大きさのナメクジがいた、などといったなかなかできない体験もあった。植物園では枯れたバラの除去、芝刈り作業、季節が終わった花の刈り取り作業、新聞記事のファイリング作業などを行った。

【生活全般】



ホストファミリーは若い夫婦と6歳の女の子、4歳の女の子の双子だった。Abbotsfordという丘の上にある新興住宅地の1階建ての家に住んでいた。広い庭もあり、そこで家庭菜園でブロッコリー、キャベツ、ほうれん草に似た野菜、パセリ、ミント、イチゴを育てていた。街からはやや離れており、家から15分歩いたところにあるバス停からバスに乗り20分、そこから15分歩いてLanguage Centreへ通った。食事は、朝食はシリアルかトースト、夕食はにんじんやブロッコリーなどの野菜を茹でたものと豚肉か鶏肉か牛肉の料理、炭水化物としてご飯かローストポテトが出されることが多かった。昼食には前の晩の夕食の残りがある場合それを持っていった。手をかけた料理を食べるのは夕食のみだが、それも味付けがされているものを焼いただけのものだとか、サラダキットを買ってきて混ぜるだけだとか、日本で当然のように行われているような料理らしい料理はあまりしていなかった。夕食に関しては時々麺類やカレーのような料理が出されたり、忙しい日には街で買って帰ってきたりすることもあった。ホームステイしている中で感じたことはいろいろあったが、特に強く感じたのは「もったいない」という概念はやはり日本で特に強いのだなということである。夕食の残りは私が翌日の昼食に持っていくと言わなければ躊躇なくごみ箱に捨てられたし、出かける時にもラジオは付けっぱなし、誰も見ていなくてもテレビはつけっぱなし。外食をした時も食べきれないほどの量を注文して半分以上残して帰ってしまう家族がいた。もちろん食材や電気などを無駄にしないように気を遣う家庭もあるのだとは思いますが、日本人である私からすると「もったいないな」と感じざるをえない場面が数え切れないほど見られた。私はこの留学が日本の外へ出た初めての経験でした。出発する前は楽しみというよりも不安な気持ちでいっぱいでしたが、素敵なホストファミリー、クラスメイト、先生に出会い、全体的に積極的な態度で1ヶ月半を過ごすことができ、想像していた以上に実りのある研修になりました。

研修参加者からのアドバイス

1. 出発前に気を付けたほうが良いこと

- 荷物は軽めに。帰りにお土産で思ったより重くなったりします。
クレジットカード(私はプリペイド式のカードでした)の使い方をよく確認しておく。いくらまでかとか、使いすぎたらどうするのかなど。
- 健康管理
現地の気候を調べておくこと
- ニュージーランドは南半球にあるため日本とは季節が逆です。また、ダニーデンは「1日の中に四季がある」と言われるほど時間帯や天候によって気温が変わります。そのため、どのような天候・気温にも対応できるような服を用意してください。また、ニュージーランドは基本的にブリティッシュイングリッシュです。私たちが学校で学習するアメリカンイングリッシュとはアクセントや発音が違うことがよくあるということを念頭に置いておくと、少しは聴き取りがしやすくなるかと思えます。

2. 研修先の授業

- 先生はゆっくりわかりやすく話してくれるし、自分が質問するときなかなかうまく伝えられなくても待ってくれたり、察してくれたりするのでストレスなく受けることができました。
海外の生徒は授業中平気でおやつ食べ出したりして音とかちょっと気になりますが、なれた方がいいと思います。
- 午前中に general English、午後は IELTS 対策のクラスがあった。General English のクラスではクラスメートと話す時間が多く設けられてた。IELTS のクラスでは試験官の経験のある先生から、模擬問題を解きながら日本ではなかなか習うことのできない解き方のポイントやコツを学んだ。
- 通っていた語学学校では、午前中はジェネラルイングリッシュ、午後は TOEIC か IELTS(選択制)の授業でした。午前のクラスは、現地に到着してから語彙、リーディング、リスニング、ライティングのテストを受けて成績順に分けられました。午後の授業は TOEIC と IELTS それぞれ同じように分けられました。午前・午後とも1クラスは20人弱です。授業時間は、午前中は毎日10時始まりで50分授業が3本、午後は14時始まりで月金は50分授業1本、火～木は2本でした。
授業内容や課題については担当の先生によって大きく違ってくるので一概には言えませんが、私の午前の担任の先生は決して週末課題を出さないし、午後の担任の先生は一度も宿題自体を出したことはありません。

3. ホームステイ

- わからないことはなんでもファミリーに聞いた方がいいです。あと、ファミリーが頻繁に外出に誘ってくれるかもしれませんが、無理してついていく必要はなくて、家でゆっくりしたいとか疲れているときははっきり断ってその旨を伝えるようにしましょう。そうすることでお互い変に気を遣うことがなくなっていきます。
- マザー、ファーザー、12歳のシスター、8歳の男の子の4人家族。とても明るく楽しいファミリーで、週末には観光地に連れて行ってくれたり、kiwiの方言やジョークを教えてくれたりした。ホームステイを通じて、授業以上に日常会話能力を身につけることができた。
- 短期研修中の6週間はホームステイでした。私の家では、まず洗濯はファミリーの服と一緒に回してもらっていました。食事は朝はシリアルを自由に食べ、昼は前日の夕食の残りかファミリーが作ったサンドイッチやラザニアなど、夜は毎日ファミリーが作ってくれていました。掃除に関しては、週に1回お掃除サービスのようなところの女性2人が掃除をしに来てくれていたので、基本的に彼女たちに任せていました。しかし、各家によって状況はかなり違ってきます。

4. 食事について

- 私は食事には恵まれていて、どれもおいしかったのですが、もし出された食事が口に合わないときは正直にそう言ってもいいと思います。
- 私のホストファミリーはレシピと食材が毎週送られて来るサービスを利用していたため、様々なジャンルの料理が食べられた。ニュージーランド人は思ったよりも少食で、夕飯に炭水化物が出ないこともよくあった。
- 私のホストファミリーは料理が趣味で、私が今までに出会った人たちの中でも五本指に入るぐらい料理が上手でした。そのため、毎日様々な絶品料理を食べることができました。普段の食事には野菜が多く、バランスが取れていました。また、ビーフやチキン、ポーク以外にもラムやシカ肉をよく食べました。ムール貝や手作りのスモークサーモンをおやつでよく食べていました。ファストフードは食べない主義の家庭だったので、現地で食べたファストフードはフィッシュアンドチップスを1回とサブウェイのサンドイッチを1回、それからクイーンズタウン旅行でハンバーガーを1回だけです。不思議なことにスープは一度も出ませんでした。

5. 現地学生・地域住民との交流

- 私のステイ先の周りに住む人は誰もがすれ違うときに快く挨拶をしてくれました。挨拶はされたら返すのは当然ですが、自分からも笑顔で挨拶するといいなと感じました。

- 大学附属のランゲージセンターに通っていたため、現地学生とは特に交流はなかったが、ブラジル、タイ、中国、韓国、タヒチなど様々な国からの留学生と交流できた。
- 学校には日本人の他に韓国、中国、タイ、ロシア、ブラジル、パキスタン、タヒチなど様々な国籍の人がいました。また、年齢も様々で結婚している人、子どもがいる人や先生をしている人もおり、本当に多様なバックグラウンドの学生がいました。外国の人は高確率でFacebookかInstagramをしているため、アカウントを作っておくと連絡を取るのに便利かも知れません。

6. 経済面

- 海外ではクレカ払いが主流のようです。日本と同じ感覚で現金は持ち歩かない方が無難。私が行ったところは学生の街でもあったので、昼間は平和でした。夜はわかりませんが。人の多い中心街を歩くときなんかは現金はあまりたくさん持ち歩かない方が安心だと思います。
- フルーツや農作物は日本よりも安いですが、シャンプーなどの生活用品は高め。
- 現地で言われたのは、ニュージーランドの人は現金をほとんど持ち歩かず基本的にカードで支払いをするということです。必要最低限の額だけ両替をして、あとはカードで支払うのがいいかもしれません(私は多めに両替をして行きほとんどキャッシュで払いました)。しかし、バスでの支払いなどカードが使えない場面も多々あるので注意してください。Money T Globalなどの海外で現金を引き出すことが出来るカードを作っておけば安心だと思います。

7. その他

- 英語がうまく聞き取れなかったりうまく話せないのは当たり前なのでもう聞き直った方がいいと感じました。うまくできないのは当たり前だけど間違ってもいいから挑戦することが大切です。そうやって考えると気持ちが楽になりました。
- 自然が豊かな静かなとても過ごしやすい街でした。
- 日本料理を作ると喜んでくれます。大学の近くにアジアスーパーがあり、日本の食材がたくさんありました(割高ですが)。



UNIVERSITY OF CALIFORNIA UC RIVERSIDE

期間：文系/ 2月26日～3月27日 理系/2月26日～3月19日

滞在：ホームステイ

参加費：文系コース 約510,000円 (授業料+旅行代金+宿泊代など)

理系コース 約420,000円 (授業料+旅行代金+宿泊代など)

奨学金 16万円支給(文系) 8万円支給(理系)

研修内容

<文系コース>

①週20時間の英語コース ②アメリカ文化研究コース ③現地学生との交流

コア英語4単位認定

<理系コース>

①理系英語コース ②理系演習 ③現地学生との交流

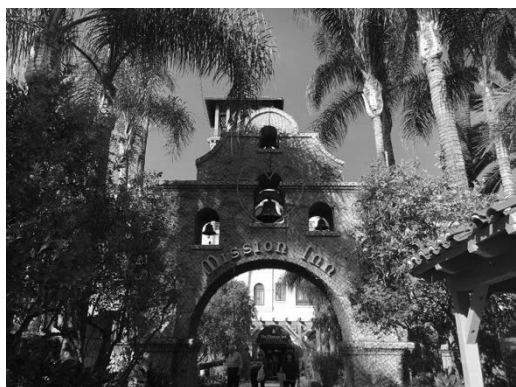
海外交換留学認定科目2単位認定

UCR 短期留学を終えて

生活科学部 人間生活学科

1年 相澤風花

授業内容



1日の授業は午前と午後に分かれており、基本的に午前中はアメリカの文化についての講義・演習、午後は演習・体験型学習であった。

第1週目の午前中はレクリエーションや英文法の復習などの授業もあった。また、現地に来て自分が関心を持ったことをホストファミリーにインタビューし、それを発表するという簡単なプレゼンテーションを行った。午後は、屋外の大型商業施設での買い物、大学構内でのオリ

エンターリング、伝統的な染色方法であるタイダイの体験などを行った。2週目はリーダーシップがテーマに掲げられ、リーダーシップについての講義を受けたのち、アメリカの公民権運動を先導したリーダーたちについて各自調べ発表するというワークショップを行った。また、午後の活動では体育館での球技、ズンバダンス体験、ボウリングなどを行った。また、1・2週目の午後には、演習形式の授業で現地学生と会話をする Conversation Activity という授業があった。3・4週目は、様々な活動と並行してアメリカの文化についての講義が行われた。具体的な内容は、政治・地理・音楽・料理・言語・移民などであった。事前にアンケートを取っていたので参加者の興味に応じて内容が決められていたように感じた。これらの講義をもとに2人1組でアメリカの文化についての最終プレゼンテーションを行った。このプレゼンテーションに備えて、プレゼンテーションのやり方や内容についてのワークショップも行われた。午後は、大学構内のアスレチック体験、ボタニックガーデンの散策、ヒップホップダンス体験などを行った。また、毎週8個ずつ新出単語の意味や用法を調べて提出する課題が課された。

課外活動

毎週末には optional trip と称して様々な観光場所へのツアーが企画されていた。具体的には、Disney・Los Angeles Tour・Six Flags Magic Mountain・Universal Studios・Ontario Mills に行くことができた。それぞれへの参加は任意で、参加する場合には申し込みをし、追加料金を払う必要があった。LA tour では Hollywood にも行ったのだが、観光客目当ての悪い商売をしている人（スパイダーマンの格好で写真を撮らせる・CD を売りつける）もいるので気を張らなければいけなかったが、Hollywood 独特の雰囲気には感動した。私は Six Flags Magic Mountain（現地の人が絶賛する絶叫系アトラクション施設）に行きたかったのだが、参加希望者が3人しかおらず、ツアーがキャンセルされてしまったので、行きたい場所はあらかじめ同じ研修に参加している人同士で話あっておくと思った。

Universal Studio では、世界観が作り上げられており 3-D 技術を駆使した演出が楽しめたのでとても魅力的であった。

また、個人的な課外活動として UCR の剣道部に参加したことが自分の中では一番良い思い出となった。中学時代から剣道を続けており興味があったので出発前に UCR の HP を見たところ剣道部があることがわかり、メールでコンタクトを取ると受け入れてくれそうだったので参加することにした。実際に参加してみると、アットホームな雰囲気ですぐに打ち解けることができた。私は送り迎えを引き受けてくれる部員がいたので良かったのだが時間が遅くなってしまうのでホストファミリーと要相談であった。ただ、このプログラムだけでと現地学生と交流する機会は少ないので、機会があればクラブ活動へ参加して交流を深めるのも良いと思った。



アメリカ・カリフォルニアでの生活

まず料理について書くが、私のホストファミリーは若干メキシカン系であったので、食事もトルティーヤやタコスなどメキシコ料理が多かった。出発前はハンバーガーやピザばかりかと思っていたので拍子抜けである。また、昼食はホストファミリーが用意してくれたのだが、サンドイッチ・フルーツ・スナックというアメリカのランチの定番メニューがほぼ

毎日続いた。しかし、嫌いな食べ物は伝えれば変更してくれ、また何が好きで何が嫌いかを把握しようとしてくれたので、はっきりと Yes か No ということの大切さを学んだ。また、カリフォルニアはメキシコの移民が多いので、スパニッシュを話している人も多く、アメリカとメキシコの文化が混ざっている印象を受けた。私たちのホストファミリーは敬虔なクリスチャンだったので毎週日曜日は教会に行ったのだが、そこでも賛美歌を英語とスパニッシュの両方で歌っていた。これまでキリスト教に触れる機会はなかったので、礼拝はとても良い経験となった。ステイ先では、食事のたびごとに祈りを唱えるなどカルチャーショックを受けた場面もあったが、生活の中でキリスト教がどう信仰されているのかを知ることができたので良かったと思う。またカリフォルニアの気候は差が激しく、30 日間で冬から夏まで経験した気分であった。幅広く温度調整が可能な服を持って行くと良いと思った。また、現地の人は驚くほどにパーカーやTシャツにジーンズやヨガパンツという格好であるので、あまり浮きたくないと考えるならば、そういった格好に近い服を持って行くと良いだろう。また、温度に関係なく日差しはとても強いのでサングラスと日焼け止めは必要だった。人生で初めてなぜ外国の人がサングラスをかけているのか意味がわかった。また、人柄も陽気な人が多く話すだけでとても楽しかったのでまたぜひ訪れたいと心から思った。充実し刺激に溢れた 30 日間を通してカリフォルニアが大好きになった。

アメリカ短期留学を終えて

文教育学部 言語文化学科

2年 伊藤真帆

「授業内容」 最初の1週間は簡単な英語を使ったゲームやアメリカの地図を使って各地域の地形や自然、有名なスポーツ、どのような人から成るかの説明などでした。第2週目は主にリーダーシップについて学びました。どのようなことがリーダーには必要なのかをグループで、話し合い全体で共有しました。会社で起こる問題に対してどのようなアプローチをすればよいのか、グループで話し合ったり先生の話の聞いたりしました。1週目より難しかったですがとても興味深く聞くことが出来ました。3週目はアメリカの食べ物、戦争などの歴史、選挙制度などの話を聞きました。初めて知ることも多く難しいと思うトピックもありましたがとても面白かったです。先生の考えを聞けたり地域や人種、様々な要因によって違うアメリカ人の考えを聞けたりして、日本人とは違うアメリカ人の思想を学ぶことが出来ました。第4週は liberty と freedom などについて学びました。宗教と政治に関する話で難しかったですがとても面白かったです。動画を見せながら説明して下さったのでわかりやすかったです。授業は毎日9時から12時までで、1時間ごとに休憩があったので最後まで集中して参加することができました。最初の1週間はわかりやすい内容だったのであまり英語を聞くことが出来なくても理解することが出来ました。だんだん慣れてきた頃に難しい話題になったので授業に取り組みやすかったです。授業をしてくれた先生はサウジアラビアで4年英語を教えていたらしいのでそこでの経験もいろいろお話しして下さいました。最後の日には2人一組での10分ほどのプレゼンテーションがありました。本番までに3回ほど準備の時間が課外活動としてあったのであまり宿題として原稿やパワポを作る必要はありませんでした。プレゼンの内容はアメリカに来てから学んだことでしたが、いろいろ調べるのではなく、自分が感じたことでないといけません。しかし、だいたい暗記してプレゼンするようと言われていたので家で練習してから本番に臨みました。

「課外活動」 昼食を食べ終わってから、1時からありました。ダンスや大学のメインキャンパスやボタニックガーデンを歩いたり、ズンバダンスやヒップホップを踊ったり、Conversation Activityなどの活動をしたりしました。現地の大学生とのお話出来ると期待していましたが、お茶大生だけの活動であったことが少し残念です。タイダイアクティビティではアメリカの伝統的な染め物の方法を学ぶことが出来ました。運動をする活動もあって体を動かしてリフレッシュすることが出来ました。リーダーシップワークショップでは一人一人がアメリカの現在を築くことに大きな貢献をしたリーダーを調べ、グループや全体で発表しあいました。様々な人の活動を知ることができました。ボーリングに行ったりショッピングに行くこともでき、たのしい活動も多かったです。

「日常生活」 ホストファミリーの方はとてもいい方で過ごしやすかったです。いろいろ質問していろいろなお話をすることが出来ました。毎日のご飯も私たちの好きなものや嫌い

なものを伝えるといやな顔せずに対応してくれたのであまり食には困りませんでした。放課後にダウンタウンリバーサイドなどに行きたいと伝えると遅い時間迎えに来てくれたので放課後もいろいろ楽しむことが出来ました。Optional Trip ではディズニーランドカリフォルニアやロサンゼルス、ユニバーサルスタジオハリウッドに行きました。どの場所もとても面白かったです。自由に行動できたので自分たちの行きたいところに行くことができてよかったです。大学の近くにはたくさんのカフェやレストランがあつていろいろなものを食べる事が出来ました。セブンイレブンもあつてコーヒーをよく飲みました。日本のお菓子も売っていました。ホストマザーがバーに連れて行ってくれて日本の居酒屋とはとても雰囲気がちがい、とても面白かったです。その日はセントパトリックデイで緑色のビールを多くの人が飲んでいました。UCRについてすぐに日本の文化について学ぶサークルに参加しました。現地の大学生がテスト週間だったため一回しか活動がなかったのが残念でしたが、そのときに知り合った人とLINEを交換して話しています。ホストマザーのお友達が週末に来たりしていろいろな人に会いました。日本とアメリカの友達との関わり方の違いを垣間見ることが出来ました。最後の土曜日にはタコスパーティーを開いてくれました。とてもおいしくてとても楽しかったです。先生もそうでしたが、ホストマザーと話していて、日本の存在は知っていてもあまり日本について知らないということが分かりました。アジアであるということしか分かっていなかったり、日本がどのような文字を使っているかも知らないということを知って驚きました。ある日曜日には協会に行きました。教会では賛美歌のようなものを聞き、牧師さんのような人の話を聞きました。ほとんどすべての人が黒人の教会でした。クリスチャンであることに肌の色は関係ない、オバマ大統領は素晴らしかったなど政治的なことを説教として話していたことに驚きました。今回の留学ではさまざまなことを勉強、経験できました。ホストマザーや先生、助けて下さったすべての人に感謝の気持ちでいっぱいです。これからもっと英語の勉強をしようと思えることができる経験でもありました。ありがとうございました。



UCR での語学研修を終えて

文教育学部 人間社会科学科
1年 今川愛合

授業内容

朝の9時から12時まで3時間、間に休憩を挟みながら毎日授業があった。午後は日によ



ってバラバラで、課外活動の日もあれば、リーダーシップワークショップや conversation activity のような授業もあった。午前中の授業では、主に先生がアメリカの文化について様々な観点から語ってくれた。政治、スポーツ、食べ物、世界遺産、移民、宗教などについてである。私が一番印象に残っているのは、政治についてである。州によって支持している政党が大きく異なることや、トランプ氏が大統領になった背景などを学ぶことができ、大変興

味をひかれた。もちろん授業はすべて英語であるため、最初は先生の英語を聞き取るのに精いっぱいだったが、回を重ねるにつれ少しは内容を理解できるようになった。授業最終日には、ペアで10分程度のプレゼンテーションを行った。自分たちで発表することでさらに理解が深まり、アカデミックな英語の勉強にもなったため、とてもいい機会であった。

課外活動・Optional Trip

授業後の課外活動では、ズンバやヒップホップダンスをしたり、UCRの見学ツアーを行ったり、アメリカで伝統的な Tie Dye と呼ばれる染物をしたりした。身体全身を使うアクティビティーが多く、現地の学生さんとも一つの輪となって楽しく遊ぶことができた。

Optional Tripでは、カリフォルニアのディズニーランド、ロサンゼルス、ユニバーサルスタジオなどに行った。ロサンゼルス観光では、ハリウッドの観光通りが一番思い出に残っている。お土産物屋さんにオスカー像がずらりと並んでいる光景や、山に突如現れるハリウッドの文字を見たときには、とても興奮した。ユニバーサルスタジオでは、日本にはないアトラクションである「スタジオツアー」が一番楽しかった。このアトラクションは、ハリウッド映画のロケ地となった場所をトラムに乗ってめぐることができ、撮影の仕方や裏側などを知ることができる60分のツアーである。これこそ、アメリカでしか体験できないことだと思った。課外活動も Optional Trip もとても楽しかったが、ほとんど日本人だけの活動であったため、他の留学生や現地の学生と一緒に行けたらもっと良かったと思う。

ホームステイ先での生活



左の写真は、私のホストファミリーの写真である。私は、1か月間とても快適で楽しい生活を過ごすことができた。それは、この家族のおかげであったと思っている。まず、毎日おいしい食事を出してくれた。行く前はご飯が合わなかったらどうしようと心配していたが、私たちのために毎日白米を食卓に並べてくれ、たまに味噌汁まで作ってくれ

た。本当にどの料理もおいしく、今はもう食べられないと思うと少し寂しい。また、子供たちが毎日一緒に遊んでくれた。この家庭には、テレビを使ってできるダンスゲームやカラオケマシンがあり、定期的に長女の Kristyn と一緒に踊ったり歌ったりして盛り上がった。金曜日は、兄弟みんなで夜遅くまでカードゲームやジェンガなどをするという習慣があるらしく、私たちもそれに参加させてもらうことができた。お父さんとお母さんもとても優しく、いろんなところに連れて行ってくれた。機会があれば、また会いに行きたいと思う。

まとめ

私は、この留学で、新しい発見がたくさんあった。例えば、アメリカではほとんど毎日フルーツを食べること、普通のスーパーでさえ倉庫のように段ボールで箱売りされていること、アメリカ人はとてもフレンドリーなことなどである。日本でよく異文化理解が大切だと言われているが、この留学を通して、異文化を理解するためには現地に行くのが一番いい方法であるということに気づくことができた。文献などを参考にアメリカの文化的特色を学ぶことはできたとしても、実際にその地に住んでいる人とふれあってみないと分からないことだっただけたくさんある。私は、たった1か月だったため少しではあるが、日本人として受け入れられる部分も受け入れがたい部分も知ることができた。また、日本についても深く考えなおすことができた。ホストファミリーに日本についてはどうなのと聞かれるたびに言葉に詰まってしまう、日本で当たり前のことを知らない人に説明するのはとても難しいと実感した。英語力上達のための留学であったが、それ以上の発見ができてとても有意義な留学となった。これをきっかけに、もっといろんな地に足を運んでみたいと思ったし、彼らと円滑なコミュニケーションができるようもっと英語の勉強を頑張ろうと思えるようになった。

UCR での研修を終えて

文教育学部 言語文化学科

1年 後藤美穂



授業内容

授業はお茶大生だけで行われ、アメリカの地理や歴史、政治や宗教、アメリカ英語とイギリス英語の違いなどの解説を聞きました。その他、リーダーシップについて4人ずつのグループに分かれてディスカッションを行ったり、映画を見てその歴史や地理的な背景について話し合ったりもしました。課題は、毎週 Vocabulary Log というプリントに、単語の意味や例文、派生語を書いたリストを書いて提出する、というものがありませんでした。他にも家族にインタビューしたり、指示された歴史上の人物について調べたりするような課題もありました。調べ物の課題の時は、それぞれが調べたものをクラス内またはグループ内でシェアしました。授業中に少し難しい単語や表現が出てきても、わからないと言えばその都度解説してくださったので、理解しつつ進むことができました。

最後には、この1ヶ月で学んだことをまとめて2人1組でプレゼンテーションを行いました。2週間ほど前から準備を始め、内容や分量、話し方についても2人で打ち合わせをしました。パワーポイントを作ったり発表の練習をしたりするのは大変でしたが、学んだことを1つの形として残すことができよかったです。と思っています。

課外活動

授業は午前で終わり、午後は毎日色々なアクティビティがありました。UCRのメインキャンパスのツアーやTie Dye(染物)の体験、ズンバダンスやヒップホップダンスのレッスンなどもありました。さらに、conversation activity という時間では、お茶大の理系のグループとも交わって4人1組のグループを作り、与えられたトピックに関して英語でディスカッションを行いました。グループには1人ずつUCRの生徒がついて、アドバイスや進行の手助けをしてくれました。その時に知り合った生徒の1人とは、アクティビティの後で連絡先を交換し、後日その人とそのお友達と一緒に昼ご飯を食べたりもしました。ただ、お昼ご飯と一緒に食べるのを初めて誘ったのが最後の1週間の時だったので、もう少し早く動き出せばもっと友達の輪が広がったかもしれないなと思っています。

週末には optional tour でカリフォルニアディズニーやユニバーサルスタジオ、ロサンゼルス市内観光に行きました。LA市内観光ではハリウッドやサンタモニカビーチ、ファーマーズマーケットを訪れ、1日では物足りないと感じるほどたくさんの場所をめぐりました。どの場所も比較的安全でしたが、ハリウッドに行った時は街中にスパイダーマンなどのコスプレをした人が立っていて、アジア人の観光客とわかると日本語(中国語や韓国語と一緒に)に言ってくることも)で話しかけてきて、少し怖かったです。



アメリカ・カリフォルニアでの生活

私のホストファミリーは、マザーがメキシコ出身でスペイン語が母語で英語も家庭で話す、という方でした。それもあって、初めの方はホストマザーの英語が上手く聞き取れないこともありましたが、私たちを気遣って少しゆっくりと話してくれたこともあり、次第に慣れていきました。食事もタコスなど

のメキシコ料理が多く、アメリカにいながらにしてアメリカンな食べ物とメキシコ料理の両方を楽しめました。

とても朝型のファミリーで、私たちが平日の朝起きる頃には家族全員が家を出ている状態だったので、知り合いの方に学校に送っていただいていた。私たちの学校が終わる頃(午後 3, 4 時頃)にはファザーもマザーも仕事が終わっていて、どちらかが迎えに来てくれました。ホストシスター3人のうち2人が高校の水泳部で、放課後に2人の大会を見に行ったこともあります。部員達の応援する様子を見て、アメリカ人高校生とその親御さんたちのパワフルさを肌で感じました。

週末は、土日のどちらかが optional tour だったので、週末のもう1日はゆっくりと過ごすことがほとんどでした。このファミリーは、週末はお昼ご飯を食べたら夜ご飯は食べないというお家らしく、夜にお腹がすいてしまって私たちだけ家にあった冷凍食品の焼きそばを食べた、ということもありました。

毎週日曜日に教会に行くファミリーでしたが、私たちに行くことを強制することはなく、私達は結局1度だけ教会に行きました。その時に初めてホストファザーが牧師さんであることを知って驚いたのを覚えています。礼拝の最初と最後に歌を歌うのですが、その時にホストシスターがバンドのボーカルをやっていたのも驚きました。教会にいた方たちは、初めて訪れた私たちにもフレンドリーに接してくれたので、アウェイ感はほとんどなかったです。

アメリカ人はプライバシーをととても大切にするので、自分の部屋にいると食事以外は本当に全く干渉してこないです。特に私のホストファミリーはものすごく早寝だったので、夕食が終わるとすぐにそれぞれの部屋に入ってしまうことが多く、私自身も課題などで部屋にいる時間が少し多かったのもう少しリビングやダイニングルームで過ごす時間を増やせばよかったなと反省しています。

UCR(文系)短期留学を終えて

文教育学部 人間社会科学科
1年 鈴木悠加

授業内容



私は留学前の一番の不安が授業に関してであり、ついていけるか、内容を理解できるか非常に心配していた。しかし実際は、担任の先生が授業で出てくる難しい単語は意味を解説しながら、そして発言する際はこちらが言いたいことを汲み取ってサポートしながら授業を進めてくれたため、安心して授業に臨めた。

文法の基礎の授業では、日本語で英文法を教わることはまた少し違った表現で文法について学ぶことができたためより理解が深まった。

Conversation Activityでは、現地のUCR学生とディスカッションをした。授業とは違って早いペースで意見交換がされるため時々聞き取れなかったり、うまく意見が出てこなかったりしたが、グループで話し合っって一つの意見を出すという過程を英語で進めることはよい勉強になった。通常の授業のクラスが全員お茶大生で、課外活動もお茶大生だけだったため、現地のネイティブスピーカーと話せる数少ない機会であるConversation Activityは英会話の練習の場として大変貴重だった。

私が一番楽しかったのは、アメリカの文化に関する授業だ。アメリカのダンスの歴史や、独立戦争について、各地域の特色、政治、さらに英語と他の言語との繋がりやブリティッシュイングリッシュとの違いなど、多岐にわたって様々な面からアメリカについて考えることができた。特に、先日行われたアメリカ大統領選挙について先生から選挙前後の空気感や各州の動向など現地のリアルな声を聞くことができたのは大変興味深かった。合わせてアメリカにおける右翼と左翼の政党、特色についても学ぶことができ、対する自分も含めた日本人の政治的関心の低さを実感した。最後のプレゼンテーションも含めて、改めて日本の文化も見つめ直し比較しながら学習に取り組めたと思う。

課外活動



欲を言うとプログラムの課外活動が現地学生や他の留学生とも交流できるようなものだとより嬉しかったが、課外活動の企画も毎週てんこ盛りで充実していたと思う。運動量が減り食べる量だけが増えていく生活の中で、課外活動による運動の機会は大変ありがたかった。特にダンスが好きな私にとっては、ZumbaやHip-Hopのクラスはノリノリで楽しめた。チームで行うアクティビティも多かったため、それを通してクラスのみならず徐々に打ち解

けていくことができたと思う。週末のoptional tourでいったディズニー、LA、ユニバーサルスタジオは言うまでもなく最高のツアーだった。こうした課外活動を通して、店員さんとのやり取りや道を尋ねるなどちょっとしたことだが英語を介してコミュニケーションをとる経験ができた。ただ、やはり留学生ということを配慮されずに英語でものを言われると理解に戸惑うことが多々あり、リスニング能力向上の必要性を身にしみて感じた。

ホームステイの様子

1日の流れは、8時30分に家を出て9-15時まで授業、帰宅後は夜ご飯までは部屋で過ごし、食後はホストファミリーと話したりダンスゲームやカードゲームをしたりすることが多かった。

ホームステイは最高の英語の勉強の場だったと思う。私の滞在先は5人家族で、年が近い女の子がおり、その子が積極的にコミュニケーションを取ってくれたこともあって、色々な話をすることができた。家庭に子どもがいたことで、ゲームをしたり、バドミントンや卓球をしたり、学校の話をしたり、一緒に遊ぶことを通して楽しみながら英語の勉強や文化交流ができた。毎週金曜日は兄弟3人揃って夜遅くまで私たちと遊ぶ時間を設けてくれて、アメリカで人気のトランプゲームを教えてもらったり、日本のゲームを教えたり大いに盛り上がった。

お父さんとお母さんもあたたかい人柄で、私の拙い英語でもニコニコと聞いてくれてとても助かった。元々はフィリピン出身の家族ということで、フィリピンの文化についても同時に学べた。日本の文化について聞かれることも多かったが、なかなかうまく説明できず悔しかった。日本人として日本の良さを英語で伝えられるようになりたいと感じた。

そしてなんといっても食事がおいしくて幸せだった。日本を意識して日本食を作ってくれたり、フィリピン料理をふるまってくれたり、色々な種類や味の食事を出してくれて毎回ご飯が楽しみだった。ただ量が多く、さすがアメリカだなと感じた。

週末は有名なハンバーガー屋さんにも連れて行ってもらったり、教会に行ったり、ショッピングをしたりとアメリカ文化を満喫した。特に印象に残っていることは、日曜日の教会ではギターを伴奏に歌を歌ったり、スピーチを聞いたり、想像以上に明るく陽気な雰囲気だったことだ。ホストファミリーとの会話やお出かけを通してふと日本にはない習慣や反対に似ている部分などに気づくこともあったため、本当にホームステイは得るものがあったと思う。

UCR での研修を終えて

文教育学部 言語文化学科
1年 瀧口志穂

UCR での授業

UCR の International Education Programs では、私たちは Conversation and American Culture Program というコースを受講しました。4週間を通して1人の先生が全授業を担当し、午前中3時間を1時間ごとに区切りながら進められていきました。初日は簡単な会話のアクティビティを行い、それ以降は主にアメリカ文化について日本との差異や誤認されがちなことを中心に講義をしていただきました。講義の合間には、2人または4人でグループを組み、講義内容についてのディスカッションを行う機会も頻繁にありました。このプログラムを通して現地の学生や他国からの留学生と同一の授業を受けることはなかったのですが、日本人だけの環境下とはいっても、日本で英語の授業を受けるのとは、先生が私たちに求めているものも全く異なっているような気がしました。先生は私たちに自由で積極的な発言を求めている、常に私たちとのコミュニケーションを絶やさずに講義を進行させていました。私たちが何を知りたいのか、その要望に沿った授業が展開され、そうして学んだ知識をもとに最終日に2人1組でのプレゼンテーションを行いました。

Activities

午前の授業が終わると、午後は毎日異なる多様なアクティビティが行われました。時には校外に出て添乗員さんも加わりつつボーリングをしたり、その他にも染物体験や、アスレチック、ダンスレッスン、校内の植物園をハイキングしたりと、多種多様な経験をすることができました。特に、Conversation Activity や、メインキャンパスで行われたキャンパスツアーはUCRの学生さんと触れ合ういい機会になりました。

Optional Trip

毎週末には希望制でOptional Tripが開催され、私はディズニーランドとLAツアー、ユニバーサルスタジオ、アウトレットモールに行きました。時には時間が足りなかったり、LAの中心部では危ないと感じることもあったりしましたが、どれも本当にいい経験になりました。リバーサイドは観光地へのアクセスが非常に良かったので、留学期間中にも毎週小旅行をしているような気分になりました。

ホームステイ

ホームステイでは非常に充実した濃い経験をたくさんすることができました。私たちのホストファミリーは、私たちと同年の息子さんがUCBerkeleyに通っているため、実質的にマザーとファザー2人だけのご家庭でした。フィリピンから移住されたということもあってか、以前にも日本人を含め多くのアジア系の学生の受け入れ経験があり、私たちについても初日から



かなり理解してくれました。Free Day にはマザーと一緒に買い物をしたり、映画を見に行ったり、帰国の前日にはリバーサイドのダウンタウンを案内してもらえたりと、本当に素敵な思い出がたくさんできました。滞在中には2回のバースデーパーティーに参加したりと、大規模なホームパーティーを含め、初めての経験の連続はとても刺激的で、アメリカ文化を全身で体感することができました。また、マザーが言語に興味があるとのことだったので、ひらがなとカタカナを教えたりもしました。元々多様な言語を操れることもあったか、すぐに発音や見分け方を把握してしまうなど、その習得の早さには驚かされましたが、最終日にもお礼を言われるぐらいマザーが喜んでくれたのは本当によかったと思っています。ファザーは夜勤の職業についている方だったので、基本的にはあまり一緒に過ごすことはできなかったのですが、それでも休みの日には私たちにとっても美味しい手料理を振舞ってくれたり、本当に優しく接してくれました。時には、お願いしたいことがあってもなかなか言い出せずにいたりもしましたが、そういったためらいは実際には全く不要で、マザーもファザーも全面的に私たちをサポートしてくれました。2人1組という点や、ご夫婦のみのご家庭だという点など、渡航前は正直なところ1ヶ月間を乗り切れるのか不安ばかりでした。しかし、終わってみればとても素敵なマザーとファザーに出会え、また、2人だからこそ異なる視点から日本の紹介ができ、私自身にとっても非常に新鮮でした。ホストファミリーとは近いうちに再会したいと話しているのですが、今回は1日しか会うことができなかつた息子さんも含め、今度は日本で再会できたらと考えています。

研修を終えて

私は英語のスピーキングに以前から苦手意識を持っており、それが今回の研修に参加するきっかけとなりました。実際に1ヶ月間海外で生活してみて、特にホストファミリーとの会話ではかなりその意識を払拭でき、初めて、もっと伝えたい！もっと話したい！と英語で話すことを楽しめたような気がしました。



その反面、私には英語を話す自信が足りていないことも痛感しました。伝わるのか不安で、その不安が話し方に現れてしまい、それが逆に相手を困惑させてしまったこともありました。自信のなさは、単語力不足といった点でもどかしい思いをするたびに増してしまつた部分もあつたので、日本にいる間にこの点に向けた対策を行い、今後もまた海外に出て実践的に、そして次回はさらに積極的に自分から話しかける姿勢を持ってスピーキング力の向上に努めたいです。

留学を通して

生活科学部食物栄養学科

1年 寺中規理子

授業内容



授業は、同じ文系プログラム 12 人で平日の午前中に行った。文法や構文など基本的な学習から始まり、リーダーシップについて考えたり、ディスカッションをしたりもした。時には現地の学生も交えて、あるトピックについて話し合うこともあった。

また、このプログラムでは語学のみならず、アメリカ文化も扱った。ディスカッションを通して、アメリカと日本の文化の相違についても

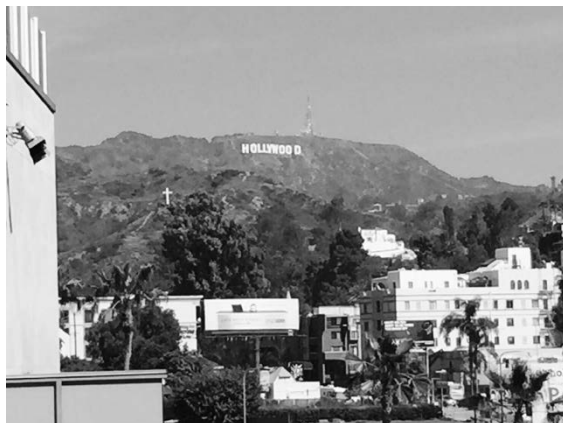
考えることができた。アメリカは国土が広く、これまでに様々な歴史を生んできた国であるので、人種や食文化、スポーツ、地域ごとの特色など幅広い分野を学習した。

担当の先生はネイティブスピーカーであり、はじめは全く聞き取れなかった。しかし、私たちが理解するまで、同じことを何度も繰り返してくださったため、日が経つにつれ、だんだんとすんなり耳に入ってくるようになった。課題は思っていたほどの量ではなかったので、追われることなく、ゆとりを持って生活できた。

課外活動

平日の午後は、主に大学でアクティビティを行ったり、ワークショップに参加したりするなどした。具体的には、ヒップホップダンスやアスレチック、さらにはロッククライミング等の運動をした。これらが良いストレス解消にもなった。

週末には、オプションツアーが開催された。その中で私は、LA ツアー、カリフォルニアアドベンチャー、ユニバーサルスタジオのツアーに参加した。いずれも日本とは規模が全く違い、全てが驚きで新鮮だった。大学があるリバーサイドは郊外の町なので、ザ・アメリカというものを感じたいのならば、ぜひこれらのツアーに参加することをおすすめしたい。



アメリカ・カリフォルニアでの生活

前述したように、リバーサイドは郊外にあり、アメリカの田舎町といった感じで、非常に美しい街並みであった。どこを撮っても絵になる、というのはまさにこういうことなのか、と感動した。毎日の送り迎えの車の中から外



を見ては、その風景に癒されていた。

そして、ホームステイ先のホストファミリーには本当にお世話になった。私たちには本当の孫のように接してくださった。日々の送迎の車の中で、その日大学でしたことや授業の内容、世間話などをし、距離を縮めることができた。私たちも食器洗いや洗濯など、自分たちでできることはできる

限り手伝うようにしたことで、より快適な生活を送ることができたのではないかと思う。あまり馴染みのないメキシコ料理を食べたり、毎週日曜日は教会に行き、信仰している宗教に関する様々なことを教えていただいたりした。それだけでなく、パーティや集まりの際には他の家族や親戚にも紹介していただき、よくしてもらった。特に思い出に残っていることは、家で何回かおかし作りをしたことだ。アメリカのお菓子はどれも美味しく、そして作るのも簡単だったので、これがとても楽しかった。このように、ただ旅行として来ただけでは経験できないようなことを今回たくさん体験することができた。このような素晴らしい、貴重な体験ができたのも全てホストファザーとマザーのおかげであろう。素敵なホストファミリーに出会えて本当に良かった。



UCR(文系)での研修を終えて

生活科学部 人間生活科

1年 土岐小夏

授業内容

授業はネイティブの先生1人がアメリカの文化や歴史、地理、言葉、スポーツ、宗教などを教えるというものでした。アメリカでは地域ごとに、宗教や人種、食べ物が違います。銃規制も州によって違うと知り驚きました。「アメリカ=多様性」と連想するよう、本当に様々なバックグラウンドを持った人々が共に生活していることがわかりました。



文法の授業では基本的な現在形や過去形などの時制や副詞の位置、接頭語や接尾語を習いました。文法を日本語で学ぶのではなく英語で学んだため、より本質的なことを学ぶことができたと思います。

渡航前は「留学」だから他の大学や他の国から来た大学生と一緒に授業を受けると考えていました。しかし実際は、想像していたのと違い、お茶大生だけで授業を受けたため現地の大学生と話す機会がほとんどありませんでした。そのため最後の週に、1回だけ会った現地の大学生に連絡し友達を連れてきてもらい一緒にお昼を食べました。自分から積極的に英語を話す機会を作ることの重要性を感じました。

課外活動



基本的に午前にはクラス、午後に様々な活動が用意されていました。アメリカ生まれのズンバダンス、ジャズダンスや染めものをしました。この活動を通してアメリカ文化を少しですが学ぶことができました。他にも、ショッピングモールに行ったりガーデンを歩いたり、ボウリングやクライミングウォールをしたりしました。アメリカは車社会のため運動することが難しいです。なのでこれらの活動は私たちの体力を配慮してくれたものであったと思います。

週末はオプションツアーという形で、ディズニーランド、ユニバーサルスタジオ、ロサンゼルスツアーに行くことができました。どれも楽しく、違う学科の友達とも仲良くなることができました。



アメリカ・カリフォルニアでの生活

私はホームステイをするのは今回が初めてでした。しかし私と同じルームメイトの子が前にホームステイを経験していたため、現地に到着する前に色々なことを教えてくれました。私のファミリーは父、母、娘の5人家族でした。ホームシスター3人は中学生くらいの年齢でした。自

分と同じくらいの年齢のため、話す機会も多くあり良かったなと思います。また、彼女たちが水泳部に所属しているため、放課後に水泳大会に行って応援に行きました。他にも一緒にお買い物に行ったり映画を見たりしました。ご飯もとても美味しく、ホームマザーがメキシコ出身であるため、アメリカ料理だけでなくメキシコ料理も食べるが多かったです。そして日本食も大好きということで夜ごはんに私たちが日本食をご馳走する機会もあり、喜んで食べてくれました。ホームマザーもホームファザーも私たちのことを本当の娘のようにしてくれて感謝しかありません。

ホームステイをしていて日本にいる時とは大きく違うと感じたことがあります。それは、アメリカでは自分の気持ちを伝えなければいけないということです。例えば、自分の苦手な食べ物や出された食べ物が出た時に「食べない」とはっきりと言わなければいけません。日本では、はっきりと言ったら相手に失礼ですがアメリカでは気持ちを言わなければ逆に失礼だということがわかりました。

今後に生かしていきたいこと

アメリカで1か月過ごして身に染みて感じたことは、受験のための英語と現地で授業を受けたり生活したりする英語は全く違うことです。私は高校生まで受験に合格するための英語しか勉強していませんでした。そのため、ホストファミリーからの質問などがわからない時がしばしばあり、会話や自分の発表するとき苦労しました。悔しい思いをしたので私は生きた英語力を身につけるために英語の授業を積極的に履修しコツコツと勉強しようと思いました。そして、アメリカで積極的に授業に参加することができたのでこれからの授業でも発言をしっかりと出来たらなと思います。

今回の短期留学で英語だけでなく自立についても考えることができました。私は実家暮らしのため、自分で起き、自分でご飯を作って、自分で洗濯をして、自分で掃除することの難しさ、普段両親に頼りきりであることがわかりました。ただ「楽しかった」だけで1か月が終わらなくてよかったです。

UCR での生活

生活科学部人間生活学科

1年 原川朋華

授業内容



平日は毎日 9:00～12:00 にお茶大生だけの授業がありました。内容は日によってさまざまでしたが初めの1週間は英語を使ったゲームをしたり先生がアメリカの地理や歴史について話すのを聞いたりしていました。また、文法についても学びました。日本では普通だと感じる疑問文でも、アメリカ人にとっては失礼だと感じるものがあったり、その逆もあったりして文化の違いを感じられて新鮮でした。徐々にグループ

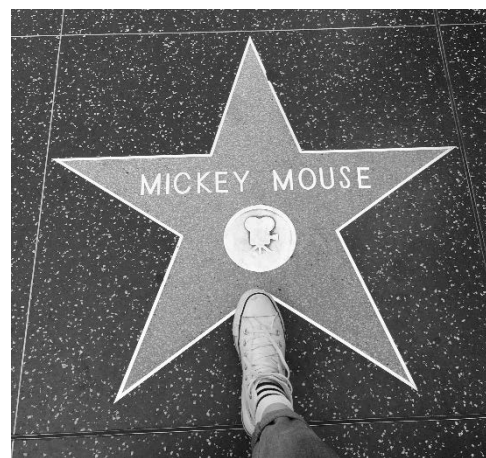
内でのディスカッションや英文読解に移っていき、難易度が上がっていきました。先生は少し話すのが早いと感じることもありましたが、比較的易しい語彙を使って話してくださいました。

課外活動

午後はスポーツをしたりワークショップをしたりしました。留学期間の初めのほうに行われた大学探検では UCR の広いキャンパス内で課されたお題をクリアしていくというものとても楽しかったです。ワークショップでは UCR の学生やお茶大の理系の人たちも混ざって、結婚相手やリーダーシップについてディスカッションをしました。その他にもボーリングにダンス、アスレチック、染付体験など楽しい活動が多かったです。

アメリカでの暮らし

留学中はホームステイをしました。私は今回が初めてのホームステイでとても不安でしたが、ホストファミリーはとても優しく受け入れてくれました。自分の英語が未熟でうまく話せない部分もありましたが、伝わったときは嬉しかったです。また、ホストファザーは料理がとても上手でいつもディナーが美味しかったです。アメリカというとジャンクフードをイメージしがちだと思いますが、私のホストファミリーの家ではお米も野菜も出ました。ただ、外食をするときはジャンクフードが多かったです。ホームステイの経験は日本にいたらできないことだと思うので、今回の留



学で一番貴重な経験だったように感じます。

また、カリフォルニアは西岸海性気候で 3 月でも半袖を着ている人が多かったです。晴れ
の日は日差しが強く、サングラスが必要でした。

休日は大学のオプションツアーでディズニーやユニバーサルスタジオ、ロサンゼルスな
どへ行きました。値段がやや割高でしたが、大学のバスでたくさんの観光地へ行くことが
できました。ハリウッドは治安が悪く、少し怖かったので一人歩きやスリには気を付けた
ほうが良いかもしれません。

平日の放課後は、ホストファミリーに車でスーパーマーケットに連れて行ってもらったり、
自分たちでバスを使ってリバーサイドのダウンタウンへ行ったりしました。写真はそこで
食べたカップケーキです。

留学をしてみてたくさんの貴重な経験をすることができました。今後の学習や将来に生か
したいです。



UCR 短期研修報告書

生活科学部 人間生活学科
1年 前田夏秀

参加動機

私が今回の研修に参加しようと思った理由は主に三つありました。一つは、ずっと英語に苦手意識を持っており、今回の研修に参加することで少しでもその苦手意識をなくし、英語力を向上させたいと思っていたこと。二つ目は、アメリカという多文化が特徴の国で多くの文化に触れ、視野を広げ、自分の文化とは異なる人々と関わりを持ちたいということ。三つ目は、今回の研修を通して、積極的なコミュニケーションを身に付けたいと思ったことです。初めての海外で不安はたくさんありましたがこれらの理由で参加を決意しました。

授業内容

授業は朝9時から12時までは講義があり、午後は様々な活動をしました。例えば、午前の授業ではアメリカの文化について学んだり、関連の映像資料を観たり、少しではありましたが、英文法の授業をしました。午後の活動ではTie Dyeというアメリカの染物体験をしたり、ズンバダンスやヒップホップダンスなどのアメリカの文化にちなんだ授業があったり、ディスカッションや会話の授業などがありました。午前の授業ではアメリカについてまだまだ知らないことがたくさんあり、また、昔のことで今は変わっていることなどこれからも学びを深めていきたいと思うものを見つけることができました。午後の活動では、現地の人やUCRに通っている学生と交流する機会を持てたり、文化について学ぶだけでなく、実際に体験したりしたことで、文化を肌で感じる事ができたのではないかと思います。

また、最終日には一ヶ月間のアメリカ生活で学んだことについてプレゼンテーションしました。今まで、日本語ではプレゼンテーションをしたことがありましたが、英語では初めてで全てが不安でした。しかし、終えてみると英語で話すことに対する抵抗感や英語の苦手意識が大幅に減ったような気がします。



→Tie dye 体験で染めた枕カバー

アメリカでの生活

学校以外での生活では、ホストファミリーとの交流がとても記憶に残っています。夕食後に毎日のように1～2時間ほど会話を楽しみました。好きな音楽の話や映画、日本食や日本語など日本の文化について様々なことを話しました。また、ホストマザーもファザー

も料理が得意ということもあり、朝昼晩アメリカの食文化を感じるような料理からホストファミリーの故郷の料理まで毎食のマザーの料理の説明を聞くのが小さな楽しみでもありました。さらに、週末にはモールや映画館、本屋、観光地などたくさんの場所に連れて行ってもらいホストファミリーと多くの濃い時間を過ごすことができたように感じます。

留学を通して

一ヶ月という短い期間ではありましたが、得るものが多く、もっと早く行くべきだったと思いました。英語力不足で伝えたいことがうまく伝えられなかったり、悔しい思いをすることも多々あり、もっと英語を勉強しようというモチベーションにもつながりました。また、次に留学するときはもっと長く留学したいと思います。そして何より、周りの人への感謝の気持ちや時間の大切さをより感じるとても良い機会になりました。



UCR (文系) 研修を終えて

理学部 数学科
2年 川上紗季



授業内容

授業は、お茶大生の同じコースの人全員(12人 うち1年生10人2年生2人)で受けました。月曜日から金曜日の9時から12時までの3時間授業があり、先生は固定でした。主にアメリカの文化や歴史、地理、政治について学びました。先生の話す速度は速かったですが、だんだん慣れました。登校初日にテストがありました。宿題は少し出ましたが、量は多くなく、負担にはならなかったです。

最終日にはグループプレゼンテーションがありました。私は理系ですが今回は文系のプログラムに申し込みました。理系用のプログラムより期間が長かったので文系プログラムをえらびましたが問題はなかったと思います。私たちが授業を受けるキャンパスがメインキャンパスと離れていることもあり他の学生と全く交流がなく、授業自体はお茶大でネイティブの先生に習っているのと変わりがなかったのがとても残念でした。

課外活動

平日は1時から毎日活動がありました。活動内容は盛りだくさんで、Victoria Gardensにショッピングに連れていってもらったり、ボーリング、スポーツ、ダンスなどで体を動かしたり、Conversation ActivityやProject Workshopといった英語の実戦練習までさまざまでした。これはお茶大生と数名の現地大学生のサポートの方で行われました。上の写真はScavenger Hunt(校内をクイズに答えながらまわる)の時のものです。また、1日だけですが、現地の日本好きな方たちの部活を見学させてもらえました。お互いに日本語で話したり英語で話したりし、参加してとても良かったと思います。各土日のうちどちらかには、ディズニーランドやLAツアー、ユニバーサルハリウッドなどのオプショントリップがあり参加しました。大学の先生と一緒にいってくれます。ほとんど日本人のみのツアーで、ほかの国の方との交流は一切ありませんでしたがとても楽しかったので、参加すると思います。



生活全般

カリフォルニアの気候はとても乾燥していて、寒暖差がとても激しかったことが大変でした。日差しが非常に強かったです。今から行かれる皆さんには、Tシャツもコートも持っていくことをお勧めします。また、ホームステイは2人1組でした。私たちのホストファミリーはホストマザー1人でとても優しい方でした。授業前はホストマザーのお友達や、他のホストファミリーに送ってもらいました。授業後はホストマザーが迎えに来てくれました。大学周辺では無料でバスに乗ることができ、お迎えの時間を遅くしてもらってダウンタウンに買い物に行くこともありました。食生活はファミリーにもよりますが、ハンバーガー、タコスなどのファストフード

が多かったです。ジュースが非常に甘かったのをお願いしてペットボトルの水を飲んでいました。ホストファミリーが大変よくしてくれたので不便はありませんでしたが、ずっと靴を履いている生活が大変だったので、スリッパかサンダルを持っていけるとよかったです。私は現地でビーチサンダルを買いました。)洗濯・乾燥、シャワーは好きな時にやらせてもらえました。予定のない土日には、ホストマザーが買い物やショッピングに連れて行ってくれ、とても楽しかったです。

1か月は長いようであつという間でした。毎日新しいことに挑戦できただけでなく、とても楽しい研修となり良かったです。ありがとうございました。

UCR 春期短期研修に参加して

文教育学部 言語文化学科
2年 東出瑛江

授業内容

クラスはお茶大から参加した12名のみだったため、現地の学生との交流はほとんどありませんでした。また、同じエクステンションセンターで勉強しているのは中国から来た学生のクラスがクラスあった他は、日本から来た大学生と高校生のみだったため日本にいるのとあまり変わらない環境であったのが残念でした。午前中のクラスでは、英語の文法や、アメリカの歴史、地理、文化、政治などについて学びました。授業はすべて英語ですが、簡単な単語を使ってゆっくり話すので大部分はしっかり理解できると思います。講義形式の授業なので発言を求められることはそれほどありませんでした。午後のクラスも午前と同じくお茶大生のみで行われました。Conversation クラスは5~6人のお茶大生に対して1人のUCRの学生が付き簡単な会話をするという感じでした。スポーツアクティビティやダンスのクラスは授業というよりはリラクゼーション要素が強い印象を受けました。

課外活動

週末はほとんどのお茶大生 UCR 主催のオプションツアーに参加していました。私が参加したのはディズニーランド、ロサンゼルス、ユニバーサルスタジオハリウッドのツアーです。オプションツアーは朝エクステンションセンターに集合し、バスで現地への送迎を



行ってくれるもので、ほぼ終日自由行動でした。週末の有料のツアーのほかにも、午後からショッピングモールやボウリングに行く無料のツアーもありました。無料のツアーはプログラムの一環として組み込まれているものなので、全員が参加していましたが、有料のツアーは初日

に希望者が料金を支払って参加するというものでした。参加者が少なく、キャンセルになるオプションツアーもありました。有料と無料どちらのツアーも参加しているのはほとんどがお茶大生または日本人の学生ばかりでした。

カリフォルニアでの暮らし

リバーサイドに到着して1週間ほどは寒い日が続きコートを着ていましたが、その後最高気温が30℃を超える日が1~2週間ほどあったため、コートと半袖のTシャツなどの夏物両方を持っていく必要があると思います。また、3月であっても晴れた日はかなり日差しが強いので日焼け止めや、帽子、サングラスなどがあるとよいと思います。また、乾燥した気候のためか私のホームステイ先では洗濯をするのは週に1回だったので、着替えなどは多めにあった方がよいかもしれません。



ホームステイは1家族にお茶大生2人1組で滞在するという形態でした。私たちのホストファミリーは60代の夫婦でしたが、週の半分以上は同じくリバーサイドに住んでいる2人の娘さんやその子ども達、ホストファミリーの両親が家にやってきて一緒に夕食を食べていました。食事はホストファザーがほぼ毎日作っていて、自分の好きな量だけ食べるという感じだったので、それほど不便を感じることはありませんでした。また、リバーサイド



にはショッピングモールやスーパーが多くあるので放課後は買い物に出かけることが多かったです。初日にもらえる学生証を見ればバスに無料で乗ることができるので、放課後にダウンタウンに出かけることもありました。エクステンションセンターからダウンタウンまではバスで約15分弱です。ダウンタウンには市役所などがある他に、教会やホテル、アンティークショップ、飲食店など多くのお店がありました。ショッピングモールにもバスで行くことができます。

理系春季海外研修を終えて

理学部 化学科
1年 飯島紗生



授業内容

理系春季海外研修のプログラムに参加しました。学校では同じプログラムに参加している方と共に英語のリーディング力、リスニング力、ライティング力、スピーキング力の向上を目的とした授業のほか、英語で理系科目を学ぶ授業を受講しました。先生から課せられたテーマについてホストファミリーに質問することが宿題として出されることが多く、インタビュー内容は次回の授業時に発表しました。最終日にはグループプレゼンテーションを行い、普段の授業からそれに向けた準備もしました。学校では授業のほか現地の大学生に大学内施設の案内をしてもらいました。

課外活動

土曜日はオプションツアーとして、カリフォルニアディズニーランドとロサンゼルスに行きました。どちらも観光気分で楽しむことができました。日曜日はホストファミリーが予定を計画してくださり、親戚の誕生日パーティーに参加したり、お買い物に行きました。日本とは違うことをたくさん発見し、とても貴重な体験になりました。



アメリカ・カリフォルニアでの生活

平日は授業後にホストファミリーと過ごしました。お買い物に連れて行ってもらったり、ホストファミリーのお孫さんと遊んだりしました。ホストファミリーは人付き合いを大切にされる方で、私に多くの方を紹介してくださりました。たくさんのアメリカの方と話すことができ、楽しかったです。

UC Riverside・カリフォルニアでの生活

生活科学部 人間・環境科学科

2年 古賀遙菜

授業内容

わたしが今回参加したプログラムでは、主に理系科目を中心とした授業を受けました。先生が2人いらっしゃったので、曜日ごとに異なった内容の授業でした。

生物系の授業では、カタツムリを使って小さな実験を行ったり、また物理系の授業では、英語で書かれた記事を読んで、隣の人と話し合いをしたり、なかなか日本では経験できないような授業で、毎日とても楽しかったです。また、理系の授業だけではなく、語学やアメリカの文化に関する授業もありました。語学に関しては、アメリカのコマーシャルなどのショートムービーを使った授業や世界のいろいろなことわざについて、アメリカの文化に関しては、アメリカの教育制度について、就職事情についてなど、とても興味深いものばかりでした。

また、毎回の授業で、先生が生徒にたくさん質問をしたり、生徒同士で英語で会話をしたりする機会が多かったので、日本人だけの授業でしたが、積極的に英語を使うことができました。

私たちのプログラムの最終課題は、生物の食物連鎖などに関する内容についてのプレゼンテーションでした。3,4人ほどのグループに別れ、それぞれのグループで布や色紙を使った実験を行い、布の色や柄に合わせた植生を仮定して、そこにはどのような動物が住んでいて、どのような捕食関係があるのかを考察しました。どのグループも工夫をこらしたプレゼンテーションとなっていて、とても面白い課題でした。



課外活動

課外活動としては、Scavenger Hunt、Science Library Tour、またオプションツアーとして、ディズニーランドとロサンゼルスツアーに参加しました。

まずは、最初の週に行われた Scavenger Hunt とは、普通にキャンパスを案内してもらうのではなく、初めに地図と課題を渡され、わからないものは学生に聞いたり、キャンパスの写真を撮ったりして、大学内を巡って行く、というものでした。わたしたちのグループは、Scavenger Hunt の課題を出してくれた UCR の学生と一緒に回っていたのですが、課題や地図だけではわからない大学のことを教えてもらったり、彼女の友達にもたくさん質問をしたり、最後は連絡先を交換して、違う日に会った時には声をかけてもらえるようになって、とても楽しいキャンパスツアーでした。

そして、Science Library Tour では、UCR の中にたくさんある図書館のうちの、理系の資料が多く保管されている図書館を案内していただきました。お茶大の図書館とは違って、

4階建の図書館には多くの本はもちろん、自習スペースや、グループワークのしやすいスペースやプレゼンテーションの練習ができる個室など、たくさんの学習スペースがありました。また、館内は飲食が許可されていて、食べたり飲んだりしながら学習する生徒がたくさんいることが印象的でした。建築を学んでいるわたしには、参考になる空間の使い方がたくさんあり、とても勉強になりました。

そして、ディズニーランドでは、日本のディズニーランドと同じアトラクションなどもありましたが、敷地は日本よりも広く、日本にはないアトラクションなどの、日本とは異なるところもたくさんあり、とても楽しかったです。

また、LA ツアーでは、Hollywood & Highland や Santa Monica、Farmer's Market などに行きました。残念ながらハリウッドスターには会うことはできませんでしたが、これまでテレビやガイドブックで見たことがなかった場所にたくさん行くことができ、とても貴重な経験ができました。

アメリカ・カリフォルニアでの生活

日本ではまだ寒い時期だったのですが、カリフォルニアは、雨もあまり降らず、ほとんど毎日晴れていて、気温も30度まで上がる日も多く、日差しは強かったのですが、乾燥していてとても過ごしやすい気候でした。

私のホストファミリーは、料理好きな家庭だったため、ホストファミリーと外食をすることはありませんでした。ハンバーガーやサンドイッチなど、典型的なアメリカ料理だけでなく、キリスト教の伝統的な料理を食べることもありました。どの食事もおいしく、とても幸せでした。

そして、平日はホストファミリーがお孫さんを預かっていました。まだ2歳になっていないのに、とてもたくさんの言葉を覚えていて、とてもおしゃべりが好きな子で、私たちの名前も覚えてくれて、とてもかわいかったです。一緒にたくさんの時間を過ごして、私のこの3週間の生活にはとても欠かせない存在でした。

また、アメリカは映画文化が盛んで、たくさんの映画を見ました。映画館では、日本の半額ほどの料金で見ることができ、まだ日本では公開されていない映画も見ることができました。日本で見る時のような字幕はなかったので内容を理解するのは少し難しかったのですが、英語の勉強にもなってとても楽しかったです。

ホストファミリーをはじめ、UCRの職員の方や学生のみなさんはとても優しい方たちで、たくさんの方のおかげで、いい思い出がたくさんできました。



カリフォルニアでの3週間

理学部 情報科学科

2年 坂井佳帆

授業内容

(写真上) カタツムリの簡単な実験をした時の写真です。教授がカタツムリの研究をしていたので授業の題材になりました。触ったのが久しぶりでした・・・

(写真中上) 最終日に食物連鎖についてのプレゼンテーションがあり、それに向けて3週間のうちの後半はグループワークをしました。

普段の授業は文章を速く読んで、メインポイントを見つける練習をしたり、動画(アメリカのcmや大学の科学の授業の動画など)を見て、その内容をペアの子と話し合ったり、会話の授業では文系のプログラムに参加している方たちとUCRの学生さんたちとグループになって、与えられた議題について話し合ったりしました。内容は、「良いリーダーとは」や「飛行機から砂漠に落ちた場合に必要な物」といったもので簡単でしたが、英語で自分の意見を伝えるというのは難しかったです。

課外活動

(写真中下) ツアーは3回あって、1週目にはアナハイムのディズニーランドへ行きました。理系プログラムに参加していた3人と一緒に回りました。日本とは違うアトラクションにたくさん乗れて、私自身幼い頃に行ったことがあったので、少し思い出せて楽しかったです。

(写真下) 2週目はLAツアーでした。この写真は、ハリウッドにある有名人の名前が書いてある星です。ハリウッド、サンタモニカ、ファーマーズマーケットに行きました。ハリウッドは30度を超えていたのに、サンタモニカは10度くらいで少し移動しただけ

でこんなに気温が違うものかと驚きました。





アメリカ・カリフォルニアでの生活

ホストファミリーについて

・・・私は同じ学科の友達と一緒に60歳くらいの一人暮らしの女性のホストマザーの家でホームステイをしました。最初は、英語が通じなかったらどうしようという不安がありました。確かに、通じないことはたくさんありましたが、ゆっくり話し直してもらったり、どうしても通じないときは文字を書いてコミュニケーションをとったりして、不自由はなかったです。YesとNoの使い方が難しくて最初の方は何どももうお腹いっぱいなのにおかわりをもらうことになってしまいました。「お代わりいる?」「No」「いらないのね?」「Yes」「いるのね」という感じで、日本とは逆なので感覚で答えてしまいましたが、それもだんだん慣れていきました。ホストマザーはとても優しく、色んな所に連れて行ってもらいました。オンタリオミルズという所には2回も連れて行ってもらい、アウトレット品を安く買えました。山の頂上や湖など自然を感じられる所にも連れて行ってもらい、日本のものとは全然違ってとても面白かったです。教会にも連れて行ってもらいました。キリスト教についても色々教えてもらいました。神

がいるかどうかはわからないと言ったら驚かれました。文化の違いについて学ぶことができました。

食事について

・・・(写真上)と(写真中)は朝ごはんと夜ご飯です。朝ごはんは自分で作る形式だったので、毎日ベーグルにクリームチーズを塗ったものとフルーツを食べました。私はすごく好きでした。夜は様々なものを作ってもらえて、この写真はTERIYAKIです。日本の照り焼きとは違ったのですが、日本っぽい味で美味しくて何度か作ってもらいました。(写真下)は現地でカレールーを買って作ったカレーライスです。ワカメ入りの味噌汁のペーストやマヨネーズや、、(笑)いろいろなものを加えてとても美味しく出来ました。しかし、日本の食事が食べたいなと強く思うことは一度もなく、毎回の食事がとても美味しかったです。昼ごはんは好きなものを食べましたが、ほとんどがハンバーガーとタコスでした。本当に美味しかったです。

短期研修で学んだこと

理学部 情報科学科
2年 高山沙也加



授業内容

授業はお茶大生のみで行われ、カンバセーションの授業は合
同でしたが文系理系で分かれ少人数で行われました。

先生は二人いて一人の先生は理系一般の知識についての授
業を、もう一人の先生はちょっとした実験を交えながら最終
日の課題であるプレゼンテーションに必要な知識や重要な
点の説明をしてくれました。どちらの先生も聞き取りやすく、
わからないところがあっても尋ねればきちんと答えてくれ
るので、安心でした。英語力に自信のある方には、もしかし
たら少し物足りなく感じてしまうかもしれませんね。

カンバセーションの授業は数グループに分かれて一つの議題に関しての意見をまとめ、ち
ょっとした意見発表がありました。正直カンバセーションの先生は話が少し速く、何を言
っているのかわからない時がありましたが、各グループに UCR の学生さんがついてくれた
ので、なんとかできました。

課外活動

申し込み制のオプショントリップがカリフォルニアディズニー、ロサンゼルスツアー、
オンタリオミルズの三件ありました。私はオンタリオミルズしか申し込まなかったのです
が、かなり少数派です。クラスメイトは皆楽しかったと言っていたので、興味がある、ま
たは迷っている人は申し込むといいと思います。初週の時点で申し込みの締め切りなので、
気をつけましょう。

オンタリオミルズは、日本だったらなかなか値引きされないようなブランドまで暴力的な
セールが行われていましたし、室内なのでオススメです。化粧品も安いので、ご自身でお
持ちのモノと値段を比較すると楽しいかもしれません。私はトリーバーチの小銭入れとク
リニックの化粧水を買いました。どちらも日本では考えられないような値段です。強くオ
ススメします。一緒にまわった友人はケイトスペードで鞆を買っていました。とてもかわ
いらしいデザインなのに、こちらも価格はいい意味で暴力的でした。

また、三週目には UCR にて New Play Festival という催しがあり、
夜に演劇がありました。一緒に行った子はあんまり面白くなかつ
たと言っていたのですが、なかなか過激な内容で結構面白かったと
思います。注意書きがあるので、そうとは知らなかったのに！と
いう事態は避けられるので安心してください。



アメリカ・カリフォルニアでの生活

奥さん、旦那さん、甥っ子のホームステイファミリーの家でお世話になりました。マザーは平日朝早くから働いており、朝昼食や送迎は基本的にファザーがしてくれました。食事面は基本的に作ってくれたものを食べられる分よそって食べる、という形式でした。私はアメリカの食事はとてもカロリーが高く量も多い、というイメージがあったので戦々恐々としていたのですが、料理は思っていたより健康志向で美味しく、ほぼ毎食フルーツや野菜が食事に供されていました。逆に食べ過ぎていないか心配です。

自分の家にいるようにしていいと言ってくれていたのも、私は下にいたい時はファミリーと共にリビングへ、部屋にいたい時は部屋へと本当に好きなように過ごさせてもらいました。チェスやドミノなどのゲームも教えてもらえ、最終日にはドミノ本体をプレゼントしてもらいました。かなり嬉しかったです。

また、しおりに2、3月の気温は18、19度とあったのですがかなり暖かかった、むしろ暑いくらいだったので、夏服の用意はあった方がいいです。

ファザーは足が悪く、あまり遠くへは連れてってもらえなかったのですが、ペリス湖やモール等にしばしば連れて行ってくれました。私は遠出がそんなに好きではないので気にしなくてもいいのに、と少し思いつつ、それでも楽しかったですし嬉しかったです。

休日に家で映画を見ながらああでもない、こうでもないと話しつつ、海苔をつまむのは私にとって素晴らしいひと時でした。話す時に間違えることを恐れるなど初日に言ってくれ、そのおかげで人見知りの強い私でも数日で溶け込むことが出来ました。コミュニケーション能力が低いと思っている方でもきっとなんとかなります。私がそうです。

食べたものの中で特に印象に残っているのは、アボカドのサラダとラザニアです。食事は基本的にはファザーが、と先に述べましたが、休日はマザーが作ってくれます。上記の品はマザーの手によるものです。アボカドのサラダは一口大にカットされたアボカドとトマト、そして卵の白身に酸味の効いたフレンチドレッシング(おそらく手製)で和えたものです。甘いトマトに熟したアボカドは相性抜群で、そこに白身が加わることで、食感にも個性が生まれます。ラザニアの方はモッツァレラチーズと生地、そしてトマトペーストを幾重にも重ねてあり味も食感も抜群。ここまで書いて気づいたのですが、マザーはどうやらトマトを使った料理が得意なようです。

衣食住からメンタル面まで、ホストファミリーは強い支えになってくれました。

UCR 理系短期研修

理学部 生物学科
2年 中村文花

授業内容

毎週、月・水・金は Grant Gilman の授業でした。毎回プロジェクターを利用して動画などを見ながら、その話題に関してクラスメートと意見交換をしました。数学、物理、化学などの内容から、面白おかしいコメディ系の内容まで多種多様でした。また、工具などを用いて、クイズを出し合ったりしました。

水・木は Jennifer Gilman の授業でした。主に生物の授業で、本物のカタツムリを使った実験などを行いました。また、最終日に発表したプレゼンのために必要な実験やスライドの作成などを行いました。



課外活動

3月3日に行った“UCR Campus Scavenger Hunt”ではグループごとにメインキャンパス内を散策しながら、クイズの回答を作成しました。より早くクイズを解くために、大学内にいらっしゃった学生さんたちに道を伺うなど、積極的に行動しました。学生さんたちは皆さん親切に質問に対応してくださり、とてもありがたかったです。

“Optional Trip”では、DisneylandとLos Angelesに行きました。どちらも貴重な体験で、アメリカの雰囲気強く感じることができました。

アメリカでの生活



毎日、朝食・夕食は主にホストファザーが作っていただきました。昼食は自分たちでサンドイッチを作っていました。材料は冷蔵庫のものとパントリーのものを好きなように好きなだけ使って良いと言われていました。スナックもたくさん買ってください、毎日欠かさずスナックも持って行っていました。野菜やフルーツもたくさん用意してくださったので、食に困ることもありませんでした。また、学校の送り迎えも時間通りに行ってくれました。さらに、放課後や日曜日にはスーパーやアウトレット、映画、海などにも連れて行ってくれました。ホストファザーはとてもアクティブな方だったので一緒にハイキングやジェットスキー、バーベキューなどをしました。毎日色々なお話をしてください、冗談も言っ

て笑わせてくれました。宿題をするのにホストファミリーの意見が必要な時には、時間を取ってくれて丁寧に答えてくださいました。毎日がとても楽しく、3週間は思っていた以上にあっという間に過ぎてしまいました。

UCR での3週間

理学部 化学科
2年 濱野藍

授業内容

授業は大きく分けて、3種類ありました。1つ目は、月、水、金の午前中に行い、英文を読んでその内容について意見を述べたり、理系教科の講義の動画などを見てその内容について理解を深めたりするもので、英語で要点を説明する練習を数多く行いました。2つ目は、火、木の午前中に行った授業で、実験を行って、その内容についてプレゼンするといったものでした。上記の2つはお茶大の理系プログラムに参加した人のみの、少人数でゆったりとした授業だったので、変に緊張することなく楽しんで受けることができました。3つ目は、一週間に一回でしたが、現地の日本に興味がある生徒と、お茶大の文系クラスとの合同での会話練習でした。用意されたテキストを見て、それについて4人くらいのグループで意見を交換するという課題でしたが、現地の学生との趣味についての話のほうが盛り上がり、とても自由な雰囲気でした。日本での授業は、先生にたくさんの教材を与えられてそれを一人でこなしていくという形が多いと思いますが、ここでの授業は一人で教材に向き合う時間は少なく、ほとんどが意見を話す、聞くという時間だったと思います。



課外活動

放課後はリバーサイドのダウンタウンに行き市内観光したり、映画を見たり、ホストファミリーと買い物に行ったり、近所の丘やキャニオンに連れて行ってもらったり、かなり時間が取れたので、様々なものを見られたと思います。また、学校の周りにはカフェやアイス屋、ファミレスなどが立ち並んでいて、ほぼ毎日ランチ後に友達と食べに行っていました。特にアイス屋は学校の周辺にたくさんあり、試食も好きなだけでき、日本にはないフレーバーやトッピングを楽しめるので、とても気に入りました。

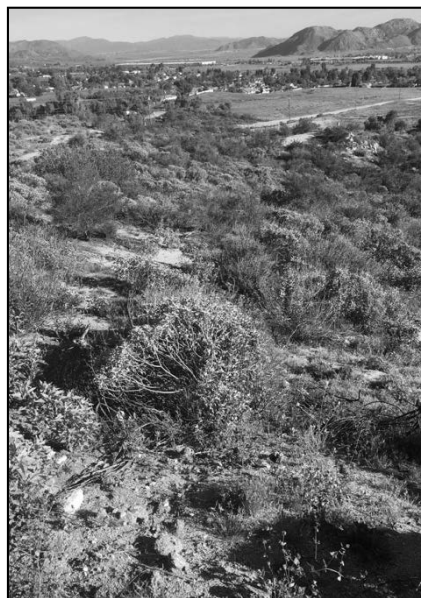
オプションツアー

最初の土曜日にはディズニーランドに行きました。日本のディズニーランドとアトラクションはそんなには変わらないと思いました。しかし、周りにいるのがキャストも含め、全て外国人で、とても新鮮で、「夢の国」感が日本よりも強かったです。敷地は日本よりも広く感じました。次の土曜日にはロサンゼルスツアーに行きました。ハリウッドハイランドはとても賑やかで、長年行きたかった場所、見たかったものを巡ることができ良かったです。有名人に合うことはできませんでしたが、私の好きなアメリカのトークショーのスタ

ジオを見ることができ（外観）興奮しました。

ホームステイ生活

私は一人でホームステイだったので、ホストマザーの人と常に話していました。私は、アメリカの映画や音楽（ポップ）、テレビ番組が好きで、来る前からネットで見ていたので、そのことについて話すと、彼女も同じものが好きだということが分かり、着いた日から意気投合しました。食事はすべて用意してくれ、家においてあるスナックやソーダ、フルーツなども自由に好きなだけ食べていいよと言われ、日本に帰ったら知り合いに顔が丸くなったねと言われるほど食べました。家も非常にきれいで大きくて、映画館のような大きなテレビやプールがあり、圧倒されました。今回の研修で最も思い出になったのは、このホームステイ生活です。アメリカに第二の家族を持つことができよかったです。



UCR 理系プログラムに参加して

理学部 生物学科
2年 村上遥香



授業内容

授業はお茶大の参加者のみで編成されたクラスで行われました。理系プログラムということで、数学、物理、化学、生物などの科学分野の初歩的な内容の講義のほか、科学分野の有名な先生の講義を映像でみて内容を把握することもたくさんしました。授業内では、ペアの人と英語で話すような機会が多くありました。ほとんど毎日課題が出ましたが、難しい課

題ではなく、ホストファミリーに聞いてみるというものや、この話題について話してみようというものが多かったため、課題を通じてホストファミリーともたくさん話すことができました。後半の授業では、簡単な生物学に関する内容のグループプレゼンテーションの準備を行い、最終日にはパワーポイントを用いて英語でプレゼンテーションをするという貴重な経験もしました。

その他にも、conversation activity という会話練習の授業もあり、そこではUCRの学生も交えてグループごとに会話を行いました。実際に現地の学生も交えての会話だったので、うまく表現できないところは助けてもらったので表現など学ぶところが多くありました。

課外活動

土曜日には学校のオプションツアーとして、カリフォルニアディズニーランド、LA ツアーがありました。LA ツアーでは、ハリウッド、サンタモニカ、ファーマーズマーケットを1日で回るというツアーでした。また、他にも学校の授業が午前中で終わる日を利用したアウトレットモールへのツアーもありました。このように、観光地へ行けるようなプランがたくさん学校側で用意されていたのでとても良かったです。

平日は授業がお昼または3時ごろに終わることが多かったので、授業の後は友達と映画を観たり、ダウンタウンへ観光に行ったり、ホストファミリーと過ごしたりしました。ホストファミリーとは近くの山へハイキングに行ったり、湖でジェットスキーをしたり、買い物へ行ったりしました。

基本的に日曜日はホストファミリーと過ごし、大きなアウトレットモールでショッピングをしたり、サンディエゴへ連れて行ってもらったりといろいろなことをして毎日が充実していました。

アメリカ・カリフォルニアでの生活

カリフォルニア、リバーサイドはロサンゼルスから車で約1時間の距離にありますが、周辺には駅や電車があまりなく、基本的に移動手段は自家用車、または自分たちで出かける場合はバスという感じでした。学校の周辺から乗るバスは UCR の学生証を提示すると無料で乗せてもらえたので、移動手段に困ることはなかったです。

気候は、私たちが留学へ行った時は予想以上に気温が高く（3月なのに最高気温は 30℃を超えることが多かったです）、日差しも強かったため、現地で帽子とサングラスを購入し、昼間は常に身につけていました。

ホームステイ先での食事については、行く前は毎日ハンバーガーやピザを食べるのかなと勝手に思っていたのですが、全くそんなことはありませんでした。私のホームステイ先では、少し日本のものとは違いますがカリフォルニア米というお米をほとんど毎日出してくれましたので、お米が恋しくなることはありませんでした。また、焼き魚やフルーツを食べたりと、意外と私たちにとっても食べやすいものばかりでした。（もしかしたらホストファミリーが気を遣ってくれていたのかもしれないですが…）外で外食する時は、飲食店などで飲み物や食べ物を注文するとどれもサイズが大きかったため、1つ注文して友達とシェアすることが多かったです。そのほか、スーパーに買い物へ行って様々な味のギリシャヨーグルトを買って毎朝食べるのが楽しかったです。

留学したことで、英語を使う力が上がったのはもちろんですが、普通の旅行では感じることもできない文化の差をたくさん肌で感じる事ができたと思います。行く前は楽しみという気持ちよりも不安な気持ちの方が圧倒的に大きかったですが、今振り返ると毎日が本当に楽しく、充実していました。留学して本当に良かったです。



UCR 短期研修を終えて

理学部 数学科
2年 森島佑美

授業内容

授業は主に授業は理系一般(月、水、金)と、最終プレゼンに向けての学習(火、木)が主でした。理系一般では数学や物理、天文学など様々な理系の基本知識を英語で学習しました。中には宗教や政治など、理系の枠を超えた内容について議論を行う機会もありました。お茶大で受ける授業と違って積極的に発言や意見を求められるため、最初の方はあまり慣れませんでした。しかし次第に皆とコミュニケーションを取るのが楽しくなり、文法を気にしすぎずに発言を行えるようになりました。



最終プレゼンでは生物についての学習をグループで行いました。元々生物を学ぶとは聞いておらず、また自分自身生物を学習するのは高校以来で発表できるのか不安でしたが、先生が手厚くサポートしてくださいました。上手く発表内容がまとまらないときも心配して声をかけてくださり、原稿のチェックもしていただき精神的にも助かりました。

宿題はホストファミリーに質問する、というような簡単なものが多かったです。ただ、最終プレゼンの準備は時間をかけて行う必要があり、グループで練習するのも大変でした。

課外活動

大学内で時間をつぶさなくてはならないことが多々あったため、その時間を使ってキャンパス内をよく探索していました。大学は非常に広く、ボタニックガーデンや劇場などもあり驚きました。体育館や図書館も非常に広く、学生が学習に集中できる環境が整っていると感じました。

UCRは昆虫学の研究が有名とのことだったので、昆虫学の研究棟も見学しました。その際に教授が声をかけてくださり、研究室を案内してくれました。マイクロサイズの昆虫を電子顕微鏡で見たり、研究内容について説明を聞いたりしました。全く学習したことのない分野にも関わらず詳しく分かりやすく説明していただき非常に貴重な経験となりました。

また、Conversation Activity を通して知り合った現地の友達とお茶をしたり、食堂でアメリカと日本の文化の違いについて話したりしたこともありました。短い留学期間の中で現地の友達と関われる貴重な機会でした。

アメリカ・カリフォルニアでの生活

物心がついてからは日本と東南アジア、イギリスしか行ったことがなかったので、アメリカでの生活は非常に新鮮でした。そのなかでも食環境の違いが最も印象に残っています。日本人は食についての繊細なこだわりがあり、綺麗に盛り付けられたおいしいものを食べたいと感じる人が多い印象です。野菜や魚など、健康的な料理のレパートリーも多く存在します。その一方、アメリカは盛り付け方や色、栄養バランスなどよりも、まずはお腹いっぱい食べられる「量」を大事にしていると感じました。簡単にすぐ作れる、というのも特徴の一つで、自炊は手間がかかるからと外食をしている人も日本に比べてかなり多かったです。このような手軽な食事・外食文化というのがアメリカ女性の社会進出を後押ししているのではないかと強く感じました。

一方で、日本の技術が予想以上にアメリカにも広く認められていることに感動しました。車や日本食、アニメ文化・ゲームを始め化粧品なども日本製品を多く見かけました。日本文化に精通している現地の学生もおり、自分の国の技術・文化についてはより一層誇りが持てるようになりました。



カリフォルニア・リバーサイドでの生活

理学部 生物学科
3年 金子乃愛



授業内容

主に理系アカデミック英語の基礎を学びました。日によって数学の四則演算や図形、物理のニュートンの法則、生物でカタツムリの生態などと理系の幅広い分野の基礎を学ぶことができました。また、最終課題としてプレゼンテーションがあり、班に分かれて一週間前から準備を行いました。テーマは ecology で、授業で food web について学んだ後、

自然淘汰の簡易的なデモを行い、その結果に基づき考察を行いました。その後、班のメンバーと協力しながら原稿を作成し、最終日の授業で発表を行いました。

理系の授業以外にもアメリカの学校制度や文化を学ぶ機会や動画を観て英語でその動画の説明をするという授業もあり、とても為になったと思います。また、conversation activity の授業で UCR の学生と交流をしたり、広大な UCR キャンパスや設備が整った理系の図書館をまわったりと貴重な体験をすることができました。

課外活動

週末の休暇を利用して、アナハイムにあるディズニーランド、ディズニーランドカリフォルニアアドベンチャーパークや LA 観光に行ってきました。海外のテーマパークに行くのは初めてで、シンデレラ城がなかったり本物の馬がいたり、アトラクションや食事、客層を含め日本との違いに驚くことばかりでした。特に驚いたのが、食事の大きさです。全ての食事が大きすぎて一人では食べきれなかったり、食べ歩き用にピクルスが一本売っていたりと日本との食文化の違いを感じました。LA 観光では、UCR のオプションツアーに参加してバスでハリウッド、サンタモニカ、ファーマーズマーケットに行きました。ハリウッドではアカデミー賞の授賞式に使われる会場やハリウッドスターのサインなどを見ることができてとても感動しました。サンタモニカは深い霧と重なり、景色が霧に包まれてほとんど見えなかったのが心残りでしたが、栈橋や 66 の標識など観光することができ、とても楽しい時間を過ごすことができました。レストランで外食したときのお会計で、チップを含めた額をテーブルの上に置いて退出する経験をしたのが新鮮でした。

観光以外にもショッピングモールで映画を観たり、ホストファミリーの方に夜景を観に

連れて行ってもらえたりと、とても充実した日々を過ごすことができました。アメリカの文化を学ぶことができ良かったと思います。

アメリカ・カリフォルニアでの生活



毎朝6時に起床し、ホストファミリーとランニングをしてから大学に行くのが日課でした。大学の授業は朝の9時から12時または15時までだったので、放課後はショッピングに行ったり、ホストファミリーの人と会話をして毎日を過ごしていました。大学で課される宿題は、ホストファミリーに質問する、という内容のものが多く、ホストファミリーと会話をするきっかけにとて

も役立ちました。

私が生活していたリバーサイドという地域は車社会で、どこに行くにしても自動車が必須でした。ホストファミリーの子供達の学校の送迎や私達の大学の送迎も、両親が仕事を抜けて車で送迎してくれました。日本のように鉄道も通っていない、家から学校の前まで送迎をするというのが普通で、そのことが私にとって印象に残りました。

最終週にアジアの食材を取り揃えているスーパーマーケットに買い出しに行き、その日の晩にホストファミリーの為にすき焼きを作りました。そのスーパーマーケットでは日本の食材を含め様々なアジアの食材を取り揃えていて驚きました。ホストファミリーがすき焼きをととても喜んでくれたので嬉しかったです。

まとめ

アメリカで過ごした三週間はホストファミリーの存在がとても大きかったです。ホストファミリーとの日常生活や会話を通して多くのアメリカの文化や日本との考え方の違いを学ぶことができました。政治的な話や宗教の話は自分の中で特に印象に残っています、そして今回、日本では学ぶことの少ない“生”の英語に触れることができたのがとても有意義でした。日常会話でよく使われる言い回しやスラングなど、表面的ながらも学ぶことができたので良かったと思います。風のように過ぎていった三週間でしたが、刺激的でとても充実した日々を送ることができました。

カリフォルニアでの生活

理学部 生物学科
3年 丸智香子



授業内容

授業では、生物や物理、数学、ネットワークについての基礎的な講義を受けました。授業は50分単位と日本に比べて短く、その分毎授業を集中して受けることができましたと思います。

先生方は趣向を凝らした授業をしてくださいました。生きたカタツムリを使ってスケッチや実験をしたり、英単語クイズをしたりと飽きずに楽しく英語を学ぶことができました。

教室内では日本語を使ってはいけないというルールも英語力の上昇につながったと思います。

様々な短い映像を見てその内容を英語で描写するという練習をしました。内容を理解できなくてもそれを英語に直すことが難しく、むずがゆさを感じました。しかし映像に関連する単語をピックアップしていき、それを基に英文を考えることで上手く表現することができました。ボキャブラリーの大切さを感じることができました。

理系の授業のほかに、アメリカでの挨拶の仕方、生活、キャリアや文化についても学ぶことができました。

教室内での授業のほかに、大学構内を回ったり図書館を見学したりと、アメリカの大学の規模の大きさを感じることができる機会がありました。UCRの生徒はとても気さくで話しかけると親切に答えてくれました。

授業の後半はプレゼンテーションの作成を行いました。全て英語でのプレゼンテーションは今までに経験がなかったので、貴重な機会となりました。

課外活動

週末はディズニーランドアドベンチャー、カリフォルニアディズニーとLAを観光しました。ディズニーランドは日本との違いを探しながら回りました。LA観光ではハリウッドとサンタモニカ、ファーマーズマーケットに行きました。

また放課後には、ホームステイ先の近くのショッピングモールで買い物や、映画を見たりしました。



これらの課外活動を通してアメリカの食事、交通事情、マナーといった生活に関する事情を体験することができました。



アメリカ・カリフォルニアでの生活

カリフォルニアでの生活は、日本との違いにはじめは驚きました。例えば、親は毎日子供の学校までの送り迎えをするということや昼食は大抵毎日サンドイッチであること、食べ物飲み物がどれも大きいこと、シャワーの時間が短いこと、家が大きいことなど挙げきれないほどの違いがありました。

ホストファミリーはとても親切で、私あまり上手く英語が話せなくても、私が伝えたいことを一生懸命理解しようとしてくれました。食事に関しても日本人に合うように工夫してくれました。アメリカやメキシコ、中国など様々な国の料理を紹介してもらいました。日本食を食べてもらおうとすき焼きを作りましたが、美味しいと言って食べてくれました。ホストファミリーとの会話を通して、アメリカの文化や日本に対する印象を聞くことができました。

ホームステイ先にはタイからの留学生がいて、タイの文化を教えてもらったり、日本の文化を教えたりと互いの国への理解を深めることができました。日本のアニメの話で盛り上がりました。

カリフォルニアの気候は、とても乾燥していて昼間は日差しが強く夜は寒くて、日本との気候との違いを感じました。外にはたくさん色あざやかなポピーやデイジーといった花が咲いていたり、リスやウサギがいたり、自然の豊かさを感じました。

研修参加者からのアドバイス（文系）

1. 出発前に気を付けたほうが良いこと

- 荷物はきちんと準備したほうが良い。洗濯ネットがなくて地味に困った。パスポートやクレジットカードのコピーはきちんと持っていくほうが良い。
- 厚手の服も薄手の服も両方必要です！洗濯ネットを持っていくべき
- 体調管理をしっかりする。ホームステイなら、出発前にメールで挨拶をしておく
と不安や緊張が少しとれるかもしれない。出発前ギリギリまでスケジュールを詰め込み過ぎず、何か必要なものがあつたらすぐ買いに行けるよう、疲れを溜めないようにしておく。
- 荷物の重量。だいたいみんなお土産をたくさん買うので、行きはスーツケースの半分程度に荷物を収めた方が良い。
- 寒暖差が激しいので半袖とコート両方あると良いと思います。
- ステイ先では、洗濯は週に一度になると思っていた方が良いでしょう。なので、洋服は1週間以上分は用意するようにした方が良いでしょう。それから、服の種類に関係なく乾燥機にもかけるので、傷んで欲しくないおしゃれ服は避けた方が良いでしょう。
- 荷物の量、向こうの気温を把握すること
- 気温の変動が大きいので、冬服から夏服まで少し幅広く用意したほうがよい。
大学生のファッション文化がだいぶ異なるので、なるべくシンプルな服を持って行ったほうが浮きにくい(トレーナーor Tシャツにジーンズなど)
日差しが強いのでサングラス必須”
- 一ヶ月も海外で過ごすので日本から持ってくるものに気を付けたほうが良いと思います。
ホームステイ先では、日本で暮らしているように毎日洗濯することができません。1週間に1回程度です。そのため、洋服や下着を1週間分は用意したほうが良いでしょう。また、シャンプーやボディーソープなども一ヶ月間あるので十分に持っていくことをお勧めします。
- 忘れ物がないかの最終確認。渡航先の基本情報を知っておくこと。たびレジなどの安全確認や、渡航支援の機関への登録。私は、爪切りを持って行ってなくて、苦労した。

2. 研修先の授業

- お茶大生だけでした。ネイティヴは先生だけでしたが、確実に理解できるようにしたかったです。段々聞き取れるようになっていきました。
- 日本人だけです。外人とはほとんど関わられません

- 授業後などに積極的に先生に質問してみると、色々な話が聞けて面白い。授業中に出てくるような(専門用語ではない)単語は、きっと日常的に使われやすい単語のはずなので、分からないものがあつたらその都度調べ、授業を通して用法を学ぶ。
- ネイティブの先生が担当だった。しゃべる速度はゆっくりではないが、同じことを何度も繰り返してくださるため次第に理解できるようになった。授業内容はディスカッションや講義、発表など。そこまで難しくはない。
- 一緒に授業を受けるのは午前も午後もお茶大生のみでした。
- 発言は積極的にしていきましょう。わからないことがあれば、わからないという意味表示をしっかりとすれば、先生はちゃんと説明して下さいます。
- 日本の大学の講義形式で日本人だけで受けた。内容はアメリカの文化やアメリカ発祥文化についてやリーダーシップについてなどワークショップ形式のものもあった。また、ダンスや外で体を動かすアクティビティもあった。
- アメリカについて(食文化、若者文化、政治、宗教、人種、地理、音楽など)の講義がメインだった。リーダーシップのワークショップがあつた。現地学生と会話する conversation activity があつた。実際に現地で暮らして興味を持ったことに対して2人1組で最終プレゼンテーションをした。体を動かす授業もあった(染色体験、ダンス体験、スポーツ、ボルダリングなど)
- 先生1人が宗教、スポーツ、人種などのアメリカの文化を教えてくれるというものでした。午後にはアスレチックやボウリングやダンスなど体を動かすものも多かったです。
- 最初は、基本的な文法や語法の学習を、ワークショップを交えながら行った。後半は、アメリカの文化(例えば、食事、スポーツ、政治など)について詳しく学んだ。また、リーダーシップワークショップや、カンバセーションアクティビティなどの授業もあり、バラエティに富んだ授業内容だった。

3. ホームステイ

- ファミリーと積極的に話すべきです。日本のお土産を持っていくと喜ばれました。
- 水の制限が厳しめ。汚くはないが綺麗ではない
- 部屋にこもらずホストファミリーに積極的に話しかけるべき。洗濯を日本のように毎日するとは限らないので、早めに洗濯頻度を確認しておくといよい。会話が難しくても、おいしいや楽しい、面白いなどその時の感情やちょっとした疑問などを言うくらいからチャレンジ! 会話を増やして打ち解けるほど、楽しさが増す気がした。
- ホームステイ。とても快適に過ごせた。三食全て作っていただき、昼もお弁当を持たせてくださった。寝る時間がとても早かった。規則正しい生活を送ることが

できた。

- ホストファミリーによりけりだと思いますが、私の場合はこれまでに何人も日本人や中国人、韓国人の留学生を受け入れているファミリーだったため、非常に理解があり快適でした。
- アメリカ人はプライバシーをととても尊重するので、自分の部屋にいると部屋に入ってこないどころか、ほとんど声もかけてきません。ファミリーとたくさんお話するためにも、極力リビングやダイニングルーム、キッチンに顔を出すようにした方が良いと思います。
- 1人1部屋でプライベートを大事にしてくれた。例えば、ご飯の時間に寝ていても起こさないでいてくれる。必ずノックをして、返すまで入ってこない。
- ホームステイだったがプライベートを守る意識が強く自由時間が多かった。キリスト教徒の家庭だったので異文化体験が出来た。学術英語では習うことのない生活に必要な英語表現を学ぶことができた。
- ホームステイ先は、何度か留学生を受け入れている家族でした。そのため簡単な英語を使ってくれていたと思います。アメリカはプライバシーを尊重する文化なので部屋にいると干渉してきません。より多く話したい場合はリビングに行くようにしてください。
- 私はホームステイをした。最初はとても緊張してあまり喋ることが出来なかったが、ホストファミリーは留学生を受け入れるのにも慣れていて、行った初日から積極的に私たちに話しかけてくれたため、すぐに打ち解けることが出来た。ホストファミリーとお互いの文化について話すことで、自分の文化の特色に改めて気づくことが出来たり、新たな発見があったりして楽しかった。私たちの宿題も手伝ってくれ、一緒に遊んでくれ、とても充実した生活を送ることが出来た。

4. 食事について

- 自分は食べられないものはありませんでした。日本の家族に太ったと言われたので食べ過ぎないように注意が必要です。
- 量が多い。塩っ辛い。甘いものはとことん甘い。
- ホームステイの場合食事に関しては、無理せず量が多い/どうしても苦手なものがある場合ははっきり言うべき。私は食生活に変化が起こるとすぐにお腹を壊してしまう体質なので、食事がおいしい/まずい/不衛生などに関わらず、下痢止めや整腸剤など薬を用意していた。
- ホームステイ先での料理は、そこまで。食べられないことはないけれど、おいしいというわけでもない。ちゃんとしたレストランは少なく、ほとんどがファストフード店やファミレスだった。量が多い。甘いものはほとんど全て美味しかった。
- 基本的にはホストファミリーが用意してくれますが、教室の周りに飲食店もたく

さんあります。

- 基本的に量は多いですが、もうお腹いっぱい食べきれない時や苦手な食べ物がある場合は、それをちゃんと伝えるようにしましょう。何も言わないと、当たり前ですがファミリーはわかってくれません。オプションツアーの時など自分でお昼ご飯を買う時は、前日のうちに「明日はお昼ご飯は持っていかない」ということを伝えておきましょう。特にお昼ご飯を用意してくれるファミリーだった場合は、当日の朝起きたら既に昼食を用意してくれていた、ということも起こり得ます。
- 量が多かったり、好き嫌いはハッキリと伝えるべき。伝えても嫌な顔はほとんどされないで、1ヶ月快適に過ごすためにも伝えた方が良いでしょう。
- 好き嫌いなどはきちんと伝えれば嫌な顔せずに変えてくれた。昼食は用意してくれたが毎日サンドイッチとフルーツだったので少し飽きてしまった。カリフォルニアはメキシコからの移民も多く、メキシカン料理が流通していた。家で野菜があまり出てこなかったのが外出時に意識的に摂るようにしていた。
- 渡航前は毎日ハンバーガーを食べるのかなと思っていましたが、ホストマザーがメキシコ人ということもあってタコスなどのメキシコ料理や日本食を食べることができ、食には困ることはありませんでした。しかし、量が多いので食べきれないときはしっかりと自分の気持ちを伝えることが大切だと思います。
- アメリカの食事は、とても美味しかった。ホストファミリーが出してくれるご飯も、バラエティに富んでいて、どれも美味しかった。私たちのことを考慮して毎日白米を食卓に並べてくれた。ハンバーガーやピザは、生地がしっかりしていて、食べ応えがあった。しかし、量が多いことには驚いた。ホストファミリーが用意してくれる弁当をはじめ見た時は、その量にとっても驚いた。毎日、食べきるのに必死だった。

5. 現地学生・地域住民との交流

- こちらも積極的に関わるのが大切です。
- 現地学生とはほとんどなかったが課外活動でインストラクターとしてついてくれた。ホストマザーの友達が家によく来ていた。
- カリフォルニア大学リバーサイド校はプログラム上は現地学生と交流できる機会がほとんどなかった。現地学生と交流したい場合は、現地大学の留学生センターのような場所について自分が参加できるクラブ活動がないか積極的に問い合わせる必要がある。
- 私たちが使用した場所は留学生用の施設だったので、そこにいたのはアジア人がほとんどだった。彼らと交流することはなかった。ただ、日本が好きなアメリカ人などが気さくに話しかけてくださった。

- 現地の学生との交流はそれほどありませんでした。
- 今回のプログラムは、それ自体には現地の生徒とたくさん関わる機会は多くはなかったです。なので、ディスカッションやその他アクティビティで知り合った人とは SNS のアカウントや連絡先を交換してメッセージを交換するなどして、自分から積極的に交流していった方が良いと思います。
- 学校ではあまり交流する機会がなかった。自分から進んで交流を持ちにいかなければいけない。
- 現地大学の部活動に参加したのでそこで多くの友達が出来た。プログラムだけだと現地学生との関わりが少ないので何かしらの活動に参加してみることをおすすめする。基本的に親切な人が多いので、困ったら話しかけてみるべき。
- 授業はお茶大生だけだったため現地の学生と関わることはほとんどありませんでした。そのため、帰る数日前に現地の学生と関わる機会を自ら作りました。自分から行かなければならない大切さを感じました。
- 私たちの授業は、先生以外全員日本人だったため、あまり現地の学生と交流することは出来なかった。しかし、午後からのアクティビティでは、現地学生と一緒にスポーツをしたり、会話をしたりした。また、日本文化について学んでいる桜部というサークルに一回だけ参加させてもらった。そこには日本語が喋れるアメリカ人や、日本が大好きなアメリカ人が多くいて、その人たちと交流するのはとても楽しかった。

6. 経済面

- 現金を持ち歩きすぎないようにしました。オプションツアーは現金でもクレジットカードでも大丈夫でした。
- カードは持って行かず、現金だけだったが問題なく過ごせた。
- クレジットカードを使う場合は、現金はさほど持っていかなくてもよかった。現金は何個かに分けて、一つ盗まれても損失が少なく済むように対策をした。使ったお金をその都度メモしていれば使いすぎに多少歯止めがかかるかなと思う。
- 現金で払うことはほとんどない。カード文化のため現地の人の荷物が少なすぎる。
- 特に困ることはありませんでした。
- 食費は基本的にファミリーが出してくれることになるので、ホームステイ費の他に食費としてお金を用意する必要はあまりありません。オプションツアーでお土産をたくさん買いたい、という場合は余裕を持って持っていった方がいいかもしれません。ただ、クレジットカードも使えるので、海外でも使えるクレジットカードを持っておいて、大金はあまり持ち歩かないように

する、というのも賢明だと思います。

- カードを持っていくと便利。最低でも 2 枚もっておいたほうがいい。場所によっては使えないカード会社があるし、盗難にあった時にスペアがあれば困らない。
- ホームステイ費用に食費が含まれるのでその他の出費はそれほど多くない。週末に Additional trips があるので、参加したい場合追加料金を払う必要がある。JCB のクレジットカードは使えない場所もあったので visa で用意したほうがよい。基本的に支払いはクレジットカードだったが、コインの計算をしなくて良いので楽だった。
- 海外は現金を大量に持つていくことは危険なためクレジットカードが必要です。しかし、アメリカでは JCB カードが使えないところが多かったので注意してください。カードをたくさん使っていると、自分がどれだけ使っているかわからなくなってしまうので管理することをお勧めします。
- 1 ヶ月アメリカで生活するとなると、相当たくさんのお金を必要とするが、全てを現金で持つていくのは少し怖かったため、私は現金とカードを 3 枚持つて行った。現金もカードも一箇所にかためるのではなく、3 箇所ぐらいに分散して、1 つなくなったとしても大丈夫なようにしておいた。実際にいってみてそこまで危なくはないと思ったが、注意してしすぎることはないので、お金の管理はとても大事である。

7. その他

- 英語力に自信がなくてもチャレンジすることが大事だと思わせられました。
- ホームステイ先へのお土産は、日本のお菓子や(私のホストファミリーは日本文化に関心があったので)アニメやキャラクターのグッズがウケがよかった。日本の調味料やインスタント系の何かしらも面白がってくれるようです。貴重品は肩から紐で下げられてお腹の前に抱えられるような小さめのバックに入れて、常に肌身離さないようにしていられると安心する。
- 朝夜の気温差が大きい。1 週目は肌寒かったが、2、3 週目は 30 度を超えるくらいだった。ただ、乾燥しているのであまり汗はかかない。
- 1 ヶ月は本当にあつという間なので、一緒に行くお茶大生と行動を共にするだけではなく、友達作りなど自分からどんどん積極的に動いていくようにしましょう。家族や友達と仲良くなれば、1 ヶ月がより充実したものになるはずです。
- 主体的に過ごせば 1 か月でも多くのことが経験できる。英語は伝えようとする姿勢があれば相手も分かってくれる。
- 一番大切なのは体調管理だと思います。私は時差ぼけが解消されるまで 1 週間ほどかかりました。ほどよくカフェインをとったり昼寝をしたりして睡眠リズムを

作ることが重要です。

- とても楽しいオプションツアーが組まれていて、毎週末ディズニーやロサンゼルスなどに遊びに行くことが出来た。英語の勉強をしながら、カリフォルニアの観光もできるとても素晴らしい留学だった。

研修参加者からのアドバイス (理系)

1. 出発前に気を付けたほうがいいこと

- 乾燥機にかけて縮む服は持って行かない方が良いと思います。アメリカの人は洗濯物は干さないみたいです。
- パソコンは最初持って行くつもりではなかったのですが、実際プレゼンの準備にかなり必要でした。パスポートのコピーを準備したり、万が一携帯やクレジットカードをなくしたときの対処法を確認しておいたりしたほうが安心です。
- パソコンはほぼ必須だったので、言われてなくても持っていった方がよい。私は服を全部ワンピースで済ませたが、荷物がかさばらないのでオススメ。フライトが長いので、前日の睡眠時間は多少工夫した方が時差に適応しやすい。
- ほとんどの確率でホームステイ先に Wi-Fi がありますが、不安なら事前にステイ先に確認の連絡をとるといいと思います。
服などは向こうで買えるので、コンタクトや眼鏡、マスク、薬など向こうで買えないものを忘れないように気を付けた方がいいです。わたしは予想以上に日本食が食べたくなったので、何かインスタントの日本食を持って行っても良いと思います。
- お金に関することを親に相談すること

2. 研修先の授業

- パソコンが必要だと感じました。
- お茶大生のみで行われる授業のため、他大学との交流はあまりありません。
先生は、日本人にわかりやすい英語を話してくれます。そのため難しいトピックでもついていきやすかったです。
主体的に発言することが大切です。最初は私も発言するのが恥ずかしかったですが、次第に慣れていきました。
- 全部英語。先生や授業の様子にもよるが、基本的にわからなくても尋ねればすぐ答えてくれるのでそこまで気負わなくても、大丈夫。
- 内容がどんなにわかりやすくても、英語しか使えないということが、やはり難しく慣れませんでした。嫌でも英語をたくさん聴いて理解しなくてはならない状況だったので、良いトレーニングになりました。
- 理系の授業を英語で受けることができた。先生が丁寧に話して下さったので、理解しやすかった。難しくなく面白い内容で、楽しく授業を受けることができた。

3. ホームステイ

- お土産は柿ピーが喜ばれました。

- 自分の意見をしっかり伝えることが大切です。また、時間が空いているときは、部屋にこもっているのではなく積極的に会話しましょう。
- 私はホームステイだった。最初はとても緊張していたが、一週間も経てば優しいホームステイファミリーに大きくて綺麗な家、下手したら実家よりも快適な生活だった。
- ホストマザーに、同じステイ先の友人と、伝えたいことを英語で伝えるのが大変でした。まず発音がなかなか伝わらず、苦戦しましたが、徐々にスムーズに伝わるようになり、良い経験になりました。ステイ先は清潔でとても過ごしやすかったです。
- ホストファミリーがとても親切にしてくれた。外食はなく、手料理がいつもおいしかった。ホストファミリーの娘さん、お孫さんと交流できた。

4. 食事について

- 栄養が偏っている気がしたのでビタミン剤を持って行くと良いと思います。
- 日本に比べ非常に量が多く、また脂っこいです。自分の体調のことも考えて残したり、薬をのんだりしたほうが良いと思います。
- 案外ヘルシーで、美味しかった。アボカドのサラダとラザニアが特に印象に残っている。よくアメリカの食事は太ると聞かすが、むしろ減った。用心していたからかもしれない。もしも気になるようだったら事前に言うておくともよいかも。
- アメリカの食事は美味しかったのですが、わたしは予想以上に日本食が食べたくなりました。何かインスタントの日本食を持って行ってもいいと思います。アメリカはやはり、バーガーが美味しいです。
- ホストファミリーが作ってくれることが多かった。毎日違う料理な上に凝って作ってくださりとってもおいしかった。

5. 現地学生・地域住民との交流

- 現地の映画、音楽、俳優など知っておくと共通の話題が出来て仲良くなれると思います。
- 機会があるときはいつでも積極的に会話したり、連絡すると良いです。
- あの辺りは留学生が多いこともあってか、多少まごついてもうまく対応してくれるお店が多かった印象。学生さんも親切な方が多かった。スーパーに行くとほぼ必ずホームステイファミリーの知り合いと遭遇した。
- ホストマザーの友人やその家族と話す機会があり、楽しかったです。一緒に教会にも行き、交流が広がりました。
- Conversation class で現地の学生と交流できたり、一緒にショッピングに行った。ホストファミリーの親戚の方とたくさん交流できた。

6. 経済面

- クレジットカードが使えないところはほぼ無いので、キャッシュではなく、カードを持っていくべきだと感じました。
- 防犯のため、ウエストポーチや小さな肩かけカバンに財布など入れて管理することをオススメします。おつりがかなり適当です。
ロサンゼルスではクレジットカードのスキャンが多いらしいので現金ばかり使っていました。
- 実はあまり使っていない。
手持ちで一万、カードに10万近く持っていたが、カードは1万と少しくらいしか使わなかった。場面によってはカードが使えないのでどちらも持っていった方がよいと思われる。
- 物価は日本とそんなに変わらないと思います。実際に使うお金としては、週末に遊びに行くのと、お昼ご飯代(持っていない日)ぐらいがあれば大丈夫です。
- 奨学金が出たのでよかった。ホストファミリー代については払った金額以上のお世話をしていただけました。

7. その他

- 言葉が通じなくても伝えようとする気持ちがあれば大丈夫だと思いました。
- 日本の暮らしがとても便利で恵まれているということがわかりました。
- みなさんが有意義な時間を過ごせることをお祈り申し上げます。
- 英語の勉強もたくさんできましたが、それと同じぐらいカリフォルニアの暮らしや文化を知ることができてとても良い経験になりました。
- 短期留学はとても良い経験になりました。



McGill

期間：2月26日～3月26日

滞在：ホームステイ

参加費：約450,000円【航空券＋授業料＋ホームステイ代など】

奨学金8万円支給

研修内容

1. 週25時間のフランス語コース
2. カナダ文化を学ぶアクティビティ
3. 週末エクスカーション

フランス語関連科目2単位認定

モントリオール・フランス語研修

文教育学部 言語文化学科

1年 石山未来

1. 授業内容

文法の授業では、実用的な例文を用いながら基本的な文法と単語について学習し、たまにプレゼンテーションや作文をすることがありました。留学なので当たり前ですが、習った文章をすぐに日常で使えるのでそれが復習となりしっかりと定着します。簡単な作文や単語の復習など宿題は少なくありませんでしたが、ホストファミリーと一緒に過ごす時間も十分確保できるくらいの分量で丁度良かったように思います。

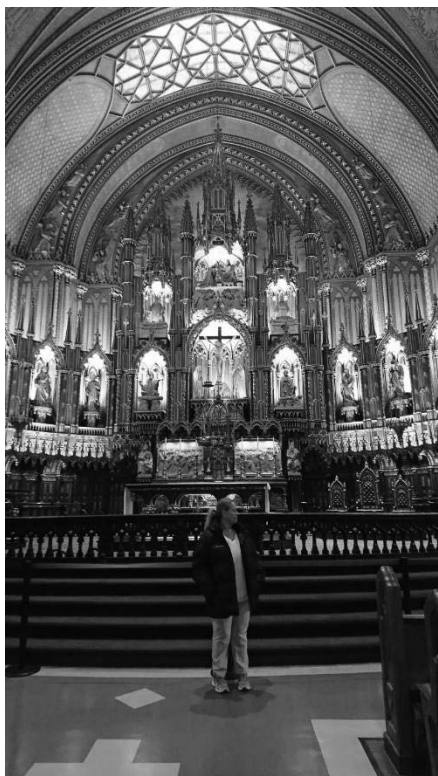
発音の授業では、コンピュータを使いながら先生に丁寧に発音を指導していただきました。また、先生が様々なインターネット上のサイトを紹介してくださったので、帰国してからも学習に役立てることができます。フランス語は発音が難しく、口の形やのどの使い方が大切になってくるので、実際に先生が発音するのを見て練習するのはとても効果的だったと思います。

どちらの授業も全てフランス語で行われるので、聞き取り、理解するのはやはり難しかったです。しかし先生もできるだけ簡単な単語を使いながら、ゆっくり話してくれるので全く解らないと言うことはありませんでした。



2. 課外活動

・モニターとの活動



日本では見ることのできないものを沢山見ることができました。特に大聖堂を見に行ったときは、文化の中心である宗教という部分に触れることができ、その荘厳な空気に圧倒されました。他にも伝統料理を食べたり、モニターと宿題をしたりと楽しみながらフランス語を話す機会が得られました。

・小学校訪問

最後の週に、マギルの小学校に行き、フランス語でプレゼンテーションを行いました。私たちの班は「ラジオ体操」について話し、一緒に体操をしました。学校でモニターの皆さんに原稿を確認してもらい、家でもホストファミリーに何度も見てもらえたので、なんとか内容が伝わるような文章にすることができました。

本番では、子供達が興味を持って真剣に聞いてくれたのでプレゼンしていてとても楽しかったです。また、質問もたくさんしてもらえて、戸惑いつつもフランス語で、難しいときには英語で返答することができまし

た。

3. 生活全般

私のホームステイ先は、学校まで地下鉄で25分ほどの比較的近いお宅でした。仲の良いご夫婦で、非常に親切にしてくださいました。毎日の夜ご飯もとてもおいしかったです。ただ、私自身初海外、初ホームステイだったので最初はどちらが良いか解らずとても戸惑い、会話もスムーズにできないのでずっと緊張していました。しかし、ホストファミリーもゆっくりわかりやすく話してくださるので、毎日の会話を楽しむことができました。また、バイリンガルの方だったので、どうしてもフランス語が理解できないときは英語で説明してもらえました。反対に、何かを伝える時は、フランス語で言えないことを英語で伝え、その都度「今のはフランス語でこう言えるよ。」と教えていただけで勉強になりました。私は英語もフランス語もそれほど流暢に話せなかったのですが、その両方を向上させることができたのではないかと思います。

買い物をするときも、親切な店員さんが多かったのもそれほど不都合はありませんでした。また、向こうに日本の食材が売っているお店もあったので、ホストファミリーに日本食を作って振る舞うこともできました。

McGill 大学フランス語研修報告書

文教育学部 言語文化学科

1年 今井梨夏子

はじめに…

せっかく2か月もある大学の長期休暇を有意義に過ごしたいと思い、以前から留学しようと考えていたのですが、どこの国で何を学ぼうかを考えた時に一番に目に留まったのがこの McGill 大学でのフランス語研修でした。私は一年次に第二外国語としてフランス語を選択していたのですが、文法の授業しか取っていなかったため、一年間学んだ後もフランス語を使えるようにはなっていなかったことが個人的にすごく心に引っかかっていた。せっかく学んだのだから、使えるようになりたいと思い、私は今回このプログラムに参加させていただきました。

授業内容

授業は午前中のみで、二時間の基本的な文法の授業と、一時間の発音の授業から構成されていました。どちらも現地の先生一人に対して13人の生徒という少人数クラスで、とてもアットホームな雰囲気です。毎日の授業がとても楽しかったです。授業は基本的にフランス語で行われ、時々理解が難しい時には英語を混ぜて説明してくださいました。しかしほとんどがフランス語だったので、会話を全く学ばずに参加した私は初め、先生が何を言っているのか全く分からず、先生に何かを質問されてもその質問内容どころか、そもそも私に何かを質問したのかどうかも分からず、とても苦勞しました。初めのうちは、辛く感じたこともありましたが、今回一緒にプログラムに参加した仲間たちが優しく教えてくれたり、本当にたくさんの場面で助けてくれて、彼らの支えによってなんとか次第にフランス語に対する壁も無くなっていきました。また、先生にもきちんと「わからない、理解できてない」という意思表示をすれば、よりわかりやすく説明し直してくれて、意思表示の大切さを大いに感じました。

課外活動

午後には“モニターさん”と呼ばれる McGill 大学の学生さんらと様々なアクティビティがほぼ毎日ありました。ノートルダム大聖堂や聖ジョセフ礼拝堂を訪れたり、スケートをしたりメープル小屋に行ったり、時には宿題やプレゼン準備を手伝ってもらったりと本当に盛りだくさんでした。普段の昼食はホストマザーが用意してくれましたが、金曜日の昼食だけは大学側が Montréal の名物



料理を用意してくれて、ベーグルやスモークミート、プーティンにメープル小屋での伝統

料理も食べることができました。週末には Ottawa と Ville de Québec へのツアーもあり、たった一ヶ月間で Montréal とその周りの街まで目一杯堪能でき、本当に充実した日々でした。そしてこれらのアクティビティには毎回モニターさんが複数人付き添ってくれたので、アクティビティを楽しみながらもフランス語を話す練習になりました。

Montréal での生活

今回私たちはホームステイをしたのですが、私のお家はカメルーン人のお母さんでした。ホストマザーはバイリンガルで、初めのうちは私がフランス語を全く理解できなかったこともあり、英語で主にコミュニケーションを取ってもらいました。そして次第にフランス語で会話をするようにしてくれました。本当に優しくて温かな家庭で、毎日ストレスを感じることなく過ごせたのもホストマザーのおかげだと思っています。料理は基本的にカメルーン料理で、未知の食べ物ともたくさん出会いました。料理は美味しかったですし、カメルーンについても色々を知ることができ、滅多にできない経験を予想外の Montréal であることができ個人的にラッキーだったと感じています。最後にはホストマザーにカメルーンの前料理の作り方も一つ教えてもらったので、また日本でも作ってみようと思います。



最後に…

今回振り返ってみると、フランス語を全く話せないくせによくいきなりフランス語圏に行ってフランス語を学ぼうと思ったなど自分でも思いますが、どうやらその思い切りの良さはプラスに働いたようです。まだまだペラペラと話すことまではできませんが、Montréal に来た当初に比べると多少はフランス語を理解できるようになりましたし、実際行きの飛行機ではフランス語で何を言っているかわからなかったものも、帰りの飛行機では少し理解できるようになり感動しました。

この一ヶ月は本当に 1 日 1 日が濃く、あっという間で、今までにないくらい充実していました。言語の壁の大変さを肌で感じたのも今後の私の専攻において良い経験となりました。しかしフランス語をマスターするにはあまりに短く、もっと長く Montréal に居たかったのも正直なところですが。今回学んだことを最大限有効にするためにも、これからもフランス語の勉強は続け、またいつか Montréal に戻って来たいと思います。

最後になりますが、今回のプログラムでは本当に多くの方々に支えてもらったからこそ私は乗り切ることができたのだと思っています。今回の McGill 大学でのフランス語研修において私に関わってくれた全ての人に感謝の気持ちを伝えたいです。

マギル短期語学研修を終えて

文教育学部 言語文化学科

1 学年 安河内美緒

授業内容

朝の 9 時から 11 時まではフランス語の基礎的な文法の勉強や会話の練習をしました。基本的な単語から始まり、冠詞や代名詞などの文法や簡単な身の回りの表現などを学習しました。主にフランス語で授業を進め、英語は補助程度の使用でした。少人数での授業だったため、授業に主体的に参加しやすく、気軽に先生に質問ができる環境でした。授業中に学んだばかりの内容を実際に使う時間もあり、身に付きやすいカリキュラムでした。



11 時 15 分から 12 時 15 分までは発音の授業でした。フランス語の細かい母音の発音を中心に行われました。先生のお手本の後に続いて発音をしたり、PC の音を聞いた後にリピートしたりして発音の精度を上げました。また、第 3 週と第 4 週の月曜日には現地の日本語を学んでいる学生とフランス語と日本語を交互に使い交流しました。

第 4 週には地元の小学校で小学生に向けてプレゼンテーションを行いました。各チーム 3、4 人で日本に関する様々なテーマを担当しました。私のチームでは運動会について動画や写真を用いて発表を行いました。

課外活動

午前中の授業の後、マギル大学の学生モニターの方々とモンリオールの代表的な観光地の訪問や、モンリオールならではのアクティビティを楽しみました。

毎週、モンリオールを代表する歴史的建造物や美術館、博物館を訪れました。セントジョセフとノートルダムというモンリオールの有名な教会では、非常に美しく壮大で、日本では見られないものを見ることができました。また、モンリオール美術館では中世の絵画や、ピカソの絵画を見る子田ができました。現代のものからカナダの先住民のものまで様々なアート作品を見ることができます。

また、教室での活動もあり、カナダの歴史や文化に関するクイズをしたり、セントパトリックデーの話を聞いたりしました。その後、実際にセントパトリックデーのパレードを見に行くことができました。

ほかにもアイススケートやレーザークエストといった体を動かすアクティビティも組み込まれていて、充実した課外活動でした。

毎週金曜日のお昼には、プティンやスモークミート、ベーグルなどモンリオールならではの伝統料理をいただくこともできました。この 1 か月間でカナダ・モンリオールの文

化や歴史を肌で感じる事ができたと思います。

モントリオールでの生活

外は基本的に寒いので、あまり屋外では行動をしませんでした。朝起きると雪が腰あたりまで積もっていることもあり、学校に行くのにも苦勞する日もありました。モントリオールでは気候に合わせて地下街が発達していて、そこで買い物を楽しむことが多かったです。放課後に友人とモントリオールの観光やカフェ巡りをしました。滞在 3 週目からはサマータイムが適用され、日が長くなったので、少し遅くまで出かけることが多かったです。週末にはファミリーと家で一緒にケーキを焼いたり、ファミリーの仕事先のダンス教室に行ってみ学をしたりしました。寒い環境の中でも充実した生活が遅れました。



マギル大学での研修を終えて

文教育学部 言語文化学科

1 学年 渡部真由

授業内容

マギル大学では午前中に教室での授業が3時間、午後は学生ボランティアのモニターさん達とのアクティビティが3時間ありました。授業は2つに分かれていて、役に立つ表現や基本的な単語を学ぶ最初の授業がメインで、その後に発音について学ぶ授業を受けました。メインの授業の内容自体は難しくないのですが、定期的にテストや宿題、プレゼンテーションがありフランス語初心者の私には中々にハードに感じました。しかしただら過ごす時間が作れなかったのは1か月という短い期間から考えるとかえって良かったと思います。プレゼンテーションは全部で3回あり、最初は1人でクラスメートの前で4分、次は小学生の前でグループで30分、最後に2人でクラスメートの前で10分行いました。原稿を書くときはモニターさん達やホストマザーが文章をチェックしてくれたので、安心して発表することが出来ました。2回目のプレゼンテーションはモンリオールにある、英語を主に使いフランス語はあまり話せない子供たちが通う小学校に行つて行ったのですが、聞いていたよりも子供たちのフランス語が流暢で質問の意味がすぐに理解できずに苦労しました。しかし先生も子供たちも私達を非常に歓迎してくれて、拙いフランス語も一生懸命聞いてくださり、とても良い思い出になりました。

発音の授業では、口の形から詳しく発音について学ぶことが出来ました。これは非常に楽しい授業でした。ひたすら声に出して練習するのですが、先生が嘘でしょ、と言うくらい褒めて下さるのでモチベーションアップにも繋がりました。この授業では途中で2回日本語を学ぶマギル大学の学生との交流の時間があり、時間を分けてフランス語で話したり日本語で話したりしました。私と学習歴があまり変わらない方もいたのに、皆さんとても日本語が上手で驚きました。私たちは何を話したら良いか分からず黙ってしまいそうになることが多かったのですが、マギル大学の学生さん達はそれが無く、色々な質問をしてくれました。この積極性は見習わなくてはいけないなと思いました。学生同士でも日本語で会話をしている、意識の高さに本当に刺激を受けました。

アクティビティではモニターさん達が色々なところに連れてってくれました。地下街、教会、スケートなどどこも良い思い出です。最初は説明も何と言っているのかまるで聞き取れませんでした。ゆっくりわかりやすく話してくれたので徐々に分かるようになりました。

カナダモンリオールでの生活

モンリオールでの生活で驚いたのは時計が中々見つからないことです。結局最後までホームにある電光掲示板と教会の時計塔以外学校も含め街中で時計を発見することは出来ませんでした。こんなに時間を気にしているのは日本だけなのかと不思議に思いました。地下鉄に乗るために並んでいたときも、途中で前の方に並んでいる人達が動かなくなって、

どうしたのだろうときょろきょろしてしまったのですが、ドアが閉まる時になってやっと、混んでいるから次の地下鉄が来るまで待つことにしたのだと分かりました。私にとっては空いているくらいだったので本当に驚きました。だからといってモントリオールの人達が時間にルーズだと感じたことは無かったのですが、やはり日本とは時間に対する感覚が違うなという印象を受けました。

家にいる間はほとんどずっとホストマザーと一緒にいました。本当に親切な方で、私がかたがた理解出来なくても根気強くフランス語で話しかけてくれました。わからない言葉があると小さい紙に全部書いてくれて、1か月でメモがたくさんたまりました。こうことは日本では出来ないのも、ホストマザーと過ごした時間が1番私には為になる時間だったと思います。

今回の研修で得たもの

リスニング力が向上したのも大きいですが、やはりモチベーションがアップしたことが1番の収穫だと思います。街中で道を聞いても何と言っているか分からず結局英語にしてもらったり、親切にしてくれた人に上手く感謝の気持ちが伝えられなかったり、悔しい思いを沢山しました。だからこそ、何としてもフランス語を上達させてまた行くぞという気持ちになりました。研修の効果は帰ってきた後にこそあるように思います。全く話せない状態で1か月カナダに行っても意味があるのかと行く前は不安でしたが、今は行って良かったと心から思います。



マギル大学フランス語研修報告書

文教育学部 人文科学科

2年 赤坂真琴

授業内容

9時から11時まで文法と会話の授業、11時15分から12時15分まで発音の授業を受けました。文法と会話の授業では主要な動詞の活用、疑問視、形容詞、数詞や日常会話での言い回しなどを学びました。授業内でリスニングや文法の小テストが行われることも何度かあり、またフランス語でプレゼンテーションをすることもありました。発音の授業ではパソコンを使い様々な教材を用いて単語の発音について学びました。発音を何度も繰り返し練習し先生に直接指導してもらえる機会になりとてもためになりました。午後は13時30分から16時までマギル大学の学生モニターさんと様々な活動を行いました。学生モニターさんに大学構内やモンリオールの街中を案内してもらったり、プレゼンテーションの原稿や課題の添削指導をしてもらいました。モンリオールの地下街やBIODOME、聖ジョセフ大聖堂、ノートルダム大聖堂、モンリオール美術館などを見学しました。またカナダの文化について学ぶクイズなどの企画もあり、楽しみながらカナダについて学ぶことができました。



課外活動

3月4日にはカナダの首都オタワへ、3月18日にはケベック州の州都ケベックシティへ行きました。オタワでは国会議事堂と歴史博物館を見学しました。国会議事堂は非常に美しい建物で、内部にある議事堂や図書館などを見学しました。歴史博物館ではカナダの先住民ファーストネーションズの歴史と文化について展示がされていました。トーテムポールや祭りの道具、衣服、建物などの資料が展示されていました。ケベックシティではHotel de glace と Chateau Frontenac へ行きました。Hotel de glace は氷と雪でできたホテルで、内部は非常に精巧に作られた氷の像やシャンデリアで装飾されており、実際に宿泊できる客室やバー、チャペルなどがありました。日本ではなかなか見ることができない冬の寒さが厳しいカナダならではの美しい建物で感動しました。Chateau Frontnac の付近はフランスの文化が強く残っている古い町並みの中を歩くことができました。高いビルが立ち並ぶ現代的なモンリオールの中心街とはちがひ、古い建物の小さなお店がたくさん並んでいる通りになっていました。馬車も走っていて街全体にフランス風の趣があり、モンリオールの市街とはまた違う魅力がありました。3月19日には聖パトリックのお祭りに参加しました。聖パトリックのお祭りはアイルランドの祝祭日で、モンリオールの市街で大勢の人が参加する大規模なパレードが行われていました。パレードに参加する人々は緑色のものを身につけ、アイルランドの音楽を演奏したりダンスを踊ったりしていました。

3月21日には小学校を訪問し小学生にフランス語でプレゼンテーションをしました。私は体育の授業に参加しラジオ体操について説明しました。カナダには無いものについて一

から説明するのは難しかったですが、子供たちが積極的に授業に参加したくさん質問をしてくれたため上手く説明することができました。カナダの小学生は日本の小学生よりも積極的な子供が多い印象を受けました。またプレゼンテーションをするまではラジオ体操が日本独特のものだということにも気づかなかったため、日本の文化について見直す機会にもなりました。また小学校や図書館の中も見学することができました。カナダの小学校は全体的にカラフルで明るい雰囲気日本で小学校との違いに驚きました。

またわたしはマギル大学で日本語を勉強している学生さんたちとの交流会にも参加しました。彼らの日本語のレベルは非常に高く日本語を学ぶことに対してとても意欲的で、彼らとお話する機会を持てたことは自分にとってもいい刺激になりました。

カナダでの生活全般について

私は留学中はホームステイをしていました。ホストファミリーのみなさんは非常に親切でモントリオールの文化について教えてくれたり、フランス語の課題の添削やプレゼンテーションの準備を手伝ってくれたりしました。カナダでは家も道路もスーパーマーケットも日本よりもかなり大きく驚きました。特にスーパーマーケットは日本とは売ってあるものが大きく異なっていて新鮮でした。ステイ先の家は大学からは遠かったためバスと地下鉄を利用して通学していましたが、カナダの交通網は非常に雪に強く大雪の日でも問題なく動いていて驚きました。地下鉄や地下街が発達していて暖かく快適に移動できるのも雪国らしい特徴で興味深かったです。食事は各家庭によって様々で、様々な文化を持つ人々が暮らしていることを感じました。また学校での活動の一環でカナダの料理を食べました。スモークサーモンとクリームチーズのベーグルやスモークミートのサンドイッチやプーティンというフライドポテトにソースとチーズがかかっているカナダではポピュラーな料理などを食べることができました。3月17日にはCabane a sucreに行きメープルシロップを使った料理を食べました。日本では食べたことのないカナダ料理に触れることができ貴重な経験になりました。一方で街中の飲食店では日本食の店も多く、予想以上に日本食が海外に浸透していることにも驚きました。モントリオールはカナダの中でもフランスの文化が強く残っているため、多くの人がフランス語と英語の両方を使っていて街中の看板やメニューなどの多くはフランス語で書かれていました。本屋さんや小学校の図書館でも英語とフランス語の両方が使われており、お店で注文する際も英語とフランス語のどちらを話すか確認してくれたりしていました。日本ではほとんどの人が日本語を話し、街中の表示も日本語のみなので複数の言語が日常的に使われているのは興味深かったです。一ヶ月でカナダの文化について学ぶと同時に、日本についても客観的に見直すことができ貴重な経験になりました。



モントリオール・マギル大学での4週間

文教育学部 言語文化学科

1年 小幡鈴



大学での授業

授業は午前中に文法の授業が2時間、発音の授業が1時間あった。文法の授業では、日常で使う主な表現や語彙を集中的に学んだ。先生がフランス出身でモントリオールに長く住んでいる人だったので、特にケベックでの表現とフランスでの表現の両方を教えてくれたところがとてもよかった。テ

↑先生とモニターと一緒に ストとしてはリスニングが2回、ライティングが1回、そしてプレゼンテーションが3回あった。そのほか週末には1週間の復習の課題が出たので、様々なイベントがある中少しハードな内容であったとは感じる。しかし課題やプレゼンテーションを通して、仏作文の力や発音などのスキルは確実に上がったと感じる。また発音の講義では発音記号を1から学び直し、発音の形を動きと口の形でとらえることでより発音のイメージを明確にすることができた。



課外活動

午前中は主に授業を受け、午後は多くのイベントが用意されていた。モントリオール市内の教会や街中をモニターと一緒に訪れたり、スケートやレーザークエストというゲームなど体を動かすアクティビティに参加したり、またモントリオールで有名なプーチンやベーグルといった料理やカナダの伝統的な食事を味わった

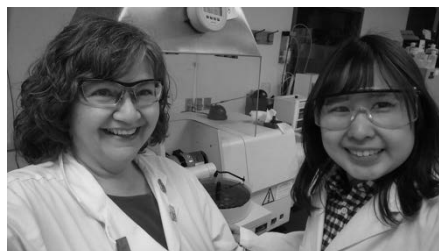
↑氷のホテルの一室にて り、数えればきりが無いほどだ。オプションとして用意されていたオタワとケベックシティへの日帰り旅行では、カナダの国会を見学したり氷のホテルを訪れたりすることができた。氷のホテルは小さい頃からの憧れであったためまさかこんなタイミングで訪れることができるとは思っておらず、大変嬉しかった。アイスホッケーを観戦し、その迫力を肌で感じられたことも印象深い。

カナダ・モントリオールでの生活

モントリオールでは最高気温が氷点下になることが多々あり、最高気温が0℃の日は暖かいと感じるぐらいだ。一度午後から大雪になり、次の日の授業がなくなったこともあった。ホストブラザーもホストシスターも学校がなかったのでみんなでそりすべりをしに行き、非常に楽しかったことを覚えている。またモントリオールはカナダの中でも2番目に人口

が多い都市であるため、列にはきちんと並んで待ち、横から入ってきたりせず、エスカレーターは右側より左側を急ぐ人が通る等のルールがきちんと守られている印象を受けた。ホストマザーの話によると人口が少ない場所では同じような光景はあまり見られないらしい。

ホストファミリーは非常に親切で、すぐに打ち解けることができた。課題が多く出される中、添削をしてくれたり、プレゼンテーション原稿の発音のお手本を見せてくれたりと私のフランス語力アップのためにたくさん助けてくれた。それだけではなく、多くの体験を私にさせてくれた。ホストマザーとホストシスターに脇を抱えられ眠りながら歩いた La nuit blanche という夜通しで様々なイベントが催される日は特に忘れられない。またホストマザーは労働環境の人体への影響を分析する会社に勤めていたが、その仕事場の見学に行かせてもらったことも貴重な経験となった。



↑ホストマザーの仕事場で

このように、学校でも家でも様々な新しい経験をすることができ非常に刺激的な 4 週間であった。目標としていたフランス語の上達も少し感じられるのでこのままこれをモチベーションに続けていきたいと思う。



アイスホッケー観戦→



↑大雪の日

モンテリオールでの生活

文教育学部 言語文化学科
2年 鮫島薫乃



授業内容

モンテリオールのマギル大学で、フランス語研修に参加しました。フランス語の基本文法の授業と発音の授業があり、私にとっては、どちらも満足の内容でした。特に、発音だけを重点的に学ぶことは、なかなか無いことなので、とても勉強になりました。ただ、フランス語コースは1クラスしかなく、レベル別などで分かれていたわけではなかったので、高いレベルでの授業を望んでいた人にとっては、物足りなかったのではないかと思います。

課外活動

様々な活動を学校側が企画・準備してくださっていたので、たくさんの経験をすることが出来ました。ノートルダム大聖堂やモンテリオール美術館に行って鑑賞できるだけでなく、スケートやレーザーゲーム、地下街レースなどといったアクティビティも楽しみました。生で、アイスホッケーの試合を見ることも出来ました。初めて見るアイスホッケーの迫力やスピード感到に圧倒され、これからもアイスホッケーに注目したいと思えるほどでした。これらの活動には、モニターという現地の学生さんたちがついてくださり、私たちのサポートをしてくださいました。週末には、オタワとケベックシティへのエクスカージョンもあり、カナダの他の地域の観光をしました。日帰りのバスツアーだったので、移動がきつかったものの、モンテリオールとは違う景色を見ることができ、またカナダの歴史に触れる機会もあり、楽しく過ごせました。1ヶ月近くの滞在期間中、毎日がとても充実していて、楽しかったです。

カナダ・モンテリオールでの生活

出発前は、マイナス20度にもなるモンテリオールの気候に不安がありましたが、実際に生活してみるとそこまで心配する必要はありませんでした。室内は日本よりも温かく保たれているので、快適でした。外の寒さもすぐになれました。とても過ごしやすい



場所です。また、北米のパリと言われるだけあって、街並みがとてもきれいで、おいしくてオシャレなカフェやベーカリーがたくさんあります。学校帰りに友達とオシャレなカフェを探したり、買い物をしたりする時間はとても楽しかったです。モントリオールの冬もちろんきれいで素敵なのですが、現地の人たちに口々に言われたのは、春か夏にまた来なさいということでした。外で活動しやすい時期であり、街並みも今以上にきれいで、フェスティバルもたくさん開催されるため、街全体が活気づき、楽しいそうです。私もまた、冬ではない時期にモントリオールを訪れてみたいです。

カナダ・モントリオールで過ごした1ヶ月

文教育学部 言語文化学科
3年 武田愛

参加の理由

私が今回の研修に参加しようと思ったのは、フランス語圏の中でも特にフランス語への意識が高いケベックで、フランス語を学ぶことができるから、というのが一番の理由です。ケベック州ではフランス語のみが公用語とされており、街中でもフランス語と英語が併記（あるいはフランス語のみが表記）されています。ケベックが、英語の影響と戦いながらフランス語・フランス文化を維持し、フランス語・文化



の維持発展に大きく貢献していることは、日本ではあまり知られていません。フランス語に対し積極的な意識を持つケベックで、人々がフランス語に対しどのような価値観を持っているのか知りたい、という好奇心も今回の参加の理由の一つでした。

授業内容

マギル大学では、平日朝9時から12時15分まで授業、その後お昼休憩を挟んで課外活動がありました。授業はフランス語文法の授業が2時間、そしてフランス語音声学の授業が1時間でした。

フランス語文法の授業では、基本的な文法事項はもちろん、カナダやモントリオールの文化についても学びました。カナダの文化や生活をフランス語で勉強できたのは、本当に新鮮で実際のでした。また、小学校で日本に関するプレゼンをしたり、授業でフランス文化について調べて発表したりする機会があり、かなりフランス語力が鍛えられました。

また、音声学の授業では、フランス語の発音をきっちり勉強しました。日本では発音のみを集中して学習する機会はなかなかなかったので、貴重な時間でした。

課外活動

課外活動は毎日午後と、週末に2回オタワ・ケベックシティへのツアーがありました。モントリオールには様々な美術館、博物館、歴史的建築物、店などがあります。何人かのモニターと一緒に、いろいろな施設や場所を訪れました。また、カナダに関するクイズやレクチャーが行われたり、み



んなでスケートをしたりもしました。私は特に、アイスホッケー観戦とノートルダム大聖堂が印象に残っています。課外活動で本当に多くの体験ができ、またたくさんの思い出を作ることができました。



カナダ・モントリオールでの生活

滞在中、私はモントリオール郊外のお家でホームステイをしました。イラン人のお父さんとフランス人のお母さん、移民同士の夫婦のご家庭でした。二人とも優しく温かく私を迎えてくださり、とても素敵な時間を過ごしました。一緒にご飯を作ったり、スポーツをしたり、映画を見たりと、様々な体験をさせていただきました。特にお父さんがイラン人だったので、滞在中は頻繁にイラン料理を食べました。お父さんはとても料理上手で、どの料理もとても美味しかったです。日本ではあまり食べたことがなかったので、貴重な体験でした。お家では主にフランス語を話していましたが、英語を話すこともあり、時にはペルシャ語が聞こえることもありました。また、ホームパーティーを開いたり、別のお宅を訪れたり、二人のおかげでたくさんの人と出会う機会を得ることができました。

3月のモントリオールはまだまだ寒く、雪嵐で学校がお休みになったこともありました。気温はほぼ毎日マイナスで、日本に比べればかなり寒かったです。しかし寒い地域なので中は温かく、また外に出なくても地下鉄やお店、学校などを行き来することができたので、そこまで寒さを気にすることはありませんでした。

またモントリオールの人々も、とても温かかったです。ドアを開ける際に後ろに人がいれば、必ず開けておいてあげたり、ちょっとしたことできちんとお礼を言ったり、などなど、優しさを感じるものがたくさんありました。ワークライフバランスも理想的で、日本に比べるとプライベートの時間がかなり充実しているように感じました。治安も、私が予想していたよりはだいぶ良かったです。総じてモントリオールはとても住みやすい街であると実感しました。

モントリオールでは、様々な人種の人々が自らの文化を維持しながら共存しています。カナダ人ではなく、カナダの〇〇人である、と私に言う人もいました。フランス語や英語を架け橋として、そうした人々がきちんとアイデンティティを確立した上で互いに接し合い、モントリオールが形成されているのだと思います。様々な言語が飛び交い、様々な文化に触れることができるモントリオールは、日本とはまったく違うことばかりでとても新鮮でした。

私のモントリオールでの1ヶ月間は、本当に素晴らしい時間でした。ぜひまたモントリオールを訪れようと思っています。

マギル大学短期研修

文教育学部 言語文化学科
2年 根建真衣子

授業内容

午前中に、フランス語の文法と発音の授業がありました。日常生活でよく使われる単語や表現を学ぶだけでなく、会話練習の時間もあったので、とても役立ちました。フランスにはない、ケベック特有の表現も学ぶことができ、興味深かったです。発音の授業では、母音や子音の発音の仕方、口の使い方を一つ一つ丁寧に教えてもらえたので、それを意識して、これからの勉強に活かしていきたいと思います。

フランス語でプレゼンテーションをする機会も何回もあり、そのうち一回は小学校での発表でした。日本でもフランス語で発表する機会はありましたが、今回は発表時間が長く、日本独特の文化をフランス語で表現しなければならず、準備にも時間がかかりました。何度も練り直して原稿を仕上げました。

本番には、先生や小学生たちから予想もしていなかったような質問を受け、日本文化が外国からどのように見られているかを知るととても良い経験になりました。

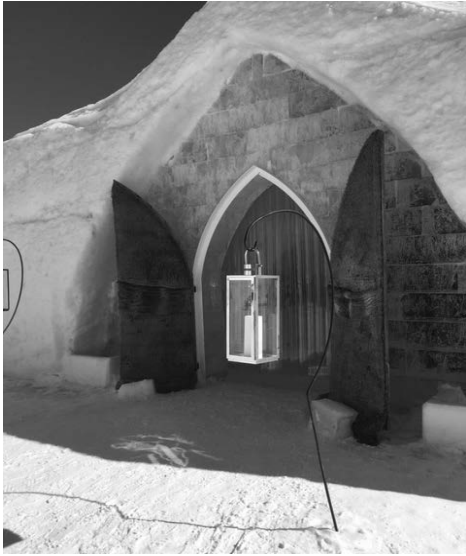


【国会議事堂】

課外活動

平日の午後には、教会、地下街、美術館、プラネタリウム、ノートルダム大聖堂など多くの場所を訪れました。日本にいる時からプラネタリウムが好きでしたが、海外で見ることができたのは思い出深いです。また、土曜日にはオタワやケベックシティに日帰り旅行に行きました。オタワでは国会議事堂とカナダ歴史博物館、ケベックシティではアイスホテルと旧市街に行きました。特に印象に残っているのは、ケベックシティにあるアイスホテルです。中には氷でできた彫刻が飾られていて、部屋だけでなくバーやチャペルまであり、幻想的で美しかったです。自然のものを使ってここまでできるのかと驚きました。

さらに、カナダの伝統料理であるプティンや、スモークサーモンとチーズを挟んだベーグル、メープルシロップを使った料理も食べました。基本的に日本の料理に比べて量が多いので、食べ切るのが大変でした。



【アイスホテル】

カナダでの生活

私はモントリオール郊外の住宅街に滞在し、大学にはバスと地下鉄を使って通っていました。最初は停留所のアナウンスが流れないバスに戸惑い、近くにいた人に現在地を聞いたり、手前のバス停で降りたりというハプニングもありましたが、一週間も経つと慣れてきました。

モントリオールは地下街が発達しているのも、学校帰りにはショッピングを楽しんだり、書店やカフェにも行きました。また、友達と日本の食材を求めて中国系スーパーに入った時に、日本のスーパーと同じような匂いがしてとても懐かしくなりました。

到着した時は、フランス語でうまくコミュニケーションがとれるのか、ここで生活していくことができるのか心配でしたが、ホストファミリーはとても優しく、温かく接してくれて、一ヶ月間、楽しく安心して過ごすことができました。一緒に料理を作ったり、スーパーに買い出しに行ったり、映画を見に行ったりしました。驚いたのは、とにかく食材が大きく、量も多いことです！映画館でポップコーンの一番小さいサイズを頼んだら、大きすぎて食べ切れませんでした…。

ホストマザーのいとこの誕生日パーティーにも連れて行ってもらいましたが、多人数で複数の会話が同時展開されているのについていくのは本当に大変で、帰る頃には頭がとても疲れていました…。

ホストファミリーと会話する中で、(授業内容のところでも少し書きましたが、)日本独特のもの(こたつ、俳句など)をフランス語で説明するのは、やはり難しかったです。

終わりに

行く前は、一ヶ月は長いと思っていましたが、振り返ってみると本当にあっという間で、帰るときは名残惜しかったです。ホストファミリーを始め、大学の人たち、街で出会った人たちに助けられて、一ヶ月を送ることができました。本当に感謝しています。

今回の研修を通して、以前よりはフランス語を聞き取り、話せるようになったと感じています。ですが同時に自分の課題にもたくさん気づいたので、その改善を次の目標にして頑張ります。また、一ヶ月海外で生活してみることで、これまでとは違った視点から日本を見ることができるようになりました。今回の経験を活かして、これからもフランス語を勉強し続けます。

マギル大学研修を終えて

文教育学部人文科学科

2年 馬場菜み子

授業内容

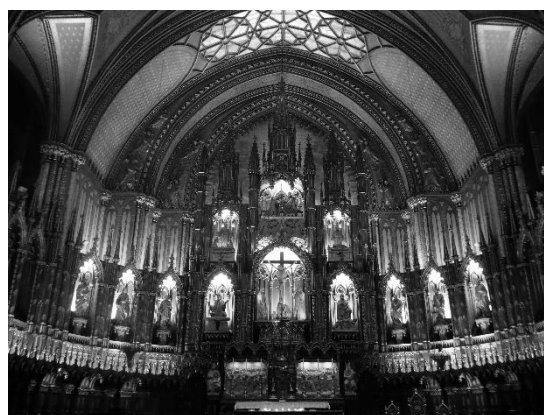
今回はフランス語研修のプログラムに参加し、基本的な文法や会話表現、発音を学んできました。授業もフランス語で行われます。私は1年生の時に第二外国語としてフランス語の学習をしたきりで、丸1年のブランクがありました。そのため、最初は授業についていくのが少し辛かったのですが、先生は易しいフランス語で話してくれた上に、周りの仲間たちが「ここはこういう意味だよ」と教えて助けてくれたので、少しずつ意味が分かるようになっていきました。後半には、使える語彙も増え、先生の話の内容もある程度分かるようになったのが嬉しかったです。また、このプログラムではフランス語でプレゼンテーションをする機会が多くありました。特に小学校を訪問して日本について紹介することが最大の山場と言っていいと思います。事前に原稿を何回も読み直し練習した甲斐があり、本番ではスラスラと話すことができました。

このプログラムはフランス語初心者向けのもので、修了してもペラペラ喋れるようになるわけではありませんが、発音や語彙、文法など、今後の学習のために必要な土台を築いてくれると実感しました。そういう意味では、行って決して損はないと思います。

課外活動

平日の午前中はフランス語の授業ですが、午後は様々なアクティビティーがあります。マギル大学の学生であるモニターの方々と一緒に街に出かけ、植物園やプラネタリウム、ショッピングモールなどで楽しい時間を過ごせました。休日はオタワやケベック・シティへ観光に出かけ、古い町並みを堪能しました。

放課後に何をするかは完全に個人の自由です。買い物に出かけることも、カフェに行くことも、映画を観に行くこともできます。私はこの自由時間を使って、市内の教会や聖堂を見て回りました。この街には教会が非常に多く、どれも豪華かつ美しい装飾で彩られています。特にノートルダム大聖堂の豪華さは群を抜いており、ミサを見学した際は、聖歌隊やパイプオルガンの演奏と相まって、思わず圧倒されてしまいました。日本には大きな教会があまりないので、こうした教会を観光することは、キリスト教圏の国での楽しみ方のひとつだと思います。他にも書店で立ち読みしたり、友達とフードコートに行ったりして、気ままに楽しむことができました。



モンリオールでの生活

モンリオールのあるケベック州は、かつてフランス植民地だった歴史的背景があるため、フランス語を話す人が非常に多いです。看板や広告、テレビなどは殆どフランス語です。しかし、人々の多くは英語も話せるバイリンガルで、街中では二つの言語があちこち



から聞こえてきます。書店にはフランス語の本と英語の本が両方置いてあり、博物館や美術館に行くと、展示品の解説が二言語で表記されているので、フランスとイギリスの二国に支配されていた歴史の名残を感じます。

モンリオールには様々な人種、国籍の人々が集まるため、街中にはいろいろな国の文化が見られます。中華料理店、アイルランド料理店、タイ料理店など、至る所に様々な国の料理店があります。また、3月にはアイルランドのお祭りである St. Patrick の日を祝い、大通りではパレードが開かれます。このように、モンリオールでの生活は、多くの国の文化が混じり合った独特なものでした。

ホームステイ

私はこの1ヶ月間、フランス語を話すご家庭にホームステイしました。先に述べた通り、私は丸1年間殆どフランス語の勉強をしていなかったため、最初は全く言葉が出てきませんでした。そのため、ホストマザーとは英語で話すことが多かったです。しかし、授業で覚えた単語やフレーズを使って、少しずつ話せるようになり、相手の話すフランス語も少し分かるようになりました。自分の話した言葉がちゃんと通じた時は、とても嬉しかったです。ホストマザーとは、いろいろな話をしました。授業で分からなかった箇所を教えてくれたり、台所の道具や食品をフランス語で何と言うか教えてくれたり、カナダやケベックの文化を説明してくれたり……マザーからは、多くのことを学びました。私は日本の文化や現代社会について説明し、ときには日本食を作って食べてもらいました。

ホストファミリーとの交流は、私にとっては最も印象に残ることのひとつです。このおかげで、カナダをより身近に感じることができました。こういった意味で、ホームステイで得た経験は、寮生活では得られない貴重なものでした。

私はこの1ヶ月間モンリオールに滞在したことで、フランス語が少しできるようになっただけでなく、カナダの文化について理解を深めることができました。それは、フランスやイギリスだけでなく、世界各国の文化が入り混じる多様なもので、それらが共存しながらカナダという国が成り立っていることが分かりました。ここで得たものを、これから活かせる機会があればいいなと思います。

カナダ、ケベック州バイリンガル都市での1ヶ月間

文教育学部 言語文化学科

3年 小山未空



授業内容

授業は毎朝9時から開始され、教室で仏語会話や初級文法を学びました。先生はフランス人で、基本的には仏語、解説の時には英語を使用してくれました。私はマギル大学での研修が初の本格的なリスニング、スピーキングトレーニングであったため、最初の1週間は先生の話す仏語を理解することだけでもひと苦勞でしたが、

英語での質問も受け付けてくれたため、疑問点を残すことなく日々の授業を終えることができました。授業はコミュニケーションをとるための会話が中心で、仏語を話すことがほとんどでしたが、2週目からは毎週月曜日に10単語の意味と例文を書く、という課題があり、語彙強化や簡単なライティングの試験もありました。授業方式はイマージョンプログラムで、基本的に使用言語は仏語でした。バイリンガル教育ではなかったため、逐一仏語の意味を英語（日本語）に置き換える必要はなく、その場で教わる仏語会話表現をひたすら繰り返し発音し、身体に覚えさせるという感覚でした。

また、週4回の仏語音声学の授業はパソコンとヘッドセットを使用した授業で、毎回ひとりひとりの発音を丁寧にチェックしてくれました。3週間目には今までは同じように聞こえていた単語も次第に聞き分けられるようになってきたという実感が得られました

課外活動

毎日午後の2時間半は Moniteur と呼ばれるマギル大学の学生たちとの課外活動で、13名は3グループに分けられました。各グループには2名の Moniteur が配属され、毎回必ずどちらかがそれぞれのグループメンバーを引率してくれました。市内散策として、モンリオール市内の博物館・美術館・教会を訪問しました。毎週金曜日は昼食の時間にケベック州の食文化を通してユニークな味を堪能しました。マギル大学の学生たちはとても親切で、授業外でも SNS を通じて質問に答えてくれたり、翌日の課外活動の持ち物や注意事項を伝えてくれたりもしました。

短期語学研修の最後は4グループに分かれて小学生向けのプレゼンを作成しました。20-25分のプレゼンは Moniteur の助けがなければ完成しなかったと思います。プレゼンのアイデアはフランス人の先生から提示がありましたが、原稿の仏語表現の添削や発音指導などの全てをマギル大学の学生が担当してくれました。第4週目には実際に小学校を訪問し、同日計3回プレゼンを行いました。



カナダ・モントリオールでの生活

私は人生の大半(18/21)を北海道の地方都市で過ごし、大学進学を機に上京してからは年に一度10日間程日本を離れていたため、海外生活に対する拒否反応はありませんでした。ホストファミリーは去年10月に入籍したばかりの57歳と58歳のご夫婦で、マギル大学までの通学時間が約1時間だったため、週末旅行には参加せず、授業課題や体力回復、ホストファミリーとの交流に時間を使いました。波乱万丈な人生(現在進行形)を歩んできたホストマザーの身の上話を聞き、14歳から大学2年生まで米国で教育を受け、米兵・起業家・サラリーマンを経験したホストファザーの話は1ヶ月間という期間のホームステイでなければ聞くことができない話だったと思います。

モントリオールで驚いたのは、仏語の使用率とケベック人の語学柔軟性です。地下鉄内での仏語会話の中に時折英語表現が出てきたり、マギル大学の学生同士の会話では一方が仏語を話してもう一方が英語を話しながら会話が成立していたり、といった状況が日常茶飯事でした。街中は仏語と英語の言語表記が基本で、食品表示や看板もそれに則っています。日常生活は英語ができれば不自由ないと思いますが、英語を媒介として仏語を学習するには最適な都市だと思います。渡航前はモントリオールに住む人は母語が仏語だと思い込んでいましたが、実際には友人との会話や家庭内で英語を使用する人の割合も多いとのことでした。ホストファミリーの孫5人も全員バイリンガルスクールに通っていることや、マギル大学の授業が英語で行われていることから、英語の有用性を実感するとともに、仏語と英語を併用することができる現地の人々に感心するばかりでした。

滞在中は気候が安定せず、日中の気温が8℃になったり体感気温が-30℃になったり、季節外れの雪嵐が起こったりしました。滞在2週間目からサマータイムに切り替わったのは貴重な経験でした。1時間生活時間が早まってもバスや地下鉄はサマータイム以前と変わらず機能していましたが、家の中の大きな2つの時計は私が帰る時までずっと1時間遅れのままでした。

平日は自宅と大学を行き来し、週末は自宅にいたため課外活動以外で市内を散策することはありませんでしたが、バス・地下鉄での通学時間が長かったため、人々の日常生活を垣間見ることができました。滞在1週間目からバス停や地下鉄の駅で何度も道を聞かれたことには驚きました。ケベック州の人は仏語で「英語話しますか?」と訪ねてきます。

研修参加者からのアドバイス

1. 出発前に気を付けたほうがいいこと

- 防寒着の準備は入念にする。(帽子、手袋、マフラー、カイロ、アンダーウェア…) 冬は乾燥が激しいので、保湿クリームやオイルを持参すること。
eTA を確実に取得すること。クレジットカードは2枚以上用意する。現地で日本語は通じないということを理解する。
風邪薬や常備薬は多めに持って行く。
- 荷造りをする際は、必要最低限のものだけ入れること。余計に詰め込むと重いだけだし、帰国前にお土産を買い重量オーバーになってしまう。
- 現地の状況についてよく調べておくといいと思います。また、万が一の場合に備えて、携帯やクレジットカードなどを失くした時にどこに連絡するかすぐ分かるようにメモしておくといいと思います。
- 現地の気候に合わせた服装を準備すること。
- エアカナダはスリッパが出ないので持参すること

2. 研修先の授業

- イマージョンプログラムで、使用言語はほぼ全て仏語。講師はフランス人で、英語も通じる。
音声学の授業もあり、発音も丁寧に指導してくれる。
午後は毎日モニター(マギル大学の学生たち)との課外活動。プレゼンテーションなどの宿題があれば、その指導もしてくれた。授業時間は9:00-16:00。
- 積極的に取り組むこと。なるべくフランス語で話す努力をする。
- 文法を中心とした授業と、発音の授業を受けました。数回長めのプレゼンテーションをする機会もあり、準備も本番も大変でしたが、良い経験になりました。
- 授業はとても満足のいく内容で、ためになりました。初級文法と発音の授業です。なかなか発音に特化した授業は日本では受けられないので、とても貴重でした。
- 午前中はフランス人の先生による2時間の文法の講義、1時間の発音の講義があった。午後は街へ繰り出したり、プレゼンの準備をモニターと呼ばれる学生たちとした。

3. ホームステイ

- 部屋は一人部屋で暖房設備がしっかりしていたが、地下だったからかホコリが多かった。シャワー室とトイレ、洗面台も自分専用にあったが、同じ場所に家族が使う洗濯機・乾燥機もあった。

- ホストファミリーの手伝いをする。お客様の気分ではやめた方がいい。また、部屋に引きこもりっぱなしで、ホストファミリーとコミュニケーションを取らないのも良くない。
- とても快適に過ごせました。初めは緊張していたのですが、ホストファミリーはとても優しく、安心して過ごせました。
- 外国語でうまく話せなくても話そうとする姿勢を見せることが、ステイ先のファミリーと良い関係を築くために必要だと思います。他人の家に泊まるわけなので、多少の我慢が必要です。
- 家では靴を脱いで過ごした。中は暖かいとまでは言えず、カーディガンや羽織る物を持参した方がよい

4. 食事について

- ホストマザー・ファザー共に料理上手だった。マザーは主にカナダ料理や軽食を作り、ファザーはタイ料理などのエスニック料理を振舞ってくれた。全体的に見て、マザーが料理人の夕食は単品料理、パスタやピザが多く、ファザーが料理人の場合は魚料理が多かった。
自分で食べ物を選択し、量を調節していたので比較的健康的に過ごせた。
- ホストファミリーとの食事の際は、何が食べられないかをはっきり伝えること。また、外食をする前に、チップをどのくらいの割合払えば良いのか確認しておくこと。
- 食事は美味しかったです。ただ、日本よりも量が多いです。お昼はお弁当を持参していました。
- 私のステイ先の晩ご飯は、正直美味しくなかったです。栄養も偏っていて、野菜がほとんど出ませんでした。学校帰りに友達とカフェに行ってから帰っていました。
- 家族によって異なるが、移民の国なのでいろいろな国の料理が出るが多かった。

5. 現地学生・地域住民との交流

- 13人が3チームに分けられて各チームに2人のモニター(マギル大学の学生)がついてくれた。
毎日午後には課外活動をしてモニターと交流を深めた。モニターは仏語を使用して話しかけてくれたが、こちらが分からない時には何度も繰り返し話しかけてくれた。怒ることもなく、根気よく丁寧に教えてくれて、ありがたかった。
- 一緒にアクティビティーを行ってくれるモニターの方とは、積極的にコミュニケーションをとること。

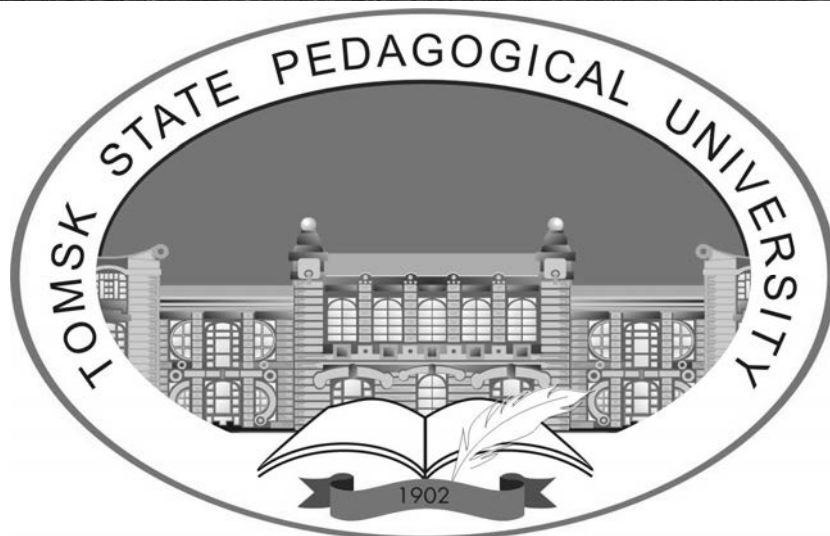
- 主に午後のアクティビティの時に、現地の学生たちと交流しました。また、日本語を学ぶ学生とも交流し、フランス語と日本語で会話しました。
- 現地の学生の方々は、みんなほんとに親切でした。彼女たちのおかげでマギル大学で有意義な生活を送ることができました。
- 現地の学生としてはモニターたちとホストブラザー、シスター以外交流はなかった。みんな優しくて英語ができる。

6. 経済面

- 週末旅行に参加しなければ特に大きな出費はない。お土産に使うお金と、放課後にカフェに行くためのお小遣いがあれば十分だった。たまにデビットカードしか使えないお店があるので確認する必要がある。
- 多額の現金を持ち歩かないこと。プリペイドカードなどを用意しておくこと。
- 物価は基本的に日本よりも安い。現金とクレジットカードを使っていました。
- このコースでは、ほとんどお金を使うことはありませんでした。交通費は学校側が準備してくれていて、ランチもステイ先から持って行ってました。物価はどちらかと言うと安いので、買い物もしやすかったです。
- メトロやバスが使い放題のカードを用意してもらったので交通費はかからなかった。食費も基本的に家族と食べるのでかからなかった。美術館の入場料等も払わなくて大丈夫だった。全体的にあまりお金を使っていないが、オプショントリップは少しお金がかかる

7. その他

- スリッパは必要で、現地で捨てて帰ってくることを覚悟する。(汚くなるため)スリッパがないと、一日中家の中でもブーツで過ごすことになる。
お風呂は浴槽なしのシャワーブース。海外でいうところの rice/du riz はタイ米なのでいくら噛んでも甘味は感じない。パサパサなだけに、炒飯にすると絶品。果物は皮を剥きたければ言葉で伝えないと皮付きのままランチとして用意される。何故かテレビは真っ暗闇のリビングルームで見る。
- パスポートの扱いには十分注意すること。
- 地域にもよると思いますが、バスでは停留所のアナウンスがなく、最初は戸惑いました。自分の降りる停留所が近づいたらボタンを押すシステムでした。
- とても満足度の高い研修でした。フランス語に対する学習意欲が高くなりました。



期間：2月20日～3月11日

滞在：大学寮

参加費：授業料免除、大学寮滞在費（食事抜き、自炊）無料、登録費 10,000RUB のみ
（約1万7500～8000円：2016年度2月現在）、航空券・個人滞在費用・海外保険
などは各自負担、奨学金7万円支給

研修内容：72時間の集中ロシア語・文化セミナーとワークショップコース
2ECTS（欧州単位互換制度）取得、海外交換留学認定科目4単位認定

ロシアでの発見

文教育学部 人間社会科学科
1年 服部夏央

授業内容

ロシアでは英語があまり通じない。授業ではまず挨拶から学んだが、必死で覚えなければ生活もままならなかった。1日 180 分、英語でロシア語を教わる授業。文字を書くことさえままならない私は、毎日授業についていくのに必死だった。授業は、教科書を使って単語や文章を読む練習がメインだった。何度も同じ間違いを繰り返しては、先生が根気よく直してくれた。歌や会話を聞いてディクテーションをしたり、文法を習って問題を解いたりもした。私にとって、すべてが新しく、すべてが興味深かった。夜は寮で、友人に押し当ててもらいながらその日の宿題や復習をした。最後には集大成として、自分でテーマを決めてロシア語でプレゼンテーションをした。3週間という短い期間では、家族の呼び方や簡単な言い回しというような初歩的なことしか学べなかったが、ロシア人の友人に助けられながら、なんとかプレゼンテーションを完成させることができた。

1つ印象的だったことがある。先生がこう言ったのだ。「みんなどうして楽しくなさそうに挨拶の練習をするの？」なるほど、確かに“ロシア語での”挨拶ということに気を取られすぎて、挨拶の本来の目的を忘れてしまっていたのだ。そもそも、自分がロシア語を学ぶ理由は、コミュニケーションのためであったのである。それから、ロシア語を学ぶことが楽しくなった。



場面に合わせて、ロシア人になりきって挨拶の練習をする。どんな表情で、どんな声のトーンで言うのが良いのか。そう考えるだけで、慣れないはずのロシア語での挨拶がずっと身につくようであった。文法だけを学ぶのであれば、日本でもできる。ネイティブである先生を口の動きや表情をよく見て、真似する。先生とロシア語で話してみる。覚えたことを買い物やバスの乗車と言った日常生活に応用する。学んだことをすぐ実践に移すことができ、良い環境で良い授業を受けることができた。



課外活動

滞在していたトムスクという街から、シベリアの雪景色の中をバスで4時間。ノボシビルスクという大きな都市がある。ロシア人の友人に助けられ、そこでずっと見たかったロシアのクラシックバレエの舞台を見ることができた。大きく、豪華なシアター。重厚な舞台セット。ダンサーを彩る衣装に、魅力的なダンサーたち。すべてが欠けることなく美しい舞台であった。演目は『くるみ割り人形』。分かりやすい舞台のためか、子どもの姿も多く見られた。チケットは、日本で買えば1万円はするのであるが、1700ルーブル(約3400円)で買うことができた。列は前から4列目。生演奏のオーケストラも見ることができる。またとない

機会に、夢であったロシアでのバレエ鑑賞が叶った。

ロシア・トムスクでの生活

「異文化」という言葉がある。研修前、私のロシアのイメージはまさに「異文化」であった。私の住む場所よりも20℃以上寒い地。「異文化の理解」と目標を掲げていざロシア・トムスクで生活してみると、「異文化」なんて大層なものではなかった。人々は優しく、困っている私に手を差し伸べてくれる。寒い外に対し部屋は暖かい。主食は主にパンで、乳製品が多いためバターやチーズ、スメタナというサワークリームやヨーグルトのようなものが、スーパーには多く並ぶ。いろんなものを食べたが、どれも美味しい。毎日シャワーを浴びたし、雪道だって2日も歩けば慣れてしまう。私が張り切って「理解」しようとしていた「異文化」はどこにもなかったのである。ロシアは、地理的には例えばアメリカやイギリスよりもずっと日本に近いはずなのに、どうしても遠いイメージがあった。それは、私がロシアという国を知らなかったからだったのである。3週間暮らしても、何も大きな不便はない。勝手に自分で、自分の文化とは「異」なると思い込んでいただけだったのだ。しかし、現地の大学でロシア人に日本語を教えている先生方は、何年もロシアに住み仕事をされていると、「日本とは違う」と気がつくことがあるそうだ。それは、先生方がロシアをよく知ったからこそ、気づいたのである。自分の目で見ること、「異文化」なんて大げさだということに気づけた。頭だけでなく、足を動かして学ぶことの大切さがわかった3週間だった。

ロシアのトムスク国立教育大学での春季短期研修を終えて

文教育学部 言語文化学科

1年 堀内雅憂花



授業内容

わたしたちの受けた授業は基本は平日に約3時間半、英語を交えつつロシア語の単語と簡単な文法を学びました。キリル文字の発音からスタートし、授業内でも先生からの質問にロシア語で答える、といったものが多く、リスニングとスピーキングの力がつく授業でした。実用的な内容が多く、だんだん街中でも聞き取れる単語が格段に増えていき、力がついていることを感じ嬉しかったです。授業は日本からの留学生のみのクラスでしたが、広島大学など他大学のロシア語を学んでいる学生と交流でき貴重な体験でした。

課外活動

毎授業後に、国際交流センターの先生によるロシア文化についてのプレゼンテーションを聞きました。伝統的な人形を作ったり伝統料理を食べたり、文化を身近に感じられとても嬉しかったです。英語を使う先生との交流が多かったのですが、ロシア語のみの先生もいらっしやったので、研修の最後のほうで覚えたてのロシア語で先生と少し会話できたことが本当に嬉しかったです。全授業が終了した後、日本からの留学生によるプレゼンテーションと、小さな劇を行いました。プレゼンテーションでは「ロシアと日本の童話の共通点と相違点」についてロシア語で発表しました。緊張しながらも、ロシア語でプレゼンテーションを行うというめったにない経験をさせていただき、そこから得た成功や失敗はこれからのロシア語学習に活かしていきたいです。このプレゼン会には学部長や中国からの留学生の方々も見に来てくださったので、みなさんに学んだことの集大成をお見せできたのではと思います。また、トムスクで日本語を教えている日本人の松本先生、高田先生が開いている日本語教室にもお邪魔し、日本語を学んでいるロシア人の方と交流しました。日本に関心を持っている方の中には、子供の時にテレビで放送されていた日本のアニメを見ていたという方もいて、思わぬところに文化的な交流があるのだと驚きました。休日にはスケートやマトリョーシカに色をつけるアクティビティと一緒に参加し、たくさんお話ができてとてもいい異文化交流でした。左上の写真は、プレゼン発表の準備などで非常にお世話になった現地の友達との写真です。トムスクを離れる前日にお互いにプレゼントを交換し、帰りたくないと思えるほどの楽しい時間でした。



ロシア・トムスクでの生活

わたしたちは日本→モスクワ→トムスクという航路の便で出発しました。現地では、トムスク国立教育大学付属の寮で、お茶大からの留学生3人と、他大学からの5人の学生と日本ユーラシア協会の方1人の合計9人で生活していました。今まで1週間以上海外に滞在した経験がなかったため出発前は非常に不安でしたが、トムスクに到着し優しい寮のおばさんが迎えてくれ安心したのを覚えています。海外での慣れない生活は気疲れも多く、最初の1週間は不便なこともありましたがだんだんと勝手が分かり自分

で料理をしている学生もいました。トムスクは多数の大学を有する 400 年の歴史をもつ都市であり治安がよく、中心部には美術館や博物館、ショッピングセンターなどがあり休日は非常ににぎわっており、わたしたちも放課後に、先生に教えてもらったおいしいお店にご飯を食べに行ったりショッピングに行ったり覚えているだけのロシア語を使ったりと楽しんでいました。また、現地でのマナーは非常に重要です。ロシアでは、バスに乗った時は目的の駅で降りる時に同時に料金を渡すのではなく 1 駅前で料金を渡しておく、というマナーがあります。わたしはそのマナーを知らず運転手の方に迷惑をかけてしまったので、現地のマナーをもう少し学んでおくべきだったと反省しました。わたしたちが留学に行ったのは 2 月半ばから 3 月上旬であり、ちょうどロシアでは国際女性デー、祖国防衛の日、マースレニツァ（春を迎える祭り）という 3 つのイベントがある時期でした。ロシアは祝日をとっても大切にしている国です。花やポストカード、祝日用の華やかなケーキなども身近なスーパーで買え、親しい人によく贈るそうです。上記の一つ国際女性デーは日本ではあまり浸透していませんが、ロシアでは旧ソ連時代から二月革命記念日として祝われてきた祝日です。かつては政治的な祝日でもありましたが現代では女性の美しさや母に感謝する日となっており、わたしたちが女性教員による授業を受けている最中にも、その教員に花を贈りにきた男性がいらっしや国民的な休日なのだ実感しました。また、一番記憶に残っているのはマースレニツァです。トムスクの中心広場で行われるこのお祭りは、「冬に別れを言い春を迎える」行事で、冬の象徴とされる巨大な布人形を燃やすのがメインイベントとなっています。春祭りと言ってもこの時期はまだ寒さが厳しく、普段の街中では歩いている人も少なかったのに、お祭り当日はびっくりするぐらいの多くの人が集まり、人々が春の訪れを楽しみにしていることがうかがえました。雪が残っている時期にも左上の写真のような氷像が近隣の大学生の手によって作られ、どの時期も季節を楽しむことを忘れないという点はどの国も共通なのだ気付きました。食事の面は、大学食堂を利用したり近くのレストランなどで国民的な食事を楽しんだりしました。ボルシチ、黒パン、クヴァス（黒パンから作った炭酸ジュース）、ペリメニ（水餃子に似たもの）、ピロシキなど食べましたが、特に「ブリヌイ」というクレープに似たシベリア風の食べ物がとてもおいしく、ロシアでは国民的な食事なのだそうで、街中でもいろんな所に店舗があり日本に帰ったら食べられなくなるのが悲しかったです。ロシアの食事に順応し、今では日本食よりもロシア食の方が好きと言えるほどです。今回約 3 週間の留学に参加することを決意したのは、ひとえにロシアのことをもっと知り、日本とロシアの繋がりを深めたいと思ったからです。短い期間ですが現地で生活をし、たくさんの人々にお世話になり、今その思いはいっそう強くなっています。そして、モスクワやペテルブルグはもちろん、いつの日か、必ずまたあの美しい街トムスクに行くだろうと確信しています。もし行くかどうか迷っている方がいらっしやるのならば、行って後悔は絶対にしないでしょうから、ぜひご参加することをお勧めします。澄み切って凜とした寒さと、トムスクの人々の心の温かさを、ぜひ感じてみてください。

トムスクでの研修を終えて

文教育学部 言語文化学科

1年 目黒美帆



授業内容

授業はロシア語の授業が午前中約三時間、ロシアやトムスクの文化に関する授業が午後約一時間で行われました。私は第二外国語としてお茶大でロシア語を履修していたため文法事項はほとんどが復習という感じでした。最初はキリル文字の発音から始まり、徐々に形容詞や動詞などの文法事項を学んでいきます。お茶大のロシア語の授業では文法がメインだったので現地の人の発音を聞いたことはとても良かったです。午後は先生がまずパワーポイントで文化について説明し、その後具体的にロシアのクレープであるブリヌイを食べたり、ロシアの昔話で日本でもよく知られている「おおきなかぶ」の劇を参加者ですするという感じでした。両方ともロシア人の先生が授業をしてくれます。また先生は英語を交えて話してくれるためロシア語初学者でも心配することはないと思いますが、逆にロシア語を学習したことのある人にとってはロシア語と英語が混じりわかりにくいところがあるかもしれません。

課外活動

授業以外でも放課後や休日には現地にいる日本人の先生方がスケートやスキー、マトリョーシカの絵付け体験など様々な体験を企画してくれます。特にロシア式のサウナであるバーニャやシベリアンハスキーの犬ぞりなどは日本では絶対に経験できないことだと思うので良い経験になりました。他にもトムスク国立教育大学で日本語を学んでいる学生との交流があり、彼らがトムスクの博物館やオススメのお店などに連れて行ってくれます。ロシア人は家に人を呼ぶのが好きなようで仲良くなると自分の家に招待してくれます。私は三人のロシア人の家に行きました。そして夕飯にロシアの水餃子であるペリメニやトムスク特産のチョコレートなどをご馳走してくれました。またこの研修の最後にロシア語による5分間ほどのプレゼンテーションがあるのですが、このロシア人の学生達が親身になって手伝ってくれるので特に心配する必要はないと思います。

ロシアでの生活

今回の留学ではトムスク国立教育大学の学生寮に滞在しました。必要最低限の設備には困りませんが、汚くはないのですがやはりトイレやシャワーなどは日本のものと比べてしまうとどうしても質は下がります。またトイレは紙を直接流すのではなく、脇に置いてある

ゴミ箱に捨てます。食事に関しては朝はパンにロシアのサワークリームであるスメタナを塗ったり、ヨーグルトを買って済ませました。日本からインスタントの味噌汁を持っていくとサッと食べられて便利だと思います。昼は主に大学の学食で食べました。安く食べられるのでオススメです。夜は基本的に外食です。近所に美味しいピザ屋さんがあったのでよく通っていました。他にも近くにタジキスタン料理屋があります。普通に美味しいです。あとは現地の学生や先生が美味しいお店に連れて行ってくれました。

みなさんの中にはロシアはスリなどが多く、危ない国だと思っている方もいるかもしれませんが、全然そんなことはありません。少なくともトムスクに関しては全くそういうことはなかったです。またロシア人はあまり表情が変わりませんし、どちらかというとなシャイな人が多いので日本人が外人に対して抱いている陽気で明るいノリを想像しているとあれ？と思うかもしれません。しかし、日本人と似ているので逆に付き合いやすいと思います。またロシア人は冷たいと思っているかもしれませんが、みんなとても優しいです。スーパーで量り売りのやり方がわからずに困っていたら小学生くらいの女の子が助けてやってくれたり、重いスーツケースを持って階段を上っていると代わりにもって上がってくれたりしました。とてもありがたかったです。

私にとっては今回の研修が初の海外だったのですが、この研修に思い切って参加してみて本当に良かったと思います。やはり一ヶ月などまとまった期間、海外に行く経験は学生の今しかできないと思うのでロシアに限らず、海外の研修に参加しようか迷っている人には思い切って参加してみてほしいと思います。きっと素敵な思い出や出会いがたくさんできると思います。



研修参加者からのアドバイス

1. 出発前に気を付けたほうがいいこと
 - 準備は早めにすませる
2. 研修先の授業
 - 授業はすべて英語で行われるので、集中してやらないとついていけなくなる。1日2時間くらい復習すると良いと思う。
3. ホームステイ
 - 備品はほとんど何もない。少しでも必要だと思うものはすべて持っていくべき。私たちが使ったものを少し置いてきたが、同じ寮かどうかは不明だ。
4. 食事について
 - 美味しい。
5. 現地学生・地域住民との交流
 - みんな親切だが、英語が堪能な人はほとんどいないと思った方がよい。
6. 経済面
 - 足りなくなる可能性があるため、日本円も持参すべき。フィレンツェ通りで換えられる。
7. その他
 - 分厚いコートは必要だが、中に着るものは厚いものばかりではなく薄めのものも持っていくと良い。日によって暖かいこともある。

編集後記

グローバル化が進む中、教育機関として学生に世界と競争のできる様々な能力を身につけてもらう必要があると考えている。学生の皆さんには、海外短期研修を通して、言語能力だけでなく、異文化の人々とのコミュニケーション能力を養い、想定外のトラブルに対応できる能力を身につけてほしいと思っている。今回の短期研修に参加された皆さんは本報告書に書ききれないほどの経験をしてきていると思うが、その中でも一部を記録として、共有してくれたことを感謝している。次の世代の学生の皆さんの派遣前準備では非常に活用のできる情報であることは言うまでもなく、留学をしようと思っている学生の皆さんの後押しとなる判断材料としても活用していただきたい。

私がアソシエイトフェローとして、国際教育センターに着任したとき、短期研修の意義に疑問を感じていた時期もあった。しかし、帰国してきた学生の研修を担当しているときに彼らの自信とやる気に満ち溢れた表情を見ると、海外での滞在経験は短くても得られることがたくさんあるという事に気付かされた。短期研修で味わった良い経験も苦い経験も全てが今後の人生において、役に立つ経験となり、学生の人間力を養う良い働きをしていると考えている。

留学に行くか迷っている学生の皆さんには、是非、一度国際教育センターに足を運んでもらいたい。様々な可能性を探るお手伝いをしていきたいと考えている。また、今回の研修から始まった仏語短期研修のように英語圏だけでなく、他言語圏への派遣も積極的に行い、様々な背景を持つ人々と交流する機会をこれからも学生の皆さんに提供していきたいと考えている。

国際教育センター アソシエイトフェロー
松田デレク

2016年度春季 海外短期研修報告書

発行日 2017年9月
発行 お茶の水女子大学 国際教育センター
〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1
Tel. 03-5978-5913

研修・編集担当

国際教育センター
アソシエイトフェロー 松田デレク
アカデミックアシスタント 長塚 尚子

印刷・製本 よしみ工産株式会社

